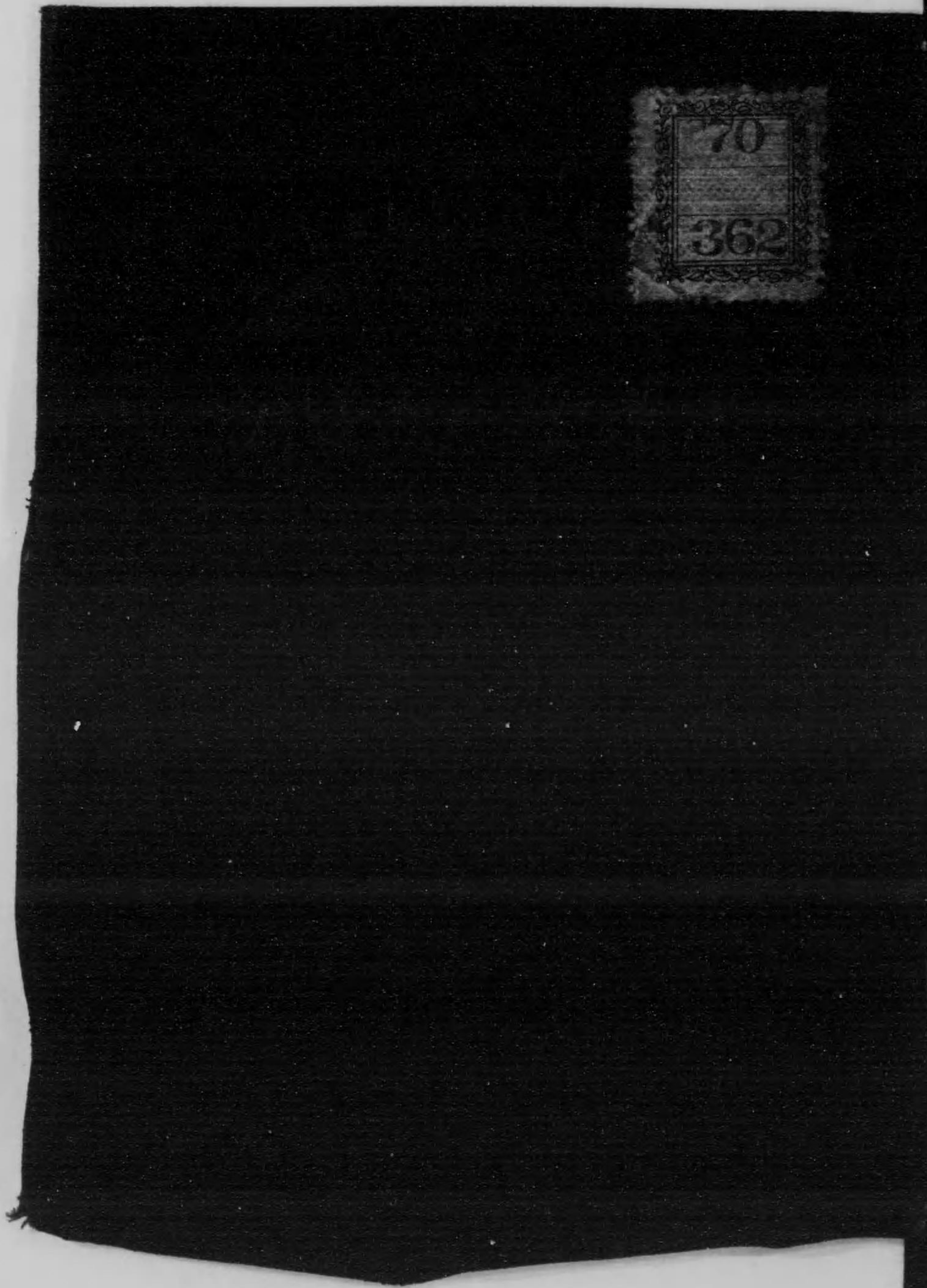
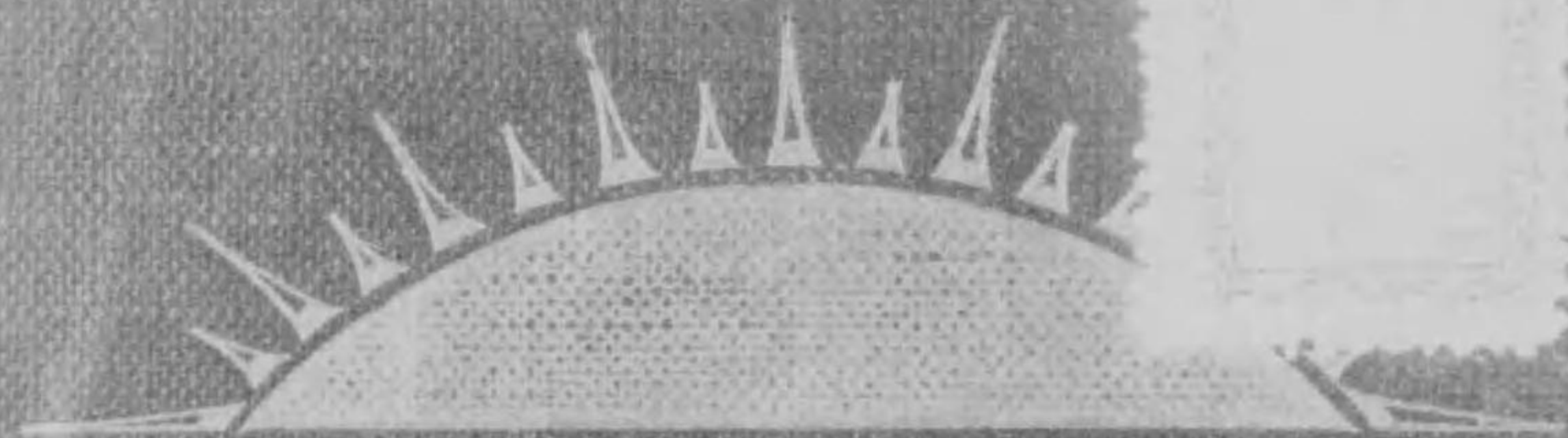


始





日蓮上人遺訓



日蓮聖人之遺訓





## 自序

人生は宇宙そのものである。人生を離れて宇宙そのものを論じ難きは、宇宙を離れて人生を論じ得ざると同じである。而して人生最高の善といふは宇宙人生、人生即宇宙の人體に表現せられたものに過ぎぬ。誠あり徳ある人といふも、偉大なる人格者といふも、要するに人生即宇宙、宇宙即人生を體得した者を指すのみである。

教主釋尊は即ち偉大なる人格者であつた。誠あり徳ある人であると同時に人生最高の善を行はれたのであつた。人生即宇宙、宇宙即人生を體現せられて萬古不易の眞理を遺されたのであつた。而してこの釋尊の御遺志をそのままに體現して、我が日本の國土と國民とに覺醒の聲を擧げられ、等しく人生の歸趣と

宇宙の本體を指示せられて、釋尊と同じく人生即ち宇宙、宇宙即人生を體得せられたのは我が日蓮聖人のみであつた。されば日蓮聖人は偉大なる人格者であると同時に人生そのものであり、宇宙そのものであるのだ。

吾々は聖人によつて苦行危難迫害に自若たりし聖人の克己、忍耐等を學び得えう。吾々は聖人によつて、幾千萬通の御遺文に存する精勵、努力、奮闘をも學び得えう、而して國家の危急に身を挺して國諫至らなかつたに就いても、聖人の憂世の士にして愛國の臣たる所以も學び得えう。併し吾々は此れ以外に學ぶ所があるのだ。即ち宇宙即ち人生を體現せられた一大人格者なる點に於て學ぶべき要があるのである。

東漸せる西歐の思想と文藝とによつて、攪亂せられたる我が

思想界乃至文藝界は、そこに偉大なる印象を吾々に残さしめると同時に、淺薄浮薄なる新しい人達を生せしめた事は事實である、而して此等の人達が現代を呪ひ、人格修養を厭きたらぬものと解して居るのも事實である。されば百の人格論も千の知實名大家の修養論も彼等の一顧を値し得ずして嘲笑を買ひ、新舊、老若は相反目相背馳せるも事であらう。於此、是れ新しい人達の心持を洞察せざる罪と又新しい人の餘りに淺薄なるが故なるを知つて、余は不敬不尊を敢てしつゝ、日蓮聖人の御遺文中より何等かの暗示を提出するに至つたのである。何んとなれば彼等新しい人達は絶えず宇宙の目的、人生の歸趣を探らんとして煩悶懊惱しつゝあるからである。若し一度、本書によつて崇高なる人格、偉大なる人格、最高善徳、誠、恩の何ものなるかを

知り、かねて釋尊、日蓮聖人の偉大なる人格者であると同時に、宇宙即人生である一つの體現者なることを知るに至らば余の幸甚此以上の物はなからう。

生活は困難となりつゝある。文明は急足の進歩を促がして居る。而して幾多日本の現代に惑亂され、思想にも物質にも懊惱煩悶しつゝある者があるのである。此に於て吾々は宇宙即人生なる所以を覚え、併せて日蓮聖人の偉大なる人格者なるを學びて自覺せざるを得ぬのである。

洛東に於て

大正四年十一月十六日

著者識す

## 凡例

一、本書は朝夕人の口誦し易くして、絶えず人格修養に資するに適せる御名句——殊に格言體をなせるものを聖人御遺文中より拔萃したるものである。本来日蓮聖人の御遺文は全體として拜誦するに越した事はないが、その御遺文が長文であり、且難解な所もないとは云へぬ程、聖人は佛教各宗に御精通せられて居たのであるから、本書によつて大體の暗示を得た上、讀者は更に御遺文全體に就いて拜誦せねばならぬのである。

一、御遺文中より拔萃したる御名句は卷末に御遺訓索引としてアイウエオ順に排列して置いたから、讀者は朝夕此によつて引用し人格

●凡例

修養に資する所があらねばならぬ。

一、御遺訓の解釋には、古今、和漢洋に涉つて、學者、宗教家、藝術家、詩人、歌人、俳諧師、政治家、實業家等の口ずさむ言葉引用した所もあるので、此等も亦御遺訓拜誦の傍ら、座談なり、演説、説教、作文、修辭等に應用し得らるゝであらうと思つたから、項目索引中に排列して、讀者の便に具へ置くことゝした。

大正四年十一月

著者

2

日蓮聖人の遺訓 目次

第一 宇宙、自然、境遇、平和、理想境、君臣、仁政、道理と君主、日本國體……………一

第二 道、道理、正邪、公明正大、忠實、正義、公義、信義、孝、忠孝、善惡、善、今日の徳……………二六

第三 人生、天分天職、協同、異體同心、救濟、人格、品位、世態、原因結果、因果應報、毀譽褒貶、凡夫……………六四

第四 理性、理解、應用、心、真心、情と心、性善人の心……………九一

1

●目次

**第五** 解脱、覺醒、徹悟、大悟、徹底、自覺と努力  
 自己觀照、自覺自信、自信、覺悟決心、果斷……………一四五

**第六** 堅忍不拔、自制、刻苦、心の鍛練、知足、反省、畏敬、忠告諫言……………一四四

**第七** 眞の親、親の愛、夫婦、選師選友、教育、圓滿、健康、清淨、貞操……………一六七

**第八** 時、時節、機會、惑世、執着、罪科、懺悔……………一九二

**第九** 釋尊、聖賢、先哲、賢愚、君子小人、佛と宇宙、恩、光明、凡夫と慾、佛の恩、四恩四德……………二一一

**第十** 信心信仰、信仰、教理、實教、依法、修行、體得、法華、女人成佛、外道と法華經……………二四七

御遺訓索引……………一三二

項 目索引……………一一五

目次終



たちわたる 身の浮雲も はれぬべし  
絶えぬみのりの わしの山風

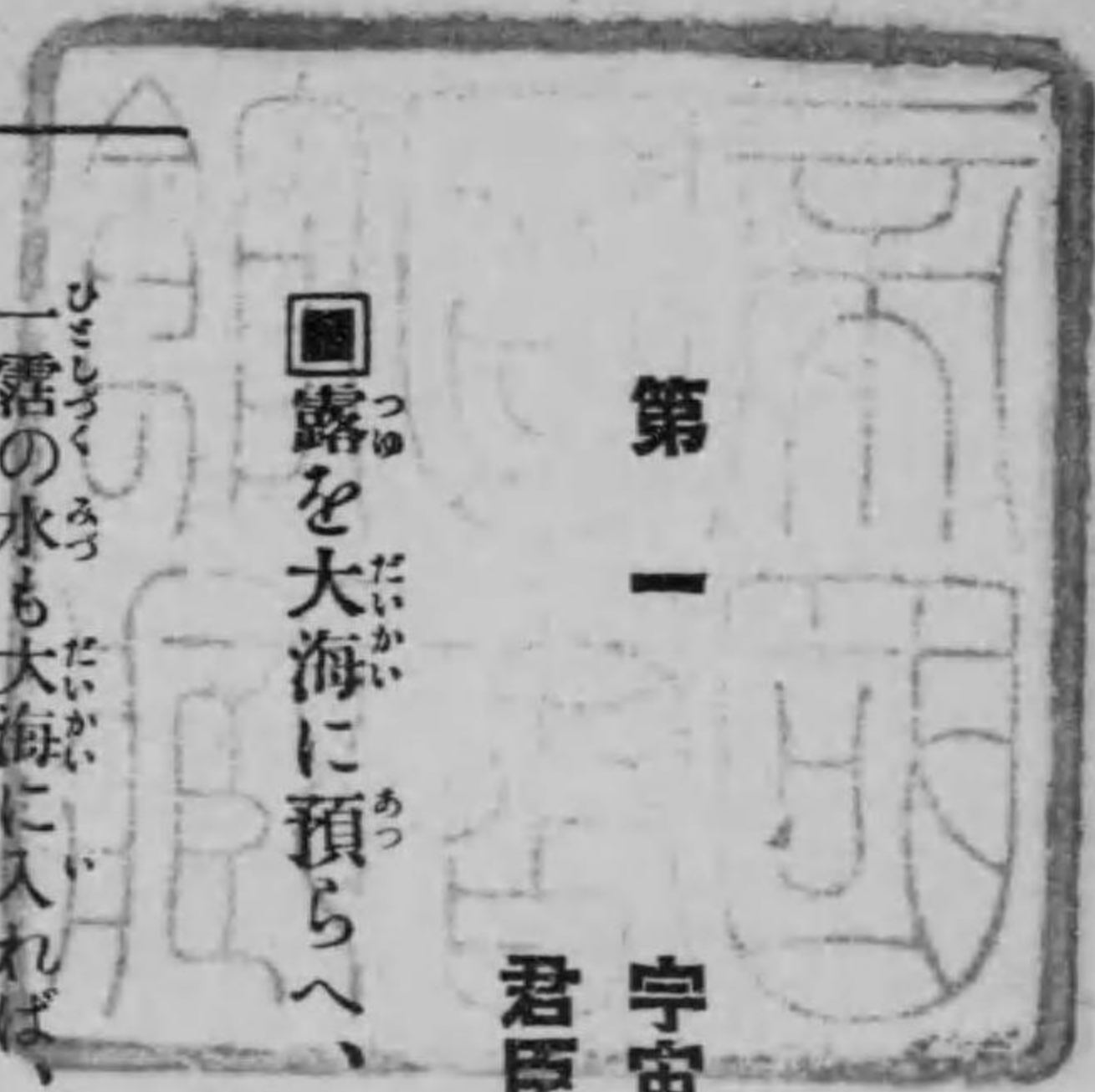
聖人御詠

霜柱 氷の梁 雪の桁  
さきゆく水に 火こそ消えけれ

# 日蓮聖人之遺訓

日蓮遺訓研究會編述

第一 宇宙 自然 境遇 平和 理想境  
君臣 仁政 道理と君主 日本國体



■露を大海に預らへ、塵を大地にうづむと思へ……………(上野殿御返事)〔宇宙〕

一露の水も大海に入れ、人の眼には海に見ゆる。一塵の砂も大山に飛び行  
けば人の眼には山に見ゆる。水と陸とが集まつて地球が出来上つて居るのであ  
る。この地球が一ツの星だぞ知つた時に、世の中は何れほご廣いか數で數ふる  
ここも出来ねば到底想像も及ばぬであらう。この無限無邊涯の凡てを仮に宇宙

●宇宙

こ稱へて人は納まつて居る。由來哲學者は如何ほどの廣があるものかこ、頻りに考へて見たが今では分らずに居る。併し地球の様な星が無數に毎夜肉眼で見られる丈、大した廣さだこ誰しもうなづくであらう。兎に角大きさが想像出來ぬこの宇宙、いくら慾の力が深く、いくら自分に力量があつても人は自分のものにするこは出來まい。既に地球上の歐洲でお互に戦つて居るのですら、武力以外科學の力が入るほご困難を感じて居るので分るであらう。又いくら慾性が募つて居ても、何もかも喰つて了ふ譯にも行くまい。されば人間の慾にも限りがあるこ心得ねばならぬ。而して一步我が身を顧れば、この宇宙の幾千萬億分の一かも知れぬ地球上にうじくして居る幾千万億の一人である。この一人がいくら蕩擻しても、いくら焦燥しても、爲し得るものはたかゞ知れて居る。然るに一度死の手に捕はるれば山の土こなるか、野の土こなるか、海の底の土こなるか、手も足も何にもかも無くなつて了ふ。これを思つて人は無常を感じて

悲觀し始める。是れ哲學の始で詩の始である。然し、一度靈の輝に會へば、人は忽然として身はあつても我れを忘れて宇宙の靈と融合する。例へば星の光に詩を求め、鳥の鳴き聲に悟るがやうである。靜に自分を觀じて宇宙の靈と共鳴し得て、自然と同化するのも夫れ、久しい沈黙の間に我が靈魂の働くに任かせて自然を抱擁し得るのも夫れである。是れ哲學の終りで詩の盡きる所である。そして吾々がこの今生れた哲學の馬に乗り、詩の舟に乗りて、この馬の止まり止まり、舟が着いた時には吾々は宇宙の大こ自己の小なるここのみを觀るが、一度馬がある。それは燃わたつやうな火の色でもない。叢り起る雲の色でもない。黒でも白でも赤でも青でもない。色で表はれるやうで色で表はれて居ないもの、強いて説明の出來得ぬ色で表はれて來る。茲に於て吾々は地球上の小さな人間でも全宇宙を抱く丈の人間こなり得る。是れ人間最高の理想であらう。最大慾に

勝ち得る第一方で最終方であらう。

■良薬に毒を交わる事有るべきや。潮の中より河の水を取出す事

ありや。月は夜に出で日は晝出で給ふ、此の事諍ふべき乎……  
……………(四條金吾殿御返事)〔自然〕

太陽は東から出て西に入る。水は山から出で、海に入る。河は高きより低へ水を流す。是れ自然である。有儘である。事實である。吾々が眼に赤く観青く映するものは赤であり青である。三尺の童子でも此れを曲げることをせない。併し、この有の儘である事實を事實でないと言ひ張て非を押し通さうとする者がある。恰も鎌倉當時の念佛坊主のやうなものであらう。聖人この事實の曲ぐ可らざるを諷められて、此事諍ふべき乎と申されたのであるが、此れを諍ふ者未だ存在して居ないか何うか、吾々は観る必要はなからうか。丁度潮の中から河の水を取り出すやうに、良薬に強いて毒を交へるやうに爲す要用がないにも不拘

事實を曲げて自然に抗ふとするものが随分世の中に居る。而してそれ等の者は自然より與へられたる天分をも自覺せず、使命をも追行せずして、強いて金力権力勢力を以て、美しい自然を破壊し、威嚴のある自然の力に抗して茲に金の力、科學の力に隨喜して居るのである。一は事實を曲げることを如何やうにも思はず、一は自然を破壊して憚らぬのである。今日の政治家、實業家、學者等中に自己の利益の爲、自己を保護する爲、自己の勢力を扶植する爲に、又自己を擁護するに、あらゆる事實を事實なりとせず、自然を破壊して憚らぬ者がないことも云へまい。既に自然に抵抗するは一つの罪惡である。事實を事實でないと言ふのも一つの罪惡である。而してこれ等の罪惡を敢て行ひつゝ、憚らぬに至つては、假令國法の條文に照らす所がなくても、人としては許す可からざる行爲であらねばならぬ。釋尊は自然に存する有の儘の事實を總合せられ統一せられて、五十年間奮闘努力せられたのである。而して自然を尊び、自然の道を

行ひ得るやうに、六千二百有余卷の經典を殘さしめられたのである。今日吾々が解脱といひ、徹底といふも、云はゞ自然を尊び、自然の理に従つて、自然に歸るこゝである。此れに要する努力忍耐、克己も要するに大なる自然に歸る一方便に過ぎぬのである。然るを一部現在の行動を事實にあらず、強いて殺せる虚偽の行爲に新しい人達が云ふのは、未だ眞の自然をも見ず、實の事實を見ないからであるといひ得る。眞の自然は太陽が晝に出るこゝである。實の事實は月が夜光るこゝろにある。而して眞の人生は日と月との教ふる釋尊の御教に存するものである。

■鹽の干と満と、月の出ると入ると、夏と秋と冬と春との境には必ず相違する事あり。……………(兵衛志御返事)〔境遇〕

地から湧き出る水、山から滑つて落ちる雨の水が集まりくくつて谷を出で、小川となり、大河となり海に入る。そこに岩もあれば、清らかく澄む深い所

もある。上から落ちて瀧となる水は嘸痛いこゝだらう。魚が捷んで心落克く遊べる水は嘸氣も清々するこゝだらう。何時か知らぬ間に太陽に吸いこられて水蒸氣となる水ですら夫れくゝの變化がある。佛蘭西の哲學者アンリ、ベルグソンは流轉と稱して凡ての事を解釋した。流轉も要するに變化の一代名詞に過ぎぬ變化は流轉で、流轉は變化である。そして凡て世の中の事々物々々、この變化や流轉の影響を受けて居る。人も自ら變化もすれば事々物々の變化によつて又自らも變化する。昔から境遇によつて人は如何やうの人物ともなり得るこゝ云つて居るのも、要するに變化流轉を認めるからであらう。云はゞ變化なるものがお互に活動して、こゝに彩色をほごし、人を包圍して境遇を作るのも、人の能く知る所である。而して人の知るのは只彩色の濃厚ばかりである。即ち差別のみを見て、その差別によりて感化せられ、やがて詰らぬ境遇とも見、榮ある四圍とも見るのである。差別は比較から起る。醜婦に普通並の女を持ち來れ

ば、その女は美人なるがやうである。併し稍々美しき女に配すれば先の美人は美人とはならぬ。その行き諸る所は誰しも判断に苦しむであらう。所謂美の標準は何んであるか、その絶對を得やうにしても、分る筈がなからう。この美醜のみならず、凡て物を比較してより起るもの、即ち優劣尊卑正邪等は要するに物一つでは出で來ぬ言葉である。假令一つでも自分の頭の中に二つを作つて、比較して其相違から色々の言葉で、その差別を表はすのである。潮の干満も干に對して満、満に對して干である。夏といふも秋冬春に對しての夏である。月獨り中天に懸つて居れば入るも出ることも無い。斯の如く比較から出る所謂相對的の言葉は凡てに於て、吾々は認め得る。而して最もこの言葉を、より以上に含まれるものは、所謂四圍境遇であらう。この境遇に依つて人間が左右せられることすれば、嘗つて作つた人の差別に自分が左右せられることとなる。その時、その時の境遇に於て出來た氣分だとか感情等を、味ひたがる新しい人達

は云はゞ差別のみの眼が高くなる計りで、眞個の自己が生きて居ないのでなからうか。然らば眞個の自己は何んであるか、眞實に人間らしい人間とは如何なるものであるか、問ふならば茲に相對から離れて絶對に入る事だ云ふのみである。即ち差別を捨て、差別に執着すること放棄して無我に入るこそ所謂人間のみの克く爲し能ふ無我忘我の境に入つて、凡ての差別を一丸にして神意や佛の心と冥合することである。凡ての醜も極まつて美となり、劣れるものも究つて優なる所謂絶對善に入ることである。五感のまゝに爲り易きが人間の常、境遇の力、時の力によつて左右し易きが凡夫の常と思へば、殊更に絶對善を求むる要があるではないか。克己忍耐努力奮闘も斯ういふ時に初めて意義があるのである。

■夫れ海邊には木を財とし、山中には鹽をたからとす。旱魃には水を財とし、闇中には燈を財とし、男は女人を命とし、王は民

を親とし民は食を天とす……………(上野殿御返事)〔平和

人は米麥を喰ふ。米麥は日光と肥料と水とを喰ふ。万物皆財とする所に生命を托す。我れのみ身でないこと贅する迄もなからう。されば眞實に天分を樂しみ、天職を愛して眞個の自己を發揮せんとするならば、わが生命の托し得べきものに相當感謝すべき義務があらねばならぬ筈である。然るにわれのわが身を考へて他に及ぼす諸種の關係を無視する所謂自我主義の者がある。曰く眼を閉すれば我以外のもの何かあらん。さればわれありて我のみ尊く、われのみ意義ありて他に求むべからずと、この考へが重なつて性慾そのものを追ふ肉慾主義となるのであるが、これは一を知つて十を知らぬものであらう。聖人此を誡められて——早魃には水を財とし、闇中には燈を財とする……等と申される。世の中の凡てのものは、恚うした關係から成立することに彼等自我本能論

者は氣が附かぬのであらうか。例へば自分の身そのものを知つて、その身に及ぼす米麥、水、野菜、肉類等諸種の關係を知らぬがやうである。既に米、麥、水等の物質の供給がなくては、人は生息は出来ぬ筈である。恰も此等のものや此等の身体に及ぼす關係を忘れたるが如くに言ふのは丁度燈の如き水平なる海に石を投じて世を惑亂するのと同じではあるまいか。物質は物質から供給せられ、需要せらるゝことは今日人の能く知る所である。この供給需要の平かに調和して行つてこそ、始めて平和の世と見ることが出来るのであるが、自分の身に供給せらるゝ物質を忘却しては需要の起りやうもなく茲に調和を逸して了ふのは丁度何物をも食せずして自滅するのと同じことである。世は個人個人に就いても、個々の物質についても、この需要供給の連鎖が一貫して居る。然るに自我のみを主張せんとするのは恰もこの一貫した連鎖を破らうとするのと同じことである。平和を攪亂することになる。攪亂は人の忌む所である。生を愛して執着に

のみ生きる人々の殊更に忌む所である。即ち絶えず連鎖せられたる需要供給の間に程よき調和を望むものである。既に人も物質であるこゝを認め得る以上は半知半解の自我に泥むべきでもなからう。平和を愛するこゝは斯くいふ者も同一であらねばならぬのである。明治天皇の御歌に——四方の海みなはらからこ思ふ世に、なご浪風のたちさわぐらむ。——こある。みなはらからこ思ふこ仰せ出されたのは、物質に需要供給の存するが如く人も依りては依られ、依られては依るの意味であるこ今更くぎくしく申すまでもないこである。昭憲皇太后の御歌に——四方の海皆はらからこむつみなば、世に波風は立たじこ思ふ——こある。皆はらからこむつまねばならぬ。睦む心は供給されるものに感謝尊敬の念を拂ふここによつて起る。丁度聖人の申されるが如く王は民を親として感謝尊敬し、民は食を天の如くに仰いで感謝するやうであらねばならぬ。供給するものに對して感謝尊敬するの念なくば到底平和は得て望まれぬここ明瞭であらう。

瞭であらう。

■闇なれども燈入りぬれば明か也。濁水にも月入りぬれば澄めり  
明かなる事日月にすぎんや……………(四條金吾女房御書)〔理想境〕

そして聖人は——淨き事蓮華にまさるべきや。——法華經は日月に蓮華なり。故に妙法蓮華經に名づく。日蓮又日月に蓮華の如くなり。——こ申されたのだ。何がこの世の中で理想境にして吾々の心持に合致するこも釋尊の御教孔孟の教、耶蘇の教の説ける最高善を他にしてはあるまい。基督教のいふ再生佛教でいふ見性、而してあらゆる道德宗教藝術の教致である主客合一、神身體の境——昔の人が……天地を以て我が家と爲し、虚空を以て我が倉とす……云つた絶大無限に自分を置いた境介こそ、吾等が理想境と稱へ得るのである。恰も闇中に燈の入りたるが如く、濁水に月入りて澄めるがやうに、譬へやうもない清淨にして絶對であるこの境介を措いて他に求むべきものはないので

ある。而して釋尊はこの境介に人を誘ひ入れやうとせられて、五十年間、人に應じ、時に應じて種々説かれたのであつた。そして万人の歸一する所は實に法華經にありと指し示されて居るのである。天台此を疏述し傳教大師は我が國に紹介した點に於て万民の須く畏敬する所であるが、この絶對境に飛び込んで佛敎の精華と正實とを、眞實に理解し此を体得して、等しく諸人にも、その精華を仰がしめ、正實を握らしめやうとして、奮闘努力せられた日蓮聖人は絶對の偉人であつて且つ聖人でなければならぬ。人は思ふであらう。金を望み、權勢に陥り、色に迷ひ、物質に掠はれて何時になりても自分の理想境を發見し得ず風が吹かれて漂よふ小波の如く雨にぬらされては干く雜草の如く、自分の成果も握り得ずば、怒濤破亂に身を處するの處決もなく、餌を採す禽獸と等しく世を送るもの、誠に惘然たらざるを得ぬではないか。そも、理想とは物質によりて實現せられ得べきものではない。わが靈魂によりて成就するのであるに

も不拘 あらゆる科學の智識と黄金の力を以て、自然を破壊して、物質に掠はれながら、茶人三昧の理想境を夢見るはかない浮世の兒共は、須く覺醒して自分の靈魂を鞭撻せねばなるまい。眞の理想は、あらゆる精神の敎ゆる靈界に介在して居るのだ。少くとも法華經に説ける釋尊一代五時の精華を味つて、此を作る要は、兎角惑亂せんとする現代の人々には急務中の急務であらうと思ふ。物質より靈魂へ、現實より理想へ進むでこそそこに理想境が表はれて來るのだ。

■夫れ王は民を食とし、民は王を食とす。衣は寒温をふせぎ、食は身命をたすく。……………(四條金吾殿御返事)〔君臣〕

馬融の言葉に——忠は其心を一にするの謂なり。國の本たるは忠に在り。忠は能く君臣を固くして社稷を安んじ、天地に感じ神明を動かす——とある。其の心を一にするとは心持を全じくすることである。心持を全じくすることは相



憫むこころである。寒暖に衣なき人を思ひ、命の爲の食なき者を思はゞ同情の心が湧くのは誰しも全じであらう。この憫みなくして君臣共にその心を一にするこころは出来ぬ。「大學」に——徳は本なり、財は末なり、本を外にして末を内にすれば民を争はしめ奪ふこころを施す——とある。この徳は即ち憫みであり仁慈である。仁慈ある君主を頂いてこそ、君主の食に民は甘んずるものである。財を奉ずるものである。そして君主無事長久を祈るのである。此を祈つて尙仁慈の心なき君主は到底一國安泰せしむるこころの至難なるは由來歴史が語つて明かであらう。人相憫んで茲に同情が出来る。共に語らんとして共に人の道を歩まうとする。既に個人に就いても協同の美風は憫む情から出来上るのである。此れを全じく君臣の間も相憫むの情が欠けてはならぬ。抑も憫むこころは悲観の謂ではない。心持を全じくするこころいふ絶對の謂である。佛陀の慈悲も心持を全じくした絶對境を指すのである。耶穌の愛も心持を等しくするを教へたものである。

人が宇宙全体を心全じくする絶對境もこれ一つの憫みである。差別に動く人の恒として、眞個の無我に入りたるやうに、我にして我に非ざる絶對境が克く悲しみのある同情に存するを見受けらるのである。この同情の憫み——即ち無我に入つた時に人の心は絶對となり、やがて美德萌芽して人に對して信義を重せしめ、一國に對して忠を發揮せしむるのである。君臣の渾一も同情を措いて求むべきでなからう。

■飢たる代に食を施こせる人は國王と生れて其の國豊なり。……  
……(大田殿女房御返事)〔仁政〕

昭憲皇太后陛下には——民草のうへをいかに思ふ夜の、袖にも露のこほれけるかな——の御歌があつた。御歌に表はれた御心を拜して、吾々庶民は如何の感を抱くであらうか。雨につけ、風につけ、或ひは暑さ寒さの砌、陛下が斯くも吾々庶民の身のうへを思はるゝ御心は、推しはかり奉るさへ涙の種であ

る。後醍醐天皇には——世治り民安かれこいのるこそ、わが身につきぬおもひなりけり——と申うされて、民の安き思ひに日を暮すやうに、願はれたのであつた。太平の世は正しく仁慈に富みませし君主の御座しますによるこそ今更申すまでない。日蓮聖人この仁慈仁慈を説いて——飢わたる代に食を施す——と申うされたのは、仁徳天皇が——高き屋にのほりて見れば煙立つ民のかまごはにぎはひにけり——と歌はれた煙立つ民のかまごの鍋の中の飯があるかなきやを見た給ふ心である。三年の免税に漸く民は飯にありつくを得て、仁徳天皇の御情に泣いた事は歴史が語つて居る。聖人は、この仁慈仁政こそ民安かれ、國富めよと願ふ心を最も捷徑にして目的を貫徹するに早からしむるこそ看破せられて、飢たる代に食を施すこと申されたのではあるまいか。食は老苦男女賢愚の如何を問はず人の生命の第一義なるものである。さればこの第一義を除いて、こゝに民の安靜は望れない。従つて仁政の根本も飢たる代に食を施すこと

でなければなるまい。幸にも現代は 畏くも 聖上陛下が種々の方法で御行幸になれば仁慈の露を洒れさせ給ふことは吾々の克く知る所で、茲に民安くして靜に御代を送り得らるゝ幸福に浴し得らるるの何よりの幸福でなければならぬ。仁慈は仁政となり、世は安靜なる道理は蓋し古今一貫したものである。

■賢王の世には道理かつべし。愚主の世には非道先をすべし。……(開目鈔)「道理と君主」

兎角浮世は譯の分らぬものゝ集りを見て差支ないだらう。眼に一丁字はなくとも、道理を辯へぬ者が多いのである。かゝるものゝ多い世の中の國王は少なくも浮き世の兒よりも賢いからねばなるまい。浮き世の兒ご全じやうな馬鹿さでは素より統率することも出来ねば國を治めることも出来ない。されば一國の君主、一族の酋長たるべきものは浮き世の兒を誘導する丈の修養を要し人格が備つて居らねばならないこと今更云ふまでもない事であらう。然るに古來諸

國の歴史を見るに、寧ろ凡夫のそれよりも愚にして非道を好む君主國王があり、その統治の下に如何に民衆が苦しむつゝあつたかが明かに書かれてあるのが分る。この非道なる君主暴虐なる國王に對して道理を示して反省を促がすこと素より益ない事であらう。彼等は道理によつて國を治めんよりは、國を治むるに私慾煩悩の焰を燃やすのである。非道云はれ、暴虐云はるゝとも、彼等には私慾煩悩の焰を消すことは出来ないものであるから一國の安泰を望むよりも、如何に民衆が疲弊困憊するにこそ此に關せずして、自己一身の性慾を充實して恬然たるのが彼等の目的であるのだ。素より道理の聲が耳朶に入らう筈もなければ、百の説法何等の巧獻を齎し得ざることは當然である。然れども一國の君主にしろ、一家の主にしる愚にして非道を好めば自ら民衆の疲弊、家族の困憊、火を見るよりも明かなことであらう。妻は病床に泣き子は飢に泣くとも、夫なるものは恬然として顧みざることが出来やうか。民は飢餓に苦しみ、人は家

財を奪はれて、疫病路傍に人を葬るを見ればその國を統べるものは誰れか面を背けて通り得られやうぞ。人の性素より善なる以上は慈悲の心を以て此を遇せねばなるまい。この慈悲は即ち釋尊の心である。この慈悲を有する國王こそ日蓮聖人の申さるゝ賢王といふものである。されば日蓮聖人は賢王の資格を闡明せられて「賢王の世には道理かつべし」と云はる。道理は慈悲の心あるものにして始めて植ることが出来、慈悲の心が絶えず道理に導かれて眞善美の境に進み行くことは、道理の流れに慈悲の水が流れて知らずくに漂々たる大海に進み行くがやうではあるまいか。慈悲は道理の先驅であると同時に道理は慈悲の先驅である。慈悲の心に富んだ賢王には道理は花に向へられ、慈悲なき愚主には素より向かへられやう筈もなく、寧ろ非道がその先驅をなすのである。されば日蓮聖人が「愚主の世には非道先をすべし」と申されるのも、是れ万代易らざる金言ではあるまいか。

思ふに日蓮聖人のこの金言は時の北條氏を諷刺して申されたもので——聖人の世には法華經の實義顯るべし等こ心得べし——念佛宗に隨喜せる當時幾万の信徒を誡しめ、且叱咤せられた前提の御言葉である。されば聖人の少く暗  
 中非道を試みる現代の末世にこの金言を三唱して日蓮聖人の徳の偉大なる所以  
 を自覺せざるまい。

善につけ悪につけ法華經を捨るは地獄の業なるべし、大願を立てん、日本國の位をゆづらむ法華經をすて、觀經等について後生を期せよ。父母の頸を刎ねん念佛申さずば、なんごの種々の大難出來すとも、智者に我義やぶられずば用ゐるじとなり。其外の大難風の前の塵なるべし。我れ日本の柱とならむ。我れ日本の眼目とならむ、我れ日本の大船とならむ等と誓ひし願やぶるべからず。……(開目抄)〔日本國體〕

この御言葉は最も有名なものである。この文中には日蓮聖人の全精神が包含せられて居るこいつて宜い位、人を思ひ國を思ひ、而して釋尊の遺志を尊重せられて切實に此を体現しやうこせらるゝ御覺悟が存して居るのである。吾々は眼を大いに開らき人國との關係を究め、人宇宙との關係を探り、而して人佛との關係を闡明して解得せねばならぬ。聖人は——瑜伽論に云はく(彌勒菩薩の述べられた論)東方に小國あり其の中に唯大乘の種姓のみありこ、大乘種姓こは法華經也、法華經を下種して成佛すべしこ云ふ事なり、所謂南無妙法蓮華經なり、小國こは日本國なり(日向記)——こ申され——傳教大師日本にして末法の始めを記して云はく、代を誥れば像の終りの始め、地を尋ねれば唐の東、羯の西、人を原ぬれば則ち五濁の生鬪諍の時なり。經に云はく猶多惡嫉况滅度後こ此の言良に以有るなりこ。此の釋に鬪諍の時こ云ふは今の自界叛逆西海浸逼の二難を指すなり。此の時地漏千界出現して、本門の釋尊の脇こ爲り、一闍

浮提第一の本尊を此の國に立つ可し。月支震旦未此の本尊ましまさず（本尊妙）  
 —こ申うされて釋尊の御教を我が國に建立せねばならぬこ、一大覺悟を定め  
 られたのである。そして法華經の他の諸種の經々よりも優り、これこそが釋尊  
 一代五時の精華にして正實なることを示され、尙宇宙萬象より人生の歸趣、人  
 生の目的、宇宙の本體の融合を求むるは唯一法華經に依らざる可からざる  
 を指し示されたのである。そして聖人は我國體の尊嚴を釋尊の暗示せられたる  
 所に一大統一力の存するを觀取せられて、日本國民の歸趣すべき所以を述べら  
 れたのである。されば吾々國民は茲に一大自覺を要するのである。それは私の  
 みの自覺ではない。我のみの自覺であつて、國體の自覺である。即ち國體を自  
 覺するに共に釋尊の眞意を體現し人生の歸趣に赴く一大自覺である。何んの爲  
 に生くるに非ずして何が我が自覺するのである。云はゞ一舉手一投足の空  
 間、位置、我が身を考へて凡ての空間即ち宇宙より我が身を解釋して覺悟

するこである。而して南無妙法蓮華經の七文字が即ち我であり又日本國であ  
 つて、全宇宙そのものであることを知得せねばならぬのである。要は神身一体の  
 境に處して泰然自若たる人物が凡ての權威よりも人生の歸趣に協ひ、而して此  
 れより出づる行爲——即ち天職を愛して精勵、克己、努力、奮勉が日本國の精  
 靈であつて、兼ねて全宇宙の精神であると共に釋尊の教そのものであること考ふ  
 ることが急務中の要務である。然に、只地球上より日本の小なるを觀たり、又  
 歐米の文物制度に眩惑せられて、意味深き日本を輕視し、乃至は泰西の思潮に  
 押し流されて日本の美しい思想を等閑視しやうとするものがあるのだ。素より  
 此等の者は一を知つて十を知らざるものであるから、吾々が諍らふ價値のある  
 ものでもないが、併し吾々は此等の者の淺慮なるを悲しむと共に、一日も早く  
 日本國體が世界の精華であつて、萬人の隨喜すべき國柄なる所以を知らしめて  
 やらねばならぬのである。

第二

道	道理	正邪	公明正大	忠實
正義	公義	信義	孝	忠孝
善惡	善	今日の徳		

■大海の初は一露なり。一を重ぬれば二となり。二を重ぬれば三乃至十百千萬億阿僧祇の母は唯一なるべし……………

……………(妙密上人御消息)〔道〕

阿僧祇は無数といふ意。智度論に——僧祇は奏には數といひ、阿は奏には無といふ。問ふ幾時を阿僧祇名づく。答ふ天人中に能く算數を知る者も、數を極めて知るこゝ能はざる、是を阿僧祇名づく——とある。塵積れば山となる昔から云はれた文句の裏を考へば聖人の申さるゝやうに須彌山の始を尋ねれば一塵に過ぎぬのである。世間十方幾百億の母も因を尋ねれば矢張りこれも只

一である。一が二を生み三となり次第々に數を増してこゝに森羅萬象を呈し來る。されば昔から哲學者は世界の根本は一である、こゝ一元哲學を主張して居た。道も全じである。國道といひ縣道といひ道路といひ通路といひ、畦道といふも初は人間一步の足印より作られるのである。修養の道も全じである。忍耐、克己、勤勉、節儉といふも、正直、雅量、勇氣、誠意といふも、仁慈、博愛、溫柔、愛敬といふも、もこは徳を修めん心からの道である。徳を修めんこすればこゝに忍耐、克己せなければならぬ。これには誠意も要すれば雅量も勇氣も要す。一つの忍耐は外に出でゝは仁慈でなければならぬ。博愛でなければならぬ。外部よりの刺戟に對しては溫柔愛敬の念厚からねば克己の効果は納められぬ。道は一である。人の行ふ道も一つである。釋尊は梵網經に一切の行は信を以て首と爲す、衆徳の根本なり。こ申されて信を人の道の根本とせられて居る。道を信するこ篤くして自ら知るこ明かなる者は釋尊の申さるゝ信を理解した

人である。信は誠にしてまことこころである。孟子や其他の先哲は誠は天の道なりといひ、天の道を誠にするは人の道と云つて居る。天の道は七夕の流るゝ星の道ではない。人の道は全様凡て宇宙萬象の通りうごする道である。誠ありて信あり、信あつて人の道が誠となる。誠の人の道が人をして崇高なる人格に作り上げしめる。これには釋尊の説かるゝ諸乗もその一つ、先哲の説ける幾多の遺訓もある。その道を歩まうとすれば忍耐や克己や勤勉や節儉や幾多の細路を通らねばなるまい。又正直にして雅量あり、誠意にして勇氣に富める種々の道を履まねばならず、仁慈、博愛、溫柔、愛敬などの細かい通路をも通つて見ねばならぬ。道を出でゝ細路に入れば必ず一つの大道——人道——天道に歸るが宇宙の根本義であらう、日蓮聖人この義を闡明せられたことして此の句を味ふが宜い。

弓弱ければ絃弛るし、風ゆるれば波小さきは自然の道理なり

……………四條金吾殿女房御返事（「道理」）

春暖かくて夏暑く、秋涼しくて冬寒い事は知れ切つた事であらう。太陽が出れば明るく、夜は暗いのにきまつて居る。是れ枉ぐことの出來ぬ事實である。事實が連続して一つの道理となつて人間の頭の中に泌み込む。泌み込んだ道理をそのまゝに行ふて始めてその人は常識のある人云へやう。然るに字義そのものに拘泥して、この道理を無視する所謂常識に欠けた學者、軍人、商人等が随分世の中に居る。また人が觀たる事實を事實にあらずと強ひて隠蔽して道理を無視する政治家も實業家も居る。だから世の中は馬鹿の寄り合ひ、非常識の衆だ。識者の眼に睨まれるのも無理はない。一匹の蟹を見て動物を携帶すべからずと吐責した鐵道係員に對して、江戸兒が己の半風子を如何せん云つて、彼の常識なきを嘲つた事があつた。事實を知らないものは道理を無視する。道理を無視するものは末技に拘泥したがる。丁度一字一句を論ふて、人生の根本

義を没却しやうとする法律家のやうであらう。學説が何うの愆のこいつて、究むべき道理を捨てる學者連の如く、命令々々のみを云つて服従の本意を知らない軍人の如く、政黨のみを知つて立憲政体の根本を忘れやうとする政治家のやうに、或は眼前のみの利に捷して最後の利得を考へない實業家のやうなものであらう。人は根本に生きて末技を操縦すべきものだ。然るに末技にのみに拘泥して、その根本義を没却して何うして我に道理を履めり常識あり云云へやう。少くとも、人として生存せんとする限りは、人生の第一義を握み、その根本に生きて、末技を操縦する丈の果斷を要する。自覚自覺する能はざる者は主として事實を尊重して其の間に動かす可らざる道理を發見するここが人生の第一義を握み得る所以だこ心得ねばならぬ。

●傍を好んで正を忘れんに善神怒を成さざらんや。圓を捨て、偏を好まんに惡鬼便を得ざらん哉……(立正安國論)〔正邪〕

人の履むべき本道を捨て、横道を通つて行く者を見ればいくらお人の宜い神様でも黙つて居られまい。惡鬼は直に飛んで来て得たり賢しき暴威を愆にするのである。日蓮聖人は「如カズ彼ノ万祈ヲ修センヨリ此ノ一凶ヲ禁ゼンニハ矣」こ喝破せられて居る。この傍さいひ、偏さいひ、又この一凶さいひのは法然上人の指す淨土門をいふのである。日蓮聖人は法然上人が撰擇集中に「道禪師聖道淨土ノ二門ヲ立テ、聖道ヲ捨テ、正シク淨土ニ歸ス」こあるを見られ、又曇鷹法師——(支那の人、五十一歳にして淨土宗に歸せり)——の往生論の註に「菩薩阿毘跋致ヲ求ムルニ二種ノ道アリ、一ニハ難行道、一ニハ易行道ナリ。此ノ中ニ難行道トハ、即是聖道門也。易行道トハ、即是淨土門也。淨土宗ノ學者先須ク此ノ旨ヲ知ルベシ。設ヒ先ヨリ聖道門ニ學ベル人ト雖モ、若シ淨土門ニ於テ其ノ志アラバ、須ク聖道ヲ捨テ淨土ニ歸スベシ。——夫速カニ生死ヲ離レント欲セバ、二種ノ勝法ノ中ニ、且聖道門ヲ關イテ選ンデ淨土門ニ入



レ。淨土門ニ入ラント欲セバ、正雜二行ノ中ニ且諸ノ雜行(讀誦雜行、禮拜雜行等)ヲ抛ツテ、選ンデ正行(讀誦・觀察・禮拜・稱名・讚嘆供養)ニ歸スベシ。此あるに對して「近クハ所依ノ淨土三部經ノ唯除五逆誹謗正法ノ誓文ニ背キ。遠クハ一代五時(釋尊一代ノコト)肝心法花經第二ノ若人不信毀謗此經、乃至、其人命終入阿鼻獄ノ誠文ニ迷ヘル者也」ミ喝破せられて「悲シイ哉瞶瞶ヲ樹タズ。痛シイ哉徒ニ邪信ヲ催スコト。故ニ上國主ヨリ下國土民ニ至ルマデ皆經ハ淨土三部ノ外ノ經無ク、佛ハ彌陀三尊ノ外ノ佛無シト謂ヘリ」ミ歎かれた。正道を進むべきは素より人の第一に執るべき務である。正々堂々天下に耻ぢざる底の雄々しい行爲は正道を履んで始めて得らるゝ。今更言ふまでもない。此に反して邪を好み強いて惡に親めばそれに相應した結果を齎し來ること。此は明なこゝで人は産を失ひて彷徨し、只餓死するを待ち、國は飢饉疫癘遍く乞客路に溢れ死人眼に滿つるであらう。是れ善神の怒を成し、惡鬼の暴威を

恣にした結果を見て差支ない事である。斯る事なく萬民易らかに枕を高くするを得、國は富んで益々強國ならんことを、人は正々堂々正道を歩み、國は秩序正しく、其施設を全くせねばなるまい。日蓮聖人徒に彷徨せる民衆を救はんとして叫ばるゝこの一句は當に北條氏時代にのみ適合すべきものでなく、万代盡せぬ我が日の本の教訓として吾々は誦せねばならない。

■智者と申すは國のあやうきを諫め、人の僻事を申し止るこそ智者にては候なれ……………(賴基陳狀)「公明正大」

マーカス、アウレリアスは——凡そ何事にありても、汝をして憎惡せしめ、精疑せしめ、或は誑はしむる如き、若くは汝をして光明を忌ましめ、壁又は幕を要せしめ、世人の顔を正視する能はざる如き行爲に傾向せしむることは斷じて汝の利益と思ふ勿れ。——云つて居る。この言葉を眞實に行つて居る人が日蓮聖人の申される智者である。世人の顔を正視するこゝの出来る行爲は自

分の行爲に何等疚しいところが無いからである。何時も正々堂々直截に行ふことが出来るのは自分の胸に一點の曇りがないからである。所謂公明正大の人であるからである。一點の曇りがない自分の胸の鏡に絶えず光るこの公明正大の光が一度國家安危のかゝる所を照し、又人の道ならぬことを照す、茲に國を料理する人を諫め、尙道ならぬことを敢て爲さうとする人に諫告するやうになつて來るのである。否何うしても自分の公明正大の光で何處までも人を助け、國を救ふことに一生懸命ならざるを得ぬのである。爲政治家の爲にする政治を行つたり、政治の根本義を没却して自ら政争の具となり、民衆本位であるべきにも拘らず抑壓と屈服を民衆に強いるのを見れば何處までも極諫して思ひ止まらしむるのは所謂智者の職能であらねばならぬ。婦人の貞操を破り、又妻ある夫と相通じ、或は人を傷け、殺し、家を焼きなぐる人を見れば、何處までも此れを思ひ止まらしめ、忠告するのも智者たるもの、職能である。此等の職能を捨

て、智者なるもの、資格を問ふのは猿を見て人たれと強いるがやうではないか。斯のやうに分り切つた事を何故日蓮聖人は今更にいられるのであらうか。茲に深く考て自得する所があらねばならぬ。名聞利慾に血迷へるが浮世の兒の恒であるから名聞利慾に敏きもの——所謂權謀術數に妙を得たるものが智者である。兎角人々が誤解して居るからではなからうか。吾々は今この御言葉を讀むにつけては尙更この感を深くする。世路の波がいよゝ高く押し寄せて來るこき——科學の進歩につれて世が益々複雑になり生活の苦困が益々その度を高むるこき——人は愈々名聞利慾の念を深め、腦裡に撤して拭う可らざるに至る今日此頃であるから、吾々は益々この智者を従容死に就くこき宛然平日の務をなすが如き靈性の人なりと解釋せんこきに努めねばならぬのである。只公明正大を以て終生の題目とする人であらねばならぬ。

■人有りて世にあらんが爲に國主につかへ奉る程に、させる誤は

●忠實

無けれども、我が心のたらぬ身上に怪しき振舞重なるを、猶我身には失ありとも知らず、又傍輩も不思議とも思はざるに、后等の事によりてあやまつ事は無けれども、自然に振舞悪しく王なんごに不思議に見えまいらせぬれば謀叛の者よりも、其失重し。此の身に失かゝりぬれば父母兄弟所從なんごも輕からざる失に行なはるゝ事あり………(妙法比丘尼御返事)〔忠實〕

これは日蓮聖人が——我等がはかなき心に推するに、佛法は唯一味なる可し。何れも何れも心に入れて習ひ願はゞ生死を離るべしこそ思つて候に、佛法の中に入つて悪しく習ひ候ひぬれば謗法三申うす大なる穴に墮ち入つて——云々中されたる比喩に云はれた御言葉である。香川景樹の歌に——訪ふ人もなき山かけの、櫻ばな、ひこり咲ひてやひこり散るらん——こある。咲く花の心は山里でも、庭園でも全じである。殊更に人に見せやうこして決して咲いて居

●忠實

るのではない。雪に咲いては枯れる梅の花が、名残を枝に止めた時、やがて咲き初むるのが櫻のならひである。春光三日にして、一陳の風に清らかく散つて春を送るのは、吉野の櫻でも、向島の櫻でも、また訪ふ人もなき山里の櫻でも全じである。櫻はさくらの使命を果して、もこの樹にかへるのである。人もこの櫻が花の使命を果す全じやうに、自分は自分の使命を忠實に果すのが本来の面目ではあるまいか。自覺は自分の使命を果さうとする一大動機となるのは今更いふまでもなからう。この自覺に根を据ゐて我が使命を忠實に行なうことれば、行ふ道に影のある筈がないのである。人の噂に昇る振舞ひが出やう筈もない。善悪の煙が立ち昇らう筈もない。然るに何か三人に變に見ゆるのは何うたここか考へば、そこに自覺の足らぬ所、自分の使命を完全に覺らぬ所があるに氣が附くであらう。自覺の刃は人の噂や、影口を切り捨てるほど鋭いものである。この刃に心を込めて磨がかぬ爲に、光はにぶりて人が自ら悔り、蔑

●正義

るに至るのである。櫻は花の使命をはたすにも、五慾に迷へる人間のあさましさには、我が使命をも覺らず、忠實につこむることも知らないで居る。まして信仰に蘇へることも知らないで現實に捕はれるあさましさは古も今も全じであらう。自覺——忠實の連鎖に自分を見出せば櫻は櫻の花の如く、清淨、潔白に身を處するこゝが出来るのである。

■星を見て月に勝れたり、石を見て金に勝れり、東を見て西と云ひ、天を地と申すもの狂ひを本として、月と金は星と石とには勝れたり、東は東、天は天なんご有りのまゝに申す者をばあだませ給はば、勢の多きに付く可きか、只もの狂ひの多く集れるなり。………(妙法比丘尼御返事)〔正義〕

獨逸の碩學パウルゼンは——道徳的習慣である正義は人の生命、利益の侵害を制し、他人が此れを行ふこゝするのを防ぐ意志及び行爲の習慣である。それは

●正義

人の生命及び利益を自分のものご全じやうに見て、これを尊敬するこゝから起つたのだ。凡そ人の利益ごいふものは身体、生活、家族(自分の生活を擴大する)、資産(行動の方法を司る)、名譽(自分を理想的に存在せしめる)、自由(自分の目的を徹すこゝの)にあるのだ。——ご述べて正義を規定して居る。利益ご生命ごを根基ごして正義を解釋するこゝは、やがて社會、道徳等に及ぼすこゝが出来るのである。何んごなれば社會、道徳を要するに人の利益ご生命ごが根基ごなつて居るからである。そこで日蓮聖人のこの御遺訓に就いて述べて見る。人の身体、生活、家族、資産、名譽、自由を破毀し侵害するこゝが素より正義に悖つて居るこゝはパウルゼンの解説で明かであらう。斯く正義を認めたる以上、正義に背した行爲は星を見て月に勝り、石を見て金に勝るご考へ、東を見て西ご云ひ、天を地ごいふて憚らぬ者ご一般である。星は星で月は月である。石は石で金は矢張り金である、その優劣如何の差別は、正義不正の優劣如

何の差も全じやうなものである。東を正義とすれば西は不正の固り、天を正義とすれば地を不正の固りであらう。併るに東を西と見、天を地と見て、星と石を月と黄金よりも勝れりを見るのは、云はゞ正義の何ものなるかを知らぬ者の眼か、乃至は強いて正義を捨て、不正に傾く者の眼であらう。知らざる者は教へてやらねばなるまい。知りて知らざる姿を装ふ者は言語同断の極みである。併るに、世は太平なりと納り返る大正の現代でも我れ正義の先驅者なりと主唱して、不正を働く者が多いと聞く。これ等は正義を看板として不正を賣り國家を乱して人心を惑乱するこゝ蓋し知りて知らざる姿を装ふ者よりもその罪重いものであらねばならぬ。謀權はこの手段を上なるものとして稱へるかも知れぬが斯くも世を乱して知らざるうちに國家を亡ぼすこゝから考へば、吾々は、假令日蓮聖人が謗法を誹るゝこの御言葉でも、これを引用して世を警しめねばならない。警しめられても、人が多く附く所に向くのが何時の世を通じてのな

らひであるとするれば、聖人の申さるゝが如く、只もの狂ひの多く集る世の中である。人より尊ばれ、自分も体現せんとするこの正義が兎角、策士の懐中に入りて、正義變じて不正の奴となるばかりであらう。而してかゝる策士が總ての民心を收攬し、物質上の實權を握るこしたならば弱者——汝の名は只正義なりといはんばかりであらう。日蓮聖人今この正義を説かれて斯くは申されたのではないにしろ、吾々がこつて以て正義の意味を此に托して闡明して、幾多の人を警しめ、自ら反省し得ば寧ろ幸福ではないか。

■月は西より出で、東に向ひ、日は東より西へ行くこと天然の理りの磁石と鐵と、雷と芭蕉との如し。誰れか此の理を破らん。

明治天皇の五箇條の御誓文中に——廣く會議を興し、萬機公論に決すべし。——舊來の陋習を破り、天地の公論に基くべし。——と仰せられた。大隈重

信は「國民讀本」に——立憲政治とは、憲法に本づきて國家を統治するの政體なり。立憲帝國の憲法は、君主統治の大權を明確にし、臣民の自由と權利を保障し、また其の義務を規定し、之に參政の權を與ふ。政に憲政にありては、民意を重んじ、公論を採り、上下共に國事に任ずるなり。——こある。民衆の愚なるにも拘はらず、民衆を尊重せられて憲政を行はせられた明治天皇はその仁慈限なきこ誰しも感泣する所であらう。然るに一二政治家が憲政の本領を没却したる事實が從來頻々として新聞紙上に傳はるのも人は克く知つて居るであらう。是れ天下の公論に背するもの、天下の公義を顧みない者であるこいはれ得る、人素より性善である。善に向つて猛進せんとする幾多の善男善女の意志を尊重し得ないのは、必ず爲にする所があるからである。吾々が日月背行の運動は認め得られぬ。所謂天然の理を破つて敢て爲す人爲的の籠疇は認め得られぬ。小にしては一國の政治、一家の家政、大にしては人衆の教、人の道に於て

も全様である。釋尊は身自ら人の道を行はれて所謂かの小なる憲政のやうなものを偉大に人道に敷れたのだ。而して日蓮聖人はこの憲政擁護の急先鋒となつて幾千百種の御遺文を遺されるがやうに、粉骨碎身して、危害災厄を戰はれつゝ終身努力せられ、一度釋尊の憲法、法華經に存するこ知つた聖人はこの擁護を普及に努力せられたのであつた。是れ天の理を尊重せられる一片の赤心が生む所であらねばならぬ。素より電光の如く火石の如くこの句を見るべきものでなからう。

■國王の寶には左右の大臣あり。左右の大臣をは塩梅と申す。味噌塩なければ世渡り難し、左右の臣なければ國治らず。……………(南條殿御返事)(信義)

國王に左右忠良の臣なければ其の國治まらざるこ、今更いふまでもない。藤原鎌足あつて大化改新が出来、和氣清磨極諫して國平かこなつた事は歴史を

讀むもの、等しく感んずる所であらう。明治維新の大業も、聖聖文武に御座しました明治天皇の御英断によるこは申せ、三條公、木戸公等の補弼も預つて力あるのは人の記憶の新たなる所であらう。臣なくして國政を統べ治めることの難きは、丁度吾々の生活に味噌塩の欠くべからざるに全じである。茲に臣の要用を必要とするれば、優良なる國政を行はんとする國主は、須く忠良なる臣を待たなければならず、平和安泰なるを願う民衆は、須く忠良なる補弼の臣を國主の左右に奉らなければならぬ。聖德太子、上下を誡めて曰はく——群卿百僚、禮を以て本と爲せ。其れ民を治むるの本は、必ず禮にあり、上に禮なき時は下齊はず。下に禮なければ以て必ず罪あり。是を以て君臣禮あれば、位の次乱れず、百姓禮あれば國家自ら治まる。——こそして太子は——信は是れ義の本なり、事毎に信あるべし。其れ善惡成敗は要す信にあり。君臣共に信あるこそは、何事か成らざん。君臣、信なければ萬事悉く敗る。——こ中され君臣の間

あり禮あるべきを要す憲法に布かれたのである。禮なく信なく、所謂信義なるものを君臣より除り去れば一國泰平は得て望むべからずである。後世何時までも永らく歴史に、一國泰平にして民衆を安らかに止まらしめた筆執り得らるゝのも君臣に信義の存するからである。茲に於て吾々は信義の感念に富める大臣を左右に奉ることに努力せざるまい。政黨の存否は抑も末の話しである。

●人々に父二人なく、母二人なし。……(賴基陳狀)「孝」

子に兩兒はあつても、父に二人、母に二人はない筈である。自分を生んで呉れた父は唯一人の父で、母も唯一人の母であることは、三尺の童子でも、克く知つて居る。このやうに分りきつたことを、日蓮聖人は今更のやうに申うされるのは、何うした譯か能く考へて見るに、云ふまでもなく、唯一人の父、唯一人の母が即ち親であるから、能く大切にす可し申うされるのである。室

鳩巢の詩に、ハカノ海

（鳥居清波）

我世人に勸む父母に孝に。父母の恩爾知るや否。懐胎十月の苦言  
ひ難し。乳哺三年手を釋たす。疾病に逢ふ毎に更に心に關し。續  
を教へ人に成り配隅を求む豈に徒に我を生んで劬勞を愛せん。  
終身我が爲に忙しく奔走す。子養はんご欲する時親在さず。極悶  
きに報ひんご欲すれば空しく首を回らす。風木をして涙襟を沾し  
むる莫れ。我世人に勸父母に孝。——こある。親は情の人である。否情

の人であらねばならぬのだ。さればこそ暑き寒きに拘はらず、我が食を細くし  
てまで、子に不自由なれかし願ふのである。雨降らば傘なきや、雪ふらば  
足痛からずや心を宙にして氣を配るのは、情でなくて何んであらうか。余人  
には佛たり得べからずご雖も、子には佛たるべしこは、如何に蒙昧なる人種の  
親にて全様である。この情あればこそ人は笑ふて和氣の漂ふのも、是れ唯一人

の父があり母がある爲ではなからうか。情の海に人が掉して、行きつ戻りつ通  
ふ浮世に、波風荒く立ぬのも唯一人の父や唯一人の母がかけた情の賜物ではな  
いが。新しい人達が一部の理窟に血迷つて、人間萬事情の浮世であるのに、何  
故に情の海に理窟を見出さぬのであらうか。情——慈悲——愛——われを捨て  
て物そのものに飛び込む心が凡ての人間の行爲を評し、凡ての哲學を解し、凡  
ての宗教を語るここに何うして氣が着かぬのであらうか。理想を捨て、現實の  
みに生きやうとする人、清らかな信仰生活を望まないで、刹那々々の刺戟に自  
分を見出さうとする人々は、須く物質上の概念を捨て、靈そのものを掴み出  
さうこの念が湧かないのであらうか。五色の酒に自分を見出すこきこ、靈その  
ものに自分を見出すこきこ、乃至絶對そのものに自分を見出すこきこ、そこに  
情の海に深淺の度が自ら生ずるここに氣が附けば、日蓮聖人のこのお言葉に  
深大なる意味が含まれて居るのに氣が附くであらう。



■人見を受けたる者忠孝を先とすべし………(開目鈔)〔忠孝〕  
 身体髮膚父母に之を受く、敢て毀損せざるは孝の始也。先哲の云つた如く、  
 孝は百行の木なりと、吾々が小供の時に教へられた意味を日蓮聖人は更に訓誡  
 せられるのである。されば日蓮聖人は——忠も又孝の家より出たり。孝も申す  
 は高也。天高けれども孝よりは高からず。又孝も厚き也。地厚つけれども  
 孝よりは厚からず——孝より説いて忠を解釋せらる、人格の崇高如何は忠孝  
 を先にするや否やで分たれる。何故に親はその子を慈しむのか、何故に賢王は  
 その民衆を愛するかを考へても尋ねても究めることこの出来ない人の至情は社會  
 の油である。一家の泉である。この油によつて社會は運轉しても休止すること  
 なく、この泉から一家には美しい心が湧いて歡聲で満たされる。往時より忠孝  
 の例を示して子弟を薫育するのも要するに社會を圓滿に運行せしめ一國一家を  
 して圓滿に納めしめむが爲なること今更云ふまでもない。併し、こゝに吾々が

留意して据かねばならない事がある。それはこの忠孝が基本となりて、凡ての  
 人倫の道が築かれ道徳が組織せられてより深く此を信じ此を遂行せんとして努  
 力したが哀しい事には一つの撞著に逢會してから忽然として凡ての道徳の權威  
 をあやぶみ、その本源であるべき忠孝の意義すらも疑ふに至つた事である。こ  
 れはニイチエの本能思想やトルストイの懷疑説及びイブセンの自我思想等凡て  
 西歐の近代思想家文藝家から唱導された結果かも知れぬ。又昔の生活のやうに  
 呑氣なる時代と異つて現代は風流三昧に没頭するこゝが出来ないほゞ生活には  
 至難を感じ、只如何にして生活して行かむかとする考より他を思ふ余裕がな  
 く、従つて衣食足らざれば禮を知らざるがやうに孝なり忠なりといふ固苦しい  
 考が出て來ないのかも知れぬ。尚彼等が切實に抱く現今の思想は現今は決し  
 て太平樂を併べ得られるやうな樂天地でなく、寧ろ苦勞をせねばならない修羅  
 地である、何を好んで人の子となるを望まうや、素より親は子を養ふ義務ある

は前世からの約束であり、宿世の因果である。さればこの苦痛多き現代に子に向つて親に孝を強いるは余りに胴慾ではないかといふのである。既に子として一家を建たしめ社會の一員として活動せしめ得るやうに養ふは親としての當然の義務である以上この義務が完了すれば子は思ふに任せて活動するのであるから、それ以上義務の報償として子に孝養を強いてはならぬといふ思想である。此れには整然たる理窟がある。深く自然科学を根柢としたればこそ、そこに動し難い理由が存在して居る。それは皮相を去つて内部を深く探らねば已まない近代科學の檢索で今まで外皮の如く人を教へたる道徳に對して解剖し始めたからであつた。盲従——屈従を去れよ叫んだニイチエやイブセンの言葉にも、それ相應尊敬すべき理由が介在して居つたのであつた。されば只威壓するがやうに孝は百行の本なりと、その動かす可らざる理由を譬し提けて孝を教ふることも今の新しい人達には何等の効果をも齎し得ないで、寧ろ嘲笑を以て向へられる

のは當然である。釋尊は人間の種々相を觀破せられて種々教へ方を變わられた。この權威ある新しい思想——自我が固つた人達の思想に忠孝を説くも、それ相應の方法を要するところ素より云ふまでもない。如何にして此等の人々に忠孝を闡明し、道徳の本源を披歴すべきか。人身を受けたる者忠孝を先こすべしといふ日蓮聖人の御言葉に如何にすれば彼等新しい人達は歸依するであらうか吾々は再思顧慮せざるまい。印度詩人タゴール氏は——佛陀はランプに向つて「汝の油を捨てよ」を命じた。ランプは燈火をかゝけん爲に、自分の目的を果さんが爲に油を犠牲にする。そこにランプの解決がある。愛の擴充がある。犠牲が犠牲として止まり、苦痛として止まる間はその犠牲は眞實のものではない。犠牲が愛によりて溢れ出づる時に犠牲は私達にこりて歡喜となる。「我れ愛するが故に」犠牲するの犠牲でなければならぬ。佛陀の自己拋棄の眞の意味はこゝにある。愛は絶對である。「我れ愛す」こゝに、そこには何の理由も

ない。たゞ愛するが故に自己を捧げるのである。愛による犠牲は苦痛や努力の感じがなくて、たゞ歡喜と讚美を持つて居る。利己心より生れて來る犠牲は常に努力と苦痛を持つて居る。——云つて居るこの言葉の中に存する意味が自我を振り廻して已えない人達に日蓮聖人の御言葉がより明瞭に分明ならしめて來たであらうと思はれる。何故に忠孝を先にするかといふ問題は何故に自己を抛棄して愛の絶對境に彷彿し得るかといふのに全しであらう。されば日蓮聖人の人身を受けたる者忠孝を先とすべしと云はれたのは、當に近代思想に觸れざる人々のみを訓諭せられたばかりでないことが明白に了解されたであらうと思はれる。

■惡の中の大惡は我が身に其の苦を受くるのみならず、子と孫と末へ七代迄もかゝり候ひけるなり。善の中の大善も又々かくの如し。

……………(孟蘭盆御書 [善惡])

惡とは何んなものか。善の反對である。即ち善でない人間の行爲である。然らば善とは如何なるものか、自分を眞實に理解して、個性を發揮し而して宇宙の本體と配合するのが善である(善の條下第五十四頁参照)これ人間最上の徳であつて、また誠の本體である。この本體を發揮し得て實の人間となり、發揮し得ずして眞の人間たり難きことは、後世の孫の孫、その孫の孫までも全様であらう。聖人これを説かる。我が子可愛いと悟つた時、我が孫可愛いと思つた時は既に遅い。人の爲すを見て、やがて來るべきに悟り得、感じ得て、須く善につかねばなるまい。是れ人生生れて最大の權利である。同時に人たる資格を備へん爲には最大の義務であらう。されば善惡の區別氷然として解得した時、吾々は靜に吾々の來し方、現在、行く末を考へねばならぬ。軍人になるか、商人になるか、學者、僧侶、藝術家にならうか迷ふのは抑も末の話である。眼を人生の大局に据ゑて善惡の力ある標準に我が身を掛けて計らねば、その人一

生は恐らく不幸であらう、否。七代までもその不幸を残すであらう。

■悪は多けれども一善に勝つ事なし。………(異體同心事)〔善〕

西田文學博士は——善は自己の内面的要求を満足するものをいふので、自

己の最大なる要求は意識の根本的統一力、即ち人格の要求であるから、之を満足するに、即ち人格の實現といふのが我々に取りて絶對的善である。——

意識の統一力であつて兼ねて實在の統一力である人格は、先づ我々個人に於て實現せられる。我々の意識の根底には分析のできない個人性といふのがある。

意識活動は凡て皆個人性の發動である。各人の智識、感情、意志は盡く其人に特有なる性質を具へて居る。意識現象ばかりでなく、各人の容貌、言語、舉動の上にも此個人性が現はれて居る。肖像畫の現はさうとするのは實にこの個人性である。此個人性は、人がこの世に生れると共に活動を始め死に至るまで種々の經驗境遇に從うて種々の發展を爲すのである。科擧者は之を腦の素

質に歸するであらうが、余は屢々いつた様に實在の無限なる統一力の發現であるを考へる。それで我々は先づ此個人性の實現といふことを目的とせねばならぬ。即ちこれが最も直接なる善である。健康とか智識とかいふものは固より尙ぶべき者である。併し健康、智識其者が善ではない。我々は單に之にて満足はできぬ。個人に於て絶對の満足を與へる者は自己の個人性の實現である。即ち他人に模倣の出来ない自家の特色を實行の上に發揮するのである。個人性の發揮といふことは、其人の天賦境遇の如何に關せず誰にても出来ることである。如何なる人間でも皆各其顔の異なる様に、他人の模倣の出来ない一あつて二なき特色をもつて居るのである。而して、この實現は各人に無上の満足を與へ又宇宙進化の上に飲くべからざる一員ならしむるものである。從來世人は余り個人的善といふことに重きを置いて居らぬ。併し余は個人の善といふことは最も大切なるもので、凡て他の善の基礎となるであらうと思ふ。眞に偉人は

●善

其事業の偉大なるが爲に偉大なるのではなく、強大なる個人性を發揮した爲である。高い處に登つて呼べば其聲は遠い處に達するであらうが、それは聲が大きいのではない、立つ處が高いからである。余は自己の本分を忘れ、徒らに他の爲に奔走した人よりも、能く自分の本色を發揮した人が偉大であると思ふ。併し余が此處に個人的善さいふのは私利私慾さいふこととは異つて居る。個人主義は利己主義は厳しく區別し無ければならぬ。利己主義は自己の快樂を目的とした詮り我儘さいふ事である。個人主義は之を正反對である。各人が自己の物質慾を慾にするさいふことは反つて個人性を没することになる。豕が幾匹居ても、其間に個人性は無い。又人は個人主義を共同主義を相反對する様に云ふが、余は此の兩者は一致するものであると考へる。一社會の中に居る個人が各充分に活動して其天分を發揮してこそ、始めて社會が進歩するのである。生物學者は今日生物は死せずさいつて居る。意識生活に就いて見てもその

●善

通りである。人間が共同生活を營む處には必ず各人の意識を統一する社會的意識なる者がある。言語、風俗、習慣、制度、法律、宗教、文學等は凡て此社會的意識の現象である。我々の個人的意識は此中に發生し、此中に養成せられた者で、此大なる意識を構成する一細胞にすぎない。智識も道德も趣味も凡て社會的意義を持つて居る。最も普遍的なる學問すらも、社會的因襲を脱しない。所謂個人の特性さいふ者は、此社會的意識なる基礎の上に現はれ来る多様な變化にすぎない。如何に奇抜なる天才でも、この社會的意識の範圍を脱するこゝはできぬ。反つて社會的意識の深大なる意義を發揮した人である（キリストの猶太教に對する關係が其の一例である）。眞に社會的意識は何等の關係なき者は狂人の意識の如きものに過ぎぬ。——斯く社會的意識なる者があつて、我々の個人的意識は其一部であるから、我々の慾望の中より其他愛的要素を去つたならば、殆んど何物も残らない位である。我々の生命慾も、主なる原因は

他愛にあるを以て見ても明である。我々は自己の満足よりも反つて自己の愛する者、又は自己の属する社會の満足に由りて満足されるのである。元來我々の自己の中心は個體の中に限られたる者でない。母の自己は子の中にあり、忠臣の自己は君主の中にある。自分の人格が偉大なるに従うて、自己の要求が社會的となつて來るのである。——善は一言にていへば人格の實現である。之れを内より見れば、眞摯なる要求の満足、即ち意識統一であつて、其の極は唯他相忘れ、主客相没するこいふ所に到らねばならぬ。——實地上眞の善は唯一つあるのみである。即ち眞の自己を知るこいふに盡きて居る。我々の眞の自己は宇宙の本體である。眞の自己を知れば常に人類一般の善を合するばかりでなく、宇宙の本體と融合し神意と冥合するのである。宗教も道徳も實に此處に盡きて居る。而して眞の自己を知り神と合する法は唯、主客合一の力を自得するにあるのである。而して此力を得るのは我々の此偽我を殺し盡して一度

此世の欲より死して後蘇るのである。此の如くにして始めて眞に主客合一の境に到るこいふ出来る。是れが宗教、道徳、美術の極意である。(善の研究) —— 善に就いて述べられた事がある。利己の念を去り、私欲の絆を斷ち、忘我無我の境に入つて神の心、佛の心と融合會通するのが眞の自分を知つた事になるのである、これが眞實の善である。明治天皇陛下の御製に——目に見ぬ神の心に通ふこそ、人のこゝろの誠なりけり。——と仰せられたこの誠が即ち眞實の善である。日蓮聖人が一善に勝つ事がないと云はれた善も、要するに、この善を指のである。孝が善であるこいふ、忠が善、節制が善であるこいふ、乃至勤勉、克己、忍耐が善だといふ只行爲の一部分を目して稱するが如き善も、全然其の趣旨を異にして居るのである。されば人間といふ大樹が社會といふ大地に根を下ろすが様の善も云ひ得られるので、これが人生の凡ての行爲、凡ての活動を包含するこいふは大樹の根が土も小石も岩も包擁して動かぬのと同じで

あらう。然るに只部分的の善を以て道を説き人を教へるのは、假令、方便手段として見認められるとも、人生根本の底に横はるこの眞實の善を披歴せねば到底人を濟度教養するここが出来ないと思はねばならぬ。克く心を落ち附けて善の意味を考へるが宜い。

■根深きときは枝葉枯れず、源に水あれば流れずはかず。火はた

きく飲くれば絶えぬ、草木は大地なくて生長することあるべからず。……………(華果成就御書)「今日の徳」

この御言葉を見て、直に吾々は次のやうな事が言へるであらう。徳深きときは行爲乱れず、身に徳あれば心はかず、心は徳飲くれば絶えぬ。人生は修養なくして生長することあるべからず——こ。愆ういへば近頃の新しい人は、また徳だ、修養だ云つて居るに侮蔑するかも知れぬ。今此等の人の爲に云つて置く。「人形の家」社會の柱を書いた文豪のヘンリック、イブセンは晩年に於

て「建築師」や「海の女」を書き「吾等目醒の頃」を書いた時には、確に靈の覺醒を呼んで居たではないか。白耳義の文豪マーテルリンクは——併し現代は明かに心靈の活動を目撃し得る。心靈の出で、は急迫し威嚇して突進しつゝある。恰も寸時の余裕も余捨もなく命令を導奉せよと命するが様に——現実に執着するここから掠はれずに生き延びやうとする近代人の傾向を述べて居るではないか。吾々が徳を修めるここは社會の人の爲の徳を修めるのではない。國家——家庭——親族——他人の爲に徳を修めるのではない。對手に迫つての徳ではない。これよりも意味が深く、人生により以上の價値を促す、もつこ内面的に有意義なるものゝ爲である。一言にして云へば自分の爲の徳である。自分の靈魂の爲の徳である。少くも心靈の覺醒から出立した徳を修めやうとするのである。それは執着から云へば解脱である。拘泥から云へば撒悟である。彼のマーテルリンクが云つたやうに「永遠の沈黙」を求めて自分をそこに見出すことであ

●今日の徳

る。沈黙そのものの中に自分の思想——情緒——気分——感情——心持を保有して、そこで自分を観るこころである。ゾラ、モーパッサンは事實そのもの、人生を見やうとした。イブセンは問題として知らざる人に事實から人生を見せしめやうとした。マーテルリングやヴェルアランは心靈其ものの中に人生を見せやうとして居るのである。併しこれは現實に泥んで居る人には六ヶ敷からう。慾と肉と戀に掠れる人には出来難くからう。少くとも一日一時間沈黙を持続し得られるだけの人でなければ出来なからう。坐禪を見て笑ふ人には到底出来得やう筈もない。寧ろ四六時中、暇あれば坐禪し得るがやうに沈黙しつゝ自己を觀照する人でなければ出来ないのである。これを爲し得て即ち今日の徳といふものが出来るのである。坐禪するものもその一方、日蓮聖人が勧められる法華經を眞實に讀むこころもその一つである。この沈黙の徳を充分に躰現し得ればそこに人——家庭——國家——社會に接して昔のいふ徳が現れて來るのである

●今日の徳

他人の爲の徳は我が身の爲といふ昔の徳も、自分の爲の而かも内面的に深く要求して、そこに人——家庭——國家——社會に有徳の効果を示す徳もよほそこの趣を異にして居るのである。この徑庭の存するをも思はず、徳といへば風呂敷で頭を襲はれるやうに思ふ近頃の若い人は、まだく新しいこは云へまい。凡ての努號よりも、一瞬の沈黙が如何に人生を撤底せしむるに効果があるかを知らない若い人達は、若い時は再び來ないといふ言葉の中にのみ新しい味を知つて、眞の人生——新しく眞の人生が沈黙によつて得る徳そのものにあるを知らないで居るのである。沈黙と人生——人生と徳とが如何に新しく、此を行ふ人が所謂眞の新しい人であるをも知らないのである。對象のみに自分を見出す以外に自分そのものに自分を見出すこころが全く新しいもの、うちの新しい味である事を知らぬのである。少くとも日蓮聖人の眞意の存する所を推了して自得する所がなければ駄目だ。



第三

人生 天分天職 協同 異体同心  
 救済 人格 品位 世懸 因果  
 因果應報 段譽褒貶 凡夫

■源濁りぬれば流清からず、天曇れば地暗し。……………(種々物御消息「人生」)

日が照ればこそ、草木も伸びる。月の加減で潮も満る。人は歩けば棒に當る。云つても、そこに理想がなければならぬ。理想は無限で目的は一時だ。云つても、歩めば棒に當るのも理想に誘はれた路草であらう。そして當つて喜ぶのも人生、當らずして泣くのも人生、儲は運命を呪ふて、自我を振り舞ふのも人生。色々である。種々である。服装で見れば乞食も人生、大臣も人生、兎角差別が世の進むと共に繁雑になつて来て、吾々を驚かす。驚かされて自分を忘れ

て居る人もある。驚いて自分を省みて更に自分を忘れる人もある。忘れて自分の理想を知らぬ間に握手した時、人は大悟する。自覚する。自覚し得て茲に光ある人格を作る。この人格によつて出する流れは靜にして清らかく無限であらう。天曇つても闇夜に歩むことも自動車の光りが知らぬ間に、自分の前にあるやうに光る。この光りを受けた人は後世にその名を留めやうとする。善男善女は集つて余光を望みたがる。斯の如き人格を備へ得た人は古來釋尊を以て第一者。吾々は仰ぐであらう。丁度日が照つて草木が伸びるやうに釋尊の御光で吾々は無邊際の境に自分の伸び得た實相を見るのである。恰も月の力で潮が干満になるがやうに吾々は釋尊の御力で如何様にでもならう。決心するがやうである。而してこの決心の息が知らぬ間に人生の相對から脱して絕對に入る道へ導いて行く。こゝに人格が出来るのである。要するに釋尊一代の諸經の眞髓たる法華經が凡ての人生の歸趣を語るがやうに、この人生の歸趣によつて吾々は絶対に

## ●天分天職

入るこゝが出来るので、絶對に入れば差別はなくなつて了ふのである。これ眞の人生でなければならぬ。而して差別に動く人達には流れの清きを見るがやうに、光明の光に浴して喜ぶやうに、感ぜしむる唯一の人生でなければならぬものである。

■火は焼きて照らすを行と爲し、水は垢穢を淨むるを以て行と爲し、風は塵埃を拂ふを以て行と爲し、又人畜草木の爲に魂となるを以て行と爲す。大地は草木を生ずるを以て行と爲す、天は潤すを以て行と爲す。………(生死一大事血脈鈔)〔天分天職〕

火でも、水でも、風でも、夫れく自分で自分の仕事をする。天地間にありごあらゆるもの、それく自分で自分の仕事を遠慮なく行つて居るのである。されば人間も人間の仕事をふべきものであらう。智は萬物よりも深く、情は萬物よりも厚く、意は萬物よりも固い人間が、人間としての仕事―即ち天職を

## ●天分天職

行はないで置けるものであらうか。智惠の浅い犬ですら、主人大事に一家を守る。情の薄い鶏ですら卵を産んで子を育てる。案外臆病な雀でもいさこならば大軍を作つて戦をいさむ。然るに與へられたる自分の職業を愛せず、爲すこゝもなく、一日を費し勝たぬ人間は智に於ても、情に於ても、意に於ても萬物より劣つて居る。云はざるを得ぬ。素より生命を愛すればこそ職を愛するのではあるが、爲すこゝもなく徒食するのは云はゞ吾が生命を愛さぬものであらう。斯る者に、人道―愛―慈悲を説くも、何等の効果は納められやうもなからうが、併し萬物各々生命を愛するが如く、如何に低能兒も雖も、わが生命の惜しきこゝは知つて居る。生命を愛するこゝが、茲に職業を愛せしむるの一動機を興へるものであるから、各自天分天職を覺らしめるこゝに努力せずばなるまい。やがて自覺の聲につれて人の行ふべき道を指し示し、自己の履むべき道を教へ、人生最高の理想が人格修養に自悟自得にあるを覺らしめねばならぬ。

かくてこそ水火草木が各自に行き爲るに習ひ、自ら天分を悟るが如き不見識を  
敢てせしめずして悠々天分を楽しみ、天職を愛して精勵一番する好男兒たら  
しむるであらう。釋尊の言句、恰も吾々の心臓を刺すがやうではないか。

■松榮ゆれば柏悦び、芝枯るれば蘭泣く、情無き草木すら此の如  
し、何況情あらんをや、又父子の契をや。……(法蓮抄)〔協同〕

これば父子の情を述べられたのであるが、凡て世の中は情といふ油を注ぐか  
ら、旨く治つて居るのを述べられたを見て宜からう。世の中の油——社會が  
廻轉する油が——耶蘇は愛の名付け、孔子は仁に稱へ、釋尊は慈悲に申された。  
この愛といふのも、仁といふのも、又慈悲といふのも、要する所は若し自分が  
あの人のやうだつたら何うだらうかと思ひわすらふやうな情から湧くのであ  
る。この、あの人のやうだつたらいふ想像がこゝに同情となり、大きく發展  
しては協同といふ美德が生れて來るのである。云はゞ自分等も全じやうな心持

で或る事を爲し遂げるのも、一つの同情から起るので、その物事三人に對し  
て一種の愛を起し仁を拂ひ、慈悲する心があるからである。凡て世の中はこの  
情がなければならず、松榮ゆれば芝枯るれば蘭泣く、人は他人が榮ゆれば此を悦び  
芝枯るれば蘭が泣くやうに、人の零落し行く姿を見れば、此を悲しんで情の露  
で、出來るだけ世話するが宜いのである。必ずしも父子兄弟のみの肉親の間柄  
ばかりでなく、萬物一視同仁を見て、須く佛の慈悲をそのまゝに行はねば、自  
分の身も心平かに安らかに、靜かに世を送ることは出來ず、社會も慙ういふ情  
の油がなくては絶えず衝突、蹉跎して治まることもなからう。世の中が廻れば  
そこに情が入ることは、丁度車の油を要するのと同じで、この情の油を持たな  
いで、人思ひ／＼に浮き世の道を歩むことは、恰も毎時油が切れて廻らぬ車に  
殊更求めて乗つて居るやうであらう。聖人草木すら情ありに申されて誠めらる  
ゝこの言葉には深い意味があると思はねばなるまい。

●異体同心

■一人の心なれども二つの心あれば其の心舛ひて成することなし  
百人千人なれども一つの心なれば必ず一事を成す。………  
………(異体同心事) [異体同心]

一兔を追つて一兎を得ず三人が云ふやうに、自分の心の中に、あれもこれも  
と思つて居るべきには、何事も出来ずして了るのである。況して憊うすればよ  
い、と思ひながらこれに反對のものに心が捕はれて、未だに所決すること出  
来ず迷ひに迷ふやうでは、到底事の成就は望まれない。此に反して皆が皆まで  
全じ心持ちで、一所懸命に努めば假令幾百千人居つても、一つの事が旨く出来  
上るのである。體は異つて居ても、心さへ同じであれば物事の成就は何んでも  
ない。聖人が申うされるのは此處を云はれたのである。何うしても我が邦に勝  
利を得さしめやうとして、我が將卒が悪戦苦闘遂に北國の強國を破つたのも、  
その一例であらう。一家共同して生活難に戦かひ、遂に平和なる家庭に勝ち得

●異体同心

ることも、その一例である。自分の心に既に迷ふ處あれば何等の平和も安心も  
得られざるに全時に、人は同じ心持ちで暮さねば到底一生平靜にして餘裕の存  
する生涯を送ることも出来ぬであらう。然らば心の迷はざるやうにする一つの  
標準と同時に人々と同じやうに心持を等しく抱く一つの標準は何であるか。茲  
に吾々はこの標準を求めたくなる。それは云はずも徳を修めること。六ヶ敷  
云へば身神にも絶對智に入ることである。即ち凡ての執着を絶ちて、身神混  
一の境——永遠の沈黙に入ることである。必ずしも死すまいふのではない。死  
するが如く靜に自分の心靈を据へ置くことである。物に接してはその物に心靈  
を靜に据へ置き、人に接しては靜に自分の心靈を人の精神中に据へ置くのであ  
る。斯くすれば所謂徳なるものも生じ、人格なるものも出来て來るので、一に  
は解脱と共に事物を愛し、一には大悟すること共に自分の天命を天職を樂しみ  
愛するに至るのである。こゝに天命を樂しみ、天職を愛する心があれば、總て

の物事の成就には熱心と努力が生ずるであらうし、一致團結の美風が起る。今更いふまでもなからう。日蓮聖人は人の迷はざる爲に、法華經をその標準として示され、人の異心ならざるがやうに法華經の行者も自任せられて、釋尊の眞實の御教を傳へやうとせられたのであるが徒に大言壯語せらるゝとして看過してはなるまい。異身同心、云ふ可くして行はれ難きは衆愚の常である。是れ同心し得可く、迷はざるに至るべき一大光明を見ぬからである。須く法華經を開卷して自得せずばならないではないか。

●人に食を施すに三の功德あり、一には命をつぎ、二には色をまし、三には力を授く。………(妙密上人御消息)〔救濟〕

日蓮聖人は尙施食の功德を詳しく述べられて曰はれるに——命をつぐは人中天上に生れては長命の果報を得、佛に成ては法身如來に顯れ、其の身虚空に等し。力を授くる故に人中天上に生れては威徳の人となつて眷屬多し、佛に成つ

ては報身如來に顯れて蓮華の臺に居し、八月十五夜の月晴天に出たるが如し。色をます故に人中天上に生れて三十二相を具足して端正なる事華の如く、佛に成つては應身如來に顯れて釋迦佛の如くなる可し——三。法身如來といひ、報身如來又應身如來といふも素は一つの如來で、只抽象の理體が、時や機に應じて具体化されて行く過程をかく分つのである。既に、人に食を施せば第一に生命を持続せしめることは今更いふまでもないことで、第二には、その人は元氣づいて、自ら活動の色を起し、次第々々にその人は安心立命に身を居して行く以上は、成佛しても、法身如來の空より機にのぞみて、遂に釋迦佛の如く端正に濟度する如來なることが出来るのである。されば只人に食を施す三云つても、施される者が生活能力のない乞食同様に見てはならないのだ。少くとも、この哀れなる者も我が與へる食に依つて、遂には釋尊の如き佛なるものであらざりて、與ふべきものであらう。譬へ、生活能力がないものにして、只

自分が與ふるこの食餌が如何にその人に功德なるかは一に命をつなぎて、法身如來となり、二に力を與へて報身如來となり、三に色をまして應身如來なるのであると思はねばならぬ。今の世は生活難に苦しめる時代である。渾身の勢力を消耗しても、それに相應の食を求むることが出来ぬ世の中である。年々卒業する學生は就職難に啣て居る。労働者は資本家に壓倒せられて、身神の勞に對する報酬を得られないでこぼして居る。人は皆餓死せんばかりに戰慄せる阿修羅の現代にあつて富豪は美衣美食に飽きて、濟度の念毫末もないものである。施すこいふ事は強いて自分の徳を施される者に強いやうにするのだと思つて居る、彼等であるから、乞食を見れば我れ損すべしとて與へず、寄附を申し込めば我れ利用せらるゝなりと思惟するのである。されば施すここの眞實の意味を知らざるこ甚しいこいふ可きであらうか。吾々は、譬し、利己に趨れる乞食に食を與へよこ強いざるにもせよ、譬し、衆生を濟度するに金を以てせよ

こ云はざるにもせよ、少なくとも世道人心に裨益を與ふる公共事業に彼等富豪をして、より以上の金員を出費せしめることに努力せねばなるまい。一部の社會主義の如き無謀なる理屈は儲置き先づ吾々は今日富豪として金の勢力に自惚るゝ者を第一に濟度し、然る后平等に釋尊の指教さるゝ所を闡明せねばなるまい。お金こいふ言葉が兎角衆生を麻痺せしめる現代にあつては、麻痺せしめざるやうにして衆生の心を統一せねばならぬ。麻痺より復活せしむる藥は主として富豪等の自負自尊心を打破して后に作らねばなるまい。日蓮聖人、暗に此を諭さるゝこの御言葉は如何に吾々を刺戟して現代の腐敗を救濟せよこ暗示されたやうで只驚くのみである。

■鍛はぬ金は盛なる火に入れば早く蕩り、氷を湯に入るとか如し  
 劍などは大火に入るれども、暫くとけず、是れ鍛へるなり。

……………(四條金吾殿御返事)〔人格〕

佛蘭西の科學者バスカルは——人は萬のもの、中で最も脆弱なもので、宛も蘆葦のやうなものである。併し、人は克く考へる蘆葦である。自然は人を殺すときは、武器を持たないで、一片の蒸氣、一滴の水で殺して了ふ。併し、假令、自然が人を斯く容易く殺すとも、人は自然より偉大である。何んとなれば人は自然の爲に自分が死ぬことを知つて居ても、自然が人に優れる点は、自然は少しも知らぬからである。(實想録)——人の思考力の偉大なるを述べて居る。思考はあらゆる智識を生む。智識は究み極まつて人を絶對境に導く。そこに差別がない。相對がない。そして人はそこで無限大なる宇宙の力に同化しやうとする。凡ての智識を得て個性の尊重を自覺して、主客渾一の境に入るのである。所謂人生最高の善を行はしむるのである。この善を躰得して、こゝに始めて人格が出来上がる。それにはあらゆる克己、忍耐、堪忍を要したのであらう。あらゆる鍛練、琢磨、切磋を要したのであらう。併し一度この善を躰得し、人よ

り見れば有獨の士に見え、誠ある者に見られ得るに至つて、その人の光は燦爛たるものであらう。假令、翻弄せんとする運命の手が漲つて來ても、譬へ災厄危難の恐ろしい雲がかぶさつて來ても、泰然自若たり得るに共に、自滅するに至らぬであらう。丁度鍛ひたる劍が大火に遭つても、漸く蕩けずにあるがやうである。劍の光は人格の光、人を切るこゝに亂麻を斷つが如き劍のやうに、人を感化するこゝに絶大にして無際限であらう。聖人この意を述べんとして名刀を比喩に持ち來らる。善に努力し得ざるものは、恰も名刀にて膽を冷からしめられたるが如き感があるであらう。

■源濁りぬれば流れ淨からず、身曲りぬれば影直からず。……………(一谷人道御書)〔品位〕

井上甫水の歌に——文字しらぬ身にも心に徳あれば、暗夜も晝の心地こそすれ——こある。眞暗の夜でも明るくて心持の克いのは我が身に徳が備つて居る

からである。譬へ眼に二丁字がなくても、心が正しくて修徳の念が厚ければ、何事をするにも、すらくく滞りなく出来て心が平かである。この意味を日蓮聖人は、心を源にたごへられて恁のやうに申されたのである。何時か知らぬ間に澄む水の流れでも、その源が絶えず濁つて居れば到底澄み切るやうな美しい水はならぬ。月のさす影でも、我が身が真直なればこそ、地に寫る姿も真直に寫るのである。心正しからざれば身は濁れる水も異ならず、徳備らざれば地に寫つる我が身の影も曲るこ今更いふまでもないことであらう。聖人は——天雲れば地暗し、父母謀叛をこそせば妻子亡ぶ、山くづれば草木倒る習なり——人の心も修徳も行狀も結果もこの關係を明に申されて居る。今この關係を新しがる人のそれに比較して見るに少くとも、動搖限りない、あはたがしい影がそれ等の人々の胸に寫つて居るのが見ゆるであらう。よし心が正しくても、修徳の感念が薄い丈に地に寫る自分の影も打ちふるひて止まぬのである。自然のま

を悦ぶ人は何故に性善をそのまゝに天下に恥ぢずに表白しないのであらうか。刺戟を求むる人は何故に亂れない淨かな靜かな徳に生甲斐ある人生を求めないのであらうか。自分を強いて殺すのではない。自分の身を一時引き締めて余裕のある心に生きやうとするのである。新しい人達は身を自由にして、そこにあはたがしい人生を求めて居る。それよりも尙新しく方面を變へて一層身を引きしめて生活難にも恐れなない氣分を持続する丈の余裕のある修練を何故に積まうこそぬのであるか。物質のみに刺戟を求めて満足する人は何時か知らぬ間に混濁の流れに身を投じて居る人である。何時か知らぬ間に暗路に迷ふて自分の影さへも見失ふて了ふ人である。修徳のみに刺戟を求めて人の道を歩める人は何時か知らぬ間に清淨なる流れに人間味を見出す人である。何時か知らぬ間に明るみに辿つて我が影の正しくて直きを見る人である。日蓮聖人が御遺訓にもこれ丈の意味が含んで居るので、刹那の快を味ひ一時の氣分に酔ふとする人



には吾々は殊更にこの教訓を勧めたいのである。

■木は閑かならんと思へども風やまず、春を留めんと思へども夏となる。

………(妙密上人御消息)〔世態〕  
兎角世の中は盲千人の譬へのやうに道理の分らぬ人が多いのである。昔から烏合の衆云つたやうに浮き世には只わい／＼騒ぐ耶次馬が多くて眞實に道理を解する人が少ないのが古往今來のならひである。この多い多数の力を以て世の中が轉變推移して行く以上は、百日の説法屁一つに終らぬことも限らぬ。一大眞理を提けて此を衆愚の眼前に展開せしめば、衆愚はこの眞理を解するよりも先づ奇異の眼を光して此を迎へやうとするものである。解脱といふ大木に人を静めて止まらしめやうとしても風が吹いてその人を止まらしめないやうに、麗かな春に美しい氣分を溢らかして人心を樂しめてやらうとするれども、何時か知らぬ間に夏が來りて人を壓かしめやうとするのみに全じて、人の爲、國の爲、社

會の爲に思つた事が靜かに考へて道理を究めやうともせぬ民衆の爲に實現せられずに終るこゝが多いのである。浮き世といふものは慙うしたものだ。三感念して偕黙つて了へばそれでは濟まされぬ。鳥が騒ぐがやうに任して置いては、國は亂れ世は攘亂して所謂社會の秩序は茲に破壊されて了ふであらう。されば一世を誘導し人心の歸趣する所を闡明し此に迷へれる民衆を引き入れやうとする者は、如何に衆愚が罵詈しやうとも如何に刀杖を加わやうとも泰然自若として自分の進むべき道を活歩せねばならぬのである。日蓮聖人、幾度の災難危難迫害に遭遇せられても、御自身の道へは遠慮會釋もなく進まれた事は皆人の知る所であらう。それこいふのは世の中の奴は盲千人で、道理の分らぬ者が多いのであるから、此等の者ごもを一々氣にしては法を述べること出来ず、何日か知らぬ間に法華經の有難味が分るこして先づ世の學者や先達を相手に謗法、正法の如何を述べやうこの一大勇猛心があつたからである。あゝこの勇猛心!

●原因結果

今にして此を何處に求めやうか。現代誰にか探ねやうぞ。一國を料理せんこする者は如何の道理を辨じて居るであらうか。一世を誘導すべき任を有する現今の學者は如何の見識を有して居るであらうか。群衆心理を利用するも宜からうが日蓮聖人の如く直截に出で、愈々獍猛に努力する快傑が居ないのであらうか。木閑ならんこするに風を止め、春を留めんこするに夏を待たしめる一大強力を有する快男子が出て來ぬのであるか。生活難じて縮み上れる人々は眼を大局に据ゐて猛省する所がなければならぬまい。

■高山に登る者は必ず下り、我人を輕しめば還つて我が身に輕易せられん。形狀端嚴をそしれば醜陋の報を得。人の衣服飲食をうばへば必ず餓鬼となる。……(佐渡御書)「原因結果」

或る人の句に——貫はずにちぎれば柿の澁きかな。——こあつた。旨さうに熟つて居るから、一寸失敬し、うこして、取つて喰つて見たら澁柿だつたのだ。こ

の一寸失敬しやうこする心が凡夫のあさましい所である。丁度人を輕蔑し、徒に人の行爲を誹謗して、却つて禍を招くのこ同じである。人を呪はゞ穴二つこ昔から人の口に昇つて居る句の通り、凡て人を侮蔑し誹毀し又は人の財貨等を掠奪盗用すればそこにその罪業の報として靦面自分の身に懊惱苦痛を受けるやうになるのだ。花咲けば實を結ぶが様に一つの現象からは必ず他の現象を表はすのは、人間萬事皆全じである。山に登れば必ず下らなければならぬこもその一つ。雨降らば土地霑ふこもその一つ。原因から結果を生み、その結果が原因となりて、又結果を生むこも丁度春來り夏來り秋去つては冬來るのこ全じである。そこでこの原因なるものに正邪曲直是非差別するこが出来てあらう。前世の宿業は邪か曲か非でなければならぬ。云はゞ人が見て惡ろしこなすもの、自分が行つて良心に不愉快を與ふるものは、素より正でもなければ直でもない。又人に誇り得らるゝものでもない。惡因は何時か知らぬ間に自

●原因結果

分の身を責め自分の心を苦しめるやうになつて來るのである。日蓮聖人は凡ての人に、この道理を示されんが爲に、人を輕蔑し、人を誹謗し、人の財貨を奪ふべからずと諭されて居るのだ。この句は時の北條執權や他宗の僧坊等を誡められた句であるが、今日我々の教訓として誦しても決して差支なからうと思ふ。耽溺だま騒ぐ人達は、よし刹那の氣分に酔ふて満足するこも一寸先の闇には、そこに自己を呵む針が光つて居るに氣が附かぬのであらうか。

■抑も因果のことはりは華と果との如し。千里の野の枯たる艸に螢火の如くなる火を一つ付けぬれば、須臾に一艸二艸十百千萬艸に付き渡りて燃ゆれば十町二十町の艸木一時にやけつきぬ。

………(新池殿御消息)「因果應報」

釋尊の申さるゝに——善惡の報は影の形に従ふがやうである。過去、現在、未來の三世に因果は環り環つて居る。何んこも思はず、空しくこの世を過せば

後悔するばかりである——(涅槃經)に、又、ジョン、フラスターは——凡て快樂は苦痛といふ代價を出して買はざるを得ず。而して虚偽の快樂は真正の快樂の受くる違ひは、一は苦痛といふ代價を快樂以後に支拂ひ、一は苦痛といふ代價を快樂以前に支拂ふなり——と云つて居る。苦痛といふ代價を前に支拂ふか後で支拂ふかの差に因つて、真正の快樂か虚偽の快樂かと別れて來るのだ。只苦痛といふ代價は虚偽であらうが、真正であらうが、何うしても、支拂はねばならぬ。同じ支拂ふならば、真正の快樂を得るやうにすれば宜からうではないか。この理屈が分れば、釋尊の申される善の報を得るやうに努めなければならぬ。何うせ苦しみはする。併し、苦しむでも、そう何時までも苦しむものでなく、待てば海路の日快ありで、我を殺さんばかりに積善の努力こまやかであれば、その功德は必ず來るものである。然るにこの理を辨へないで、世の人は五欲の教ふるまゝに先づ快樂を求めやうとする。そして代價が支拂へないで藻

搔のである。痛々しく苦しんでやがて拂ふものもなかにはあらうがそれこそも、矢張り苦しんだのである。只一時を忍ぶことに心身が鍛練せられて居ない爲ではあるが、一度この理を辨へて、全じく拂ふ苦痛の代償を務めて快樂以前に支拂ふやうにすれば、こゝに積善の功德が表はれて來るのである。併るに刹那々々の煩惱の焔に誘はれて、人は務めて苦痛の代償を快樂前に支拂うこともせないで、遂に何うすることも出来ずして苦しんで居るばかりである。丁度千里の枯野に螢火のやうな小さな火を點して、知らぬ間に十町二十町の大火となり、知た中で自分獨り苦しんで居るがやうである。塵積れば山となる比喩の如く、知らぬ間の焔は大火となり、知らぬ間の不義は自分の身を亡す原となる。知らぬ間に行く浮き世の子は、何時になりても眼が醒めず、うかくく暮して悪業をのこして去る、假令地獄がないにもせよ、恚うしたこゝから、詰らなく一生を送るこゝが多いのである。日蓮聖人が申されるまでもなく、吾々は務めて以前

に苦痛の代償を支拂ひ、此に忍び已に克たねばならない。

■讚められぬれば、我が身の損するをも顧みず、毀られぬる時は又我が身の傷るをも知らずふるまふ事、凡夫の事なり。……………

……………(諸法實相鈔) [毀譽褒貶]

中江藤樹は——人の已れを譽むるを聞きては、實に過ぐる小事たりとも悦び誇り、已れを誇れるを聞きては、有るこゝなれば怨み、無きこゝなれば怒る。

過を飾り非を遂けて改むるこゝを知らず。人皆其人品を知り、其人の邪を知れども、已れ獨り克く隠して知られずと思へり。欲する所を必しして諫を防ぎて入れず——凡夫のあさましさを説く。實にこの通りである。人より少し譽められては直に附け上り、誇られては事實であれば怨み、事實でなければその人を怒る。丁度寒暖計の暑さに會へば、のこくこ昇り、寒冷に遷へば收缩して了ふがやうである。それでは人間も、余り正直すぎるやうではなからうか。

如何なる酷暑に遇ふことも自若たり得るがやうに、如何に人より譽められることも此に附け上らずして心を沈めて益々その徳を磨かねばならぬ。寒冷に處しても頑として動かざる一大決心を以て自分の天職を愛するがやうに、如何に人から毀られても、悠悠として自分の覆むべき道を靜に歩み、而して省みる所があれば自省して更に自分の徳を修めねば眞の人は云はれぬ。毀譽褒貶に眼を用ひず耳をかさないで、自分の天命を樂しみ、天職を愛して孜孜勉勵する所に偉大なる人格の光輝が照らすのである。彼の名聞榮達に浮き身を窶して、心中閑日月もなければ襟度もなく、營々として利殖を計る凡俗一輩、彼の冥利に迷はされて、自分も家族も國家も社會も眼中になく、只黄金の光に隨喜して人格を忘れる守錢奴の如きは何うして身を損せず傷らずに終り得やう。一物の生じた後の批評は、是れ物の結果に附隨する言葉である。この言葉を範疇として人格を求むることは木によつて魚を求むるものであること心得ねばならぬ。

■畜生の心は弱さを威し強きに畏る。……(弟子檀中第二書)〔凡夫〕

鳥が雀を追ひかけ、鼠が猫を畏れることは皆人の知る所であらう。進化論で有名なダウインは自然淘汰といふ事を述べて其の間の消息を語つて居る。即ち動物であらうが植物であらうが、世にありまあらゆるものは強い者が勝つて弱い者が負けるのであること云つて居るのであるが、茲に弱い者を威さずして可愛がり、強い者を畏れない者があることすれば、それは何人であるか考へて見るが宜からう。大資本家に對抗して勞働者の地位に同情する人もある。暴君を畏れずしてこのもこに惱める民を救ふた人も居た。又頑迷なる主人に逆うてまでも部下を愛した番頭もあつた。要するに畜生あらぬ人間でも、そこに鍛鍊せられた一大自信のある人が、又は正を好み邪を忌むことには育つた人が弱さを憫み救ひ強きに畏れないのである。あらゆる手段を講じ、あらゆる權謀を弄して此等有徳の人を苦しめることも泰然として動かざるのは到底畜生は勿論凡夫の及ばぬ所で

あらう。日蓮聖人は何故にこの句を吐かれたのであるか。茲に思ひみる必要がある。思へば獅子吼の猛きに恐れて執權役である云ふ位によつて一僧坊を鳥が雀を追ふが如くに迫害するので、又——當世の學者等は蓄生の如し——ご申さるゝやうに自ら護臣ごなつて日蓮聖人を苦しめた僧坊があつたからである。さらにも日蓮聖人は斷々乎ごして正しきに従つて邪を曲けんごせられ、泰然ごして正法に附かん心の動かざるのはそこに鍛練せられた一大自信があつたからではあるまいか。何をか一大自信ごいふべきやは乞ふ吾々をして日蓮聖人の御難行御苦勞を追想せしめずば已まないのである。一切經を幾遍ごなく讀まれて法華經の眞髓を體現せうごまで決心せられた雄々し心は、かの南無妙法蓮華經の御題目ごなつて善男善女に隨喜せられ、此頃の人達には人格修養の好模範ごして崇めらるゝによつて明かであらう。

第四 理性 理解 應用 心  
眞心 情と心性善 人の心

■夫れ水は寒さ積れば氷となる。雲は年を重ねて水精となる。悪は積れば地獄となる。善は積れば佛となる。女人は嫉妬かさなれば毒蛇となる。……………(南條殿女屏御返事)〔理性〕

女は感情の動物だご云はれて居る。事々物々に興奮して絶えず感情に支配されて居る。悲しい事があれば何處までも泣く。嬉しい事があればそは／＼して氣も落附かないで居る。笑へば少しのごこでも笑ひたくなる。さればご云つて些細の事から怒りだせば顔に泣き面を下けて心では恨んで居る。到底男の力に優るごこが出来ないご思つた時には嫉妬ごなつて呪詛するに至る。感情を極端に表白するごこは男よりも、より赤裸々に出すかも知れぬが、一度人を恨み呪

誣するに至れば執念強く際限がない。丁度水鉢の水が氷つて鉢を破らうとするがやうである。強いて美德として女より堀り出せば、已むなく順ふ柔順さまで強いて感情を殺した貞操位であらう。若し醜惡なる行爲として女を論ふならば前後を顧ずに感情を露け出すのこ、嫉妬や呪詛で固つた陰險なる行動であらう。そこで女性の強いて殺した感情を、赤裸々に表白した感情を何れが女として宜いかも男も女も考へねばなるまい。或る人は赤裸々を喜ぶであらう。又或る人は絶対に感情を抑壓せねばならぬ云ふであらう。既に女性が感情を根基として成立する上は、強いて感情の抑壓は考へ物であらう。さればこて放任せしむべきでもなからう。要は男にしても或る程度まで此れを黙認し得て、女も或る程度までは自制せねばなるまい。社會は感情のみの個人を容れない。理性に基いて個人性を發揮し得たる眞個の個人を要する。不幸女性は理性が欠けて居る。否余りに感情の焔がするごとく理性の水も及ばぬものである。是れ一面

の女性の女性たる所であるから強いて理性を女より求むべきでない。併し、茲に父母の娘に順々として因果の規程に人の性善と眞個の善を教へ、夫の妻に人生の目的と理性の要を説くに至らば、所謂或る程度までの美しい女の感情を保留し得て、醜惡極る嫉妬呪詛に至らしめず納め得るであらう。現性には個人性を發揮し得て天地融合の眞個の善を知ることである。然れども、父母に眞個の善を体得せられ、夫が人生の歸趣を眞に自覺して居るに非れば、説くもの、愚を笑はしめるであらう。又少なくとも父母、夫なるものは雅量の胸中に存して、娘妻をして理性より出する雅量のなにもなるかを悟らしめねばならぬ。要は理性の何ものなるか、善の何ものなるかを体得したる后でなければ女の嫉妬は男女ともに抑壓し難いであらう。少くも善惡の如何を究め得る理性は女にも要するのである。(善の條下参照第五十四頁)

■ 謗する人は大地微塵の如し。信する人は爪上の土の如し。……

克く當つて碎ける人が云ふ。併し當らずして碎くがやうに彼此批評がましき事をいふ人が居る。人の云ふことを十分に聴かずして、何にも彼も自分が知つて居るやうに人の言ふことを彼此いふのである。眞實に物事にも當つて克く理解せないので、理解した積りで居るのである。當るこいふのは克く理解し納得するこである。然る后彼は批評するなり、自分の思ふまゝに振舞へば宜いのであるが、そんな事は聴かないでも宜い、知らなくても、克く分つて居るこ云つて所謂半可通で終る人が克くあるのである。知る事は一時の耻であらう。併し、充分に知らざるは末代までも耻ぢこなるものである。知らざるを知らずこして知るものゝ心は佛も可納し給ふのであるが、知らざるに知つた振りして知らうこもしない者は、その人一代の耻辱ばかりでなく誠に哀れむべき人だこ云つてよからう。知る事は既に容易でない。充分に理解し、納得してこそ知るこ

……………(秋元御書)〔理解〕

いふ事が出来るのであるが、充分に理解するこいふ事ですら、却々容易な事でない。一を知つて十を知る事もあらう。手を叩かれて或る事を理解した人もあつたらう。併しかゝる人は理解するここの修練を積んだ後に待つて、始めて見ることが出来るのであつて、何等理解しやうこも心掛けない人には出来得べき沙汰でないのである。世間には斯く物事を知らうこする人が少なく、一知半解で了ふこする人が多いのである。案外世の中は盲千人こいふがやうに本當に物事を理解し、納得して居る人が少ないのである。烏合の衆こいふが如く、只譯も分らず喧々騒いで居るのが世間の人々である。彌次馬こいふのも、要するに慙ういふ人達をいふのであるが、何故に、人は充分に理解しやうこもせず、納得しやうこもせないのであるか。素より是れは世を導く人の罪ではあるが、また自ら知らうこせない者の過であらう。まして知らざるに知つたこなす者はその罪は決して免がれ難いので、慙ういふ人が随分世の中に勢力を持つてはび



こつて居るのである。されば日蓮聖人も、知らざるに彼此批評がましい事をいふ人は土地にある塵のやうに澤山あるに申されて歎かれたのである。まして眞實に法華經を理解して此れを信する人は爪の上の土のやうに僅かなものであるに申うされるのも無理がないので、先づ吾々は何處までも、本當に當つて碎けるの勇を鼓して、眞實に法華經を理解して眞信仰に入り而して譯の分らぬ人を教へてやらねばならないのである。

■愚者の持たる金も智者の持たる金も、愚者の燃せる火も智者の燃せる火も其の差別なきなり。……(松野殿御返事)〔應用〕

昔の歌に——錢金はつかひ捨てるも白痴者、食はずに溜める人も馬鹿もの——といふのがある。これは金錢の効用を眞實に理解せぬ人を諷刺した歌である。金錢の効用は成るべく僅少なる金錢を拂ふて、より以上の物質を得ることであらねばならぬ。物質でなければ物權を得ることである。最も有効に金錢を使ふ

ここが、眞實に金錢の効用を理解して居る人でなければ出来ぬことであらう。親の財産を自分のもののやうに心得て、湯水の如くに使ひ捨てる遊治郎は、恐らく日蓮聖人の申される愚者の金を持てるものであらう。云はば錢金はつかひ捨てるも白痴者の一類である。云つて、喰ふものも喰はず、溜るこことばかしに一所懸命で居る守錢奴もあるが、愆ういふ者は云はば只金錢の有難味ばかりを知つて、その効用を知らぬ愚者、聖人の申さるゝ愚者の金持であらう。所謂喰はずに溜める人も馬鹿ものの類である。金錢は素より金錢である。富豪の手にある拾圓も、薄給の懐にある拾圓も、等しく金拾圓也である。拾圓には變りがないが、持つ人によつて、使ふ人によつて等しい拾圓が、その効果を異にする。丁度等しく燃す煩惱の火を、焔しに燃やしてその火中に自ら苦しむもの、この火を轉じて、衆生濟度に用ふる者との差異あるがやうである。愚者は浪費するか、守錢奴に甘んずるかである。智者は利川の道を豫め考へて、出來

る丈應用の範圍を究めてから金錢を使用するのである。徒に焔ゆる煩惱の火に捕はれて、自らを利用せられ應用せられる愚者も、煩惱の火を他に利用應用する智者のやうである。一は物そのもの、心を知らざるもので、他は物そのものの心を確實に理解せるが故である。物そのものの心を確實に理解することは物の利用應用を確實に行ひ得る第一歩なるものであることは明かであらう。要はもの、心を握捉せねばなるまい。日蓮聖人は——但しこの經文の心に背ひて唱へば其差別あるべきなり——と申されるのも、云はゞ經文の心を確實に握れと申されるのである。經文のみならず凡て人間万事ありとあらゆるものの心を見抜き、確實に此を認識する以上は、そこに、浪費、奔放、等の不淨の事實を好まずして、眞實に利用、應用の効果を握ることが出来るであらう。百の經濟説も、要するに物の性質を見抜く心を説くに過ぎぬ。一物一心、あだに空しく看過して、白痴者、馬鹿者こそしられぬやう心得可きであらう。

■物種と申物一あれども、植ねぬれば多となり、龍は小水を多雨となし、人は小火を大火となす。……(御衣並單衣御書)〔心〕

赤兒が養育されて、物喰ふやうになれば、やがて一人前となる。そしてまた子を産む。履み附けば直ぐ死んで了ひそうな蛙でも、幾百匹になつて翌年に表はれて来る。一は二を生み、二は三を生むこともあれば四になることもある。兎角物のはめじは一だ二を見るここが出来てあらう。而してこの一が何れほかに多くのものを生み出すかは、なかには想像の出来ぬものもある。何が恐ろしいと云つても、一は恐ろしいものはないだらう。百の說法屁一つで打ち壊はす一もあらう。幾千の教訓よりも一つの眞理に人を歸依せしむる一もあるだらう。一を知つて十を悟らす一もあるだらう。そしてこの一が凡ての世界を支配するこ見て凡てを一に歸するは哲學の目的となつて居る。斯く一は威嚴があり莊重なものは世の中にないのであるが、人が生活し處世するには何を一とし

て見るべきであらうか。考へて見る要がある。それは百行の本だ。こいはれる孝ではない。大義名分。か云はれる忠でもない。人の爲、社會の爲だ。こ云はれる徳でもなければ他の諸々の爲の愛でもない。心そのものである。人の心でなくして自分自身の心である。而してそれは胸の中にある心でもなく、頭の中にある脳味噌でもない。只五臓そのものを包含する心である。自分全体を支配する心である。自分の行動を左右し、徳行を履む心である。時には幽冥に入つて、宇宙の心と融會することもあらう。或る時は身心混一となつて靈性の光明に浴する。ここもあらう。又永遠の沈黙を持した佛のやうに絶えず、絕對智に入つて言ふべからざる説く可らざる心靈の活動なるであらう。此等が五臓そのものを包含し全生命を支配する心であつて、手を動かし足を動かす精神、徳を行ひ人の爲めに身を慎しむ。こいふ俗にいふ心ではないのである。人の性善なり。こいふのは、人の赤兒のやうな心を指ので、この性善なるものが自ら發達して圓滿なる

心が所謂今日の心であるのだ、圓滿し切れれば或は佛に全じかも知れぬ、否、生前この心を得ざる者でも、死しては佛になり得る。こ人も認める。こが出来るやうに、若し生前の努力十二分であつて、この心を得ば正に佛であるのだ。何んこなれば釋尊は生前にこの心であつたからである。聖人此を以て一を説かれるのであるが、この御言葉を讀むにしても、漫然と看過し得べきでない。こが分るのであらう。

■人の身の五尺六尺の神も一尺の面に顯はれ、一尺の面の神と一寸の眼の内におさまる候。………(妙法尼御前御返事)〔眞心〕

面白くないと思へば、人の面は何んこなく重々しい。愉快であれば、その人の面色は霽れやかである。心自ら顔色に表はる。こは昔から人々がこいふ。こであるが、亦人々も能く經驗する所であらう。而してこの心が眼の中に表はれて居るのは、丁度盜賊の眼がなんこなく凄く輝いで居るのでも分るのであらう。こ

れ全く争はれぬ事實であつて、如何に大悔撒底した禪師でも、如何に浮世を三分に見て取つた茶人でも、怒れば自然にその心が顔に表はれ、眼に宿して來るのである。演劇ではこれを強いて表はして、一つの表情法といふものを作つて居る。それを練習して如何にもそつた観客に見せることを俳優は努力して居るのである。これから見ても、人の性格は眼の色、顔の様子で直ぐに分る。まして我を欺き人を欺く心は靦面こそその人の顔なり眼なりに表はれて來る。今日不徳を敢てする人の、何處もなく顔色に落ち附きがなく、眼の色に不安の影が漂ふて居るのは、假令一面識のない人でも直に見てゐるこゝが出来るのであつう。細心である女性は何事にまれ自分の心を面や眼付で表はして了ふ。日蓮聖人の事實を観取されて吾々を誡められるのであるが、凡そ人格あり徳の高い人は自ら面色が晴れやかで、眼の色は穩かであるこゝ、そして人格もなければ悖徳を敢てして憚らぬ者は、何處もなく面色が曇り勝ちで、眼の色が附ち落かぬこ

こに留意して吾々は世の人を見るも面白からう。嘗に人ばかりを見るのではない、朝に起きては、鏡を見て自分の顔色が何うであらうか、眼の色が何うだらうかを見る必要がある。素より自分に徳を修め人格向上に留意して孔々として天職を愛して努力するに於ては鏡を見るまでもなく、他の化粧品を要するまでも、面色を霽れやかに、眼の色を落ち附かせるこゝは出来るであらう。百の化粧品を用いて美人たるこゝを願ふ女、百の美顔術に依りて美装を凝らさんとするこの頃の若い男は、何故に心こいひ魂こいふ化粧品を用ふる美顔術に據らないのであらうか。温順である鳩は形も顔色も温順である。陰險なる狼は顔形も眼の色も陰險である。既に動物にして斯の如くであるからには、凡てに機能の發達したる人間には、心自ら顔色に表はれず、眼に宿さず云ふこゝを非定し得られやうか。事實が既に証する以上は吾々は美を望む心からでも、人格修養に努力せざるまいと思ふ。

●情と心

■濁水に珠を入れぬれば永すみ、月に向まいらせぬれば、人の心あくがる。繪にかける鬼には心なれども慄ろし。遊女を繪にかけば我が夫をばとらねども褥まし。錦のしとねに蛇を織れるは服せんとも思はず。身のあつきに温かなる風厭はし。人の心も此の如し。……(妙法比丘尼御返事)〔情と心〕

この御言葉は人間の弱点を示されたものである。人の心云はれたのは人の情といはれたのに全じである。人の情に色々ある。嬉しいと思ふ情、楽しいと思ふ情、悲しいと思ひ、口惜しいと思ふことなき、人の情は其の時その時に色々変る。丁度人間の欲に種々あるの全じである。情は人の心の鏡に映じた影であつて、眼に見て美しく映するものもあれば、不快の影を宿すこともある。映じたそのものは吾々は事實としては尊重し得るかも知れぬが、その心の鏡は曇らぬことを望む。何時も光りて、澄む月の水に寫るがやうに、明快なる

を欲する。日蓮聖人は人の弱点を述べられて居る云つても、暗にこの心の鏡を絶えず磨け云はれて居るのではなからうか。仮令繪にかけたる鬼は何んもなく慄ろしくても、繪の遊女は褥ましくても、蛇の綿は心悪ろくとも、將身のあたゝかきに吹く風は厭はしくとも、心の鏡だに美しく磨かれてあれば、疑心暗鬼におそはれることもなく、云はゞ心さへ丈夫であれば、さほゞ神經をたかぶらさずとも宜い云はれて居るのである。今の世は、何事も物質の力が精神力の力よりも強くて、人は絶えず物質そのものや物質の變化に刺戟されて居るやうである。而して心丈夫で身は頑強であるべき青年が、身も心も此等の刺戟に惑乱されて、神經衰弱といふ病におそはれて居るのは事實であるのだ。素より心神の鍛練が完からざるかは知らぬが、兎角文明——物質的文明の刺戟が余りに甚しいからであらう。刺戟は強烈なる感覺を起し、絶えず感覺を鋭敏にする。この鋭敏さが兎角動搖する人心を乱して了ふのである。近頃の文學者はこ

●情と心

の強烈にして深刻なる刺戟を歓迎するのではあるが、それは只自分の心の鏡に映つるそのものを掠へて紙に寫し出すところからである。紙に寫し出すところが彼等文學者の職能であるから、職能の點から云へば、人心が動搖しやうがしまいが何うでも宜いことであるのだ。併し人の心さいふ點、また人格を養ふこといふ點から云へば吾々は絶対知に進むことが最大理想とし、絶対善に入るこことが終極の目的とすれば、何うしても心の鏡を磨きに磨かねばならぬのである。されば、人の情は事實を尊重する點に於て價値があり、人の心は人生の歸趣を觀取する點——少くば人格修養の點に於て價値があるのであると云ふことが出来るであらう。事實を見るのは我等が概念なる。概念を去つて絶対の境に入るべき、我等は事實の尊重を放棄してもよいのだ。こゝに我等が修養の根本が出来あがるのである。釋尊が説かれた三身即一身、一身即三身は即ちこの境に入つた後のことである。この境に入れば、醜惡、汚穢の雜念は飄然として、飛

びさるであらう。水に澄む月の望めも一つの機を促すごとく、吾々はこの句を讀んで猛省せねばならぬ。

■我が父母を人の殺すに父母に告げざるべしや、惡子醉狂して父母を殺すを制せざるべしや、惡人寺塔に火を放んに制せざるべしや。一子の重病を灸せざるべしや。……(開目鈔)〔性善〕

この御言葉は人の性善なるを説かるゝと共に、邪教を制せられざる時の幕府に向つて言はれたものである。されば——日本の禪念佛者こをみて制せざる者はかくのごとし——と申されて法華經の自由を得られざるを恨られ攝折二門を説いて法華經の偉大なるを説かれるのであつた。日蓮聖人は——夫れ攝受折伏を申す法門は水火のごとし。火は水を厭ふ、水は火を惡む。攝受の者は折伏を笑ふ。折伏の者は攝受を悲しむ。無智惡人の國土に充滿の時は攝受を前さず安樂行品の如し。邪智謗法の者多き時は折伏を前さず常不輕品の如し。譬へば

熱の時に寒水をもちひ、寒の時に火を好むが如し。——三攝受折伏の得失如何を述べられて念佛、禪の二宗の暴威を怨まる——三佛の未來に法華經を弘めて未來の一切の佛子に興へんと思召す御心の中を推するに、父母の一子の大苦に値を見るよりも強盛にこそみわたるを、法然痛はしこも思はで、末法には法華經の門を固く閉ぢて人を入れじこ塞き、狂兒を誑らかして寶を捨てさするやうに法華經を抛させける心こそ無慚にみね候へ。——こ申さる。佛敎諸經の父母は法華經である。この父母の法華經に隨從する諸經は素より法華經の子である。この子が重病に罹り、或は寺塔を焼かんこするが如き暴威を敢てするのを見れば灸をしてその重病をも治さねばならず、この子を制して暴慢にふりまふ惡人たらざるやうにせずばなるまい。この重任は我れこそ自信自任せられた日蓮聖人は、是を非に曲け、正を不正に強いる北條氏の無道を斯くは憤られたのである。世界三聖中理路の正しい釋尊の御敎、それが凝結してこゝに法華經にな

りたる所以を天下に披歴し給ふた日蓮聖人が素より性善であるべき一切四衆を念佛、禪の權敎に收纜して却つて衆生の性善なるを惑亂しつゝあるを見られ、斯くは憤られるのではなからうか。而かも——天台眞言の學者等、念佛、禪の檀那を護ひ恐るる事、犬の主に尾を振り、鼠の猫を恐るるが如し。——當時腐穢せる天台、眞言の僧徒を鞭達叱咤せらるゝではないか。人心は惑亂されつゝある。實敎を知れる天台宗の僧徒すら阿滔を是れ事とするを見られては身は佐渡に流罪さるゝ浮き目を見らるゝこも、そこに無量の感慨があつたであらうこ吾々は恐惶する。そして吾々は當時三現代を比べて熟慮すれば兎角時代には案外ものゝ分らぬ者が多く、却つて此等の者が時の實權を握るものであるかを首肯する。況して自決すべき罪科を身に帯びながら自決もせず、暗々裡に自勢を扶植して邪道のあらむ限りを仕盡さんとするものがあるを聞く。不正不義は各國各時代を通じても横行せらるゝが如き時に、又凡ての人も此を默許

するが如く沈黙せる際に、日蓮聖人が法華經を躰現せんが爲——云はゞ人の爲一切四衆の爲に佐渡に流罪さるゝが如き危害を受くるこも——日蓮が流罪は今生の小苦なれば歎しからず、後生には大樂を得べければ大に悦ばし悦ばし——、尙慰藉しつゝ自己を勵まさるゝのを見るこ吾々は如何の感が起るであらうか。忠なれ、孝なれこ教へられ誨されて、小中學の學を了へた者は、忠ならんこし孝ならんこして、いよゝ社會を廣く觀・世情を深く探らば、こゝに恐ろしき事實を發見して自ら道德の權威をあやぶむに至るであらう。慨世愛國の士は今來らすこも、よし公表し得る丈の清廉潔白はなくこも、世を指導し教を垂れんこすれば、須く言行一致の自信こ覺悟こを有して世上の公壇に建つを望むここは吾々が茲に日蓮聖人の遺訓を追誦すればするほご、この希望を切實に抱くのである。重ねて云ふ「人の性善なり、此を惑亂する者の罪や決して許す可らずこ」。

■器は我等が身心を表はす。我等が心は器の如し、口と器、耳と器。

日蓮聖人は——器に四つの失あり。一には覆こ申してうつぶける也。又はくつがへす、又は蓋をおほふなり。二には漏こ申して水もる也。三には汗こ申して汚れたり。水淨けれごも糞の入る器の水をば用ふる事なし。四には糞也。飯に或は糞、或は石、或は沙、或は土なんごを糞へぬれば人食ふ事なし。——こ申うされて——法華經こ申す佛の智慧の法水を我等が心に入ぬれば、或は打ち返し、或は耳に聞かじこ左右の手を二つの耳に覆ひ、或は口に唱へじこ吐き出しぬ。譬へば器を覆するが如し。或は少し信するやうなれごも又惡縁に値うて信心薄くなり、或は打ち捨て、或は信する日はあれごも捨つる月もあり。是れ水の漏るが如し。或は法華經を行する人の、一口は南無妙法蓮華經、一口は南無阿彌陀佛なんご申すは、飯に糞を糞へ沙石を入れたるが如し。——こ當時の



●人の心

信仰薄きを歎かれたのである。聖人は唯一の法華經を人が信ぜぬのを器にたこへて斯く申うされるのではあるが、聖人の申される信心ばかりでなく、人間万事に就きてても、器は人の身心を表はして居るものではあるまいか。先哲より修徳の米を盛つて貰へば食せうともせずして、くつがへし、又そのまゝ打ち捨て置く。譬へ一度食するとも、消化の悪るき爲か折角喰ふた甲斐を失して了ふがやうに背徳を行つて見たり、時には食ふたらしく人格あるやうに行つて見るともあれば、五欲の爲に無道を敢てする時もあるのは、丁度修徳の御飯に背徳の汁を掛けて腹に入れるやうなものでなからうか。修徳に背徳―兎角旨く難じねばお金が儲からぬ或る商人は云つた。表には殊勝らしく人に見せて、裏では策畧をめぐらさねば、高位高官は齋ち得られぬ或る役人は云つた。修徳の飯に背徳の汁を自由自在に掻き廻して、旨く消化せねば、到底世に成功は得られない。今の人は思ふて居るのである。所謂和魂商才を絶対に實現せねばな

らぬこゝが、恚うした事に人が信する上は世は濁世ならざるを得ぬではないか。人を導く幾多の名教訓は只恚う云ふ人達の出世の材料なるばかりで、眞に實に先哲の教訓を無にし、先哲の遺訓を侮辱したこゝだ云はざるを得ぬ。煩惱の影を追ふ幾百万億の凡夫、金の威光に恐れて、此に隨喜の涙を流せる數ある輩は、人は生活の爲に仕事を爲して金を得るなりと思はずして、金の爲に仕事を爲すこゝ心得、而して徳を建つるこゝをこの手段に使用せるがやうである。我れ自らを克く理解し、仕事そのものを眞實に尊重して、天にも耻ぢず、地にも耻ぢず、毀譽褒貶に耳をも傾けず、我が生命を愛して悠々として天命を樂しむこゝが出来ないのである。されど一度榮枯盛衰の無常の風に遭ひて、忽然として後悔する所あらば、影を追ふ人間の淺間しさを感ずるに共に、悠然として一大自覺のこゝに職を愛し、生命を愛し、のそりくこ牛の歩むが如く天命を樂んで修徳の人となり得やう。生を繼がん一碗の飯ですら、そこに意味深

●人の心

長なる徳の影を見出して釋尊の偉大なるを思ふと共に日蓮聖人の名教訓たるを知るに至るのであるが、うかくこ一碗の飯を喰つて了ふのは情ない次第ではないか。物質は物質として葬り去るよりも、この物質の間に何か意義を求め得るのは只人間のみの特有せる靈の活動があるからである。一碗の飯を盛る器を自分の心なりと解釋して、此れに口と耳との機能の關係を考量するのは吾々の特權である。即ち口と心、耳と心の相互關係から自己——宇宙——人生——徳——善と種々に思索して、茲に人格の何物なるや、品位の何物なるやと知り得るところから、人の天職天分を眞實に覺知し得て、眞正なる克己、努力、勉勵を體現せんとし、而して人生の最大理想に突進し得る怪物は只人間ばかりである。飯を盛る一碗の裡に、深刻にして痛切なる何か意義を探ねて、何か覺知し得ばその人一生の幸福だと言はねばなるまい。

第五

解脱 覺醒 徹悟 大悟 徹底  
 自覺と努力 自己觀照 自覺自信  
 自信 覺悟快心 果斷

■相構へて相構へて心の師とはなるとも、心を師とすべからずと佛は記し給ひしなり。……………(義淨房御書)「解脱」

これは涅槃經にある句を、そのまゝ聖人がさし出されて人を誡められるのである。心の師とは自分が克く大悟徹底して、人生の歸趣、社會の赴く所を克く考へ、而して後に自分の行爲を定めよといふことである。心を師とするは五欲のさし指すまゝに振り舞ふて、前後左右の考もなく、善惡美醜の顧もなくして、自分勝手に心の導くまゝに行ふことをいふのである。刹那々の快樂を追ふ人々、氣分々に生きやうとする人々は絶えず心を師として居るのであら

う。神秘の影に自分を見出すこともせず、宇宙の氣分と自分の氣分の相共鳴する所を見出すこともせないで、肉色と酒に、せめて是れが自分といふものだ。果ない泡のやうな影を追つて生きて居るのである。絶えず神の心や佛の心、自分の心と一致して、主客渾一の境に自分を見出して居る眞の哲學者宗教家文藝家は其の比云ふべくもない。我れを觀て我れを悟り、神佛宇宙と融合して靈魂の通ふ自分の偉大なるを自覺した人こそ、絶えず心の師となりて平靜に世を送り得られるのである。是れ眞の解脱といふものである。

■當世の躰を觀るに愚にして後生の疑を發す。然れば即ち圓覆を

仰いで恨を呑み、方載に俯して慮を深うす。(立正安國論)〔覺醒〕

日蓮聖人御歳三十九の頃、即ち文應元年七月十六日、時の執權北條時頼に獻せられた「立正安國論」の劈頭第一句がこれである。こゝに當世の躰といふのは、釋尊の實教が法華經であるこゝを知らないで、その謗法たる「華嚴」「阿含」「方

等」「般若」の亞流に隨喜して坊主は獨りよがりの逕延に浮身を窺し、民衆は眞實に歸依する所に依らないで念佛三昧に納まり返り、世は擧つて暗雲に覆されて何時晴れやうとも思はれない混乱せる北條時代の思想界——現實界をいふのである。そこで日蓮聖人は此を御覽せられて「愚」なりと叫ばれ、「後世の疑を發す」を將來に杞憂を抱かれたのであつた。この杞憂が自ら深い思想から覺醒の聲を万民に放たれ、遂に堂々たる「立正安國論」になつたのは凡そ日蓮聖人の御傳記を拜讀したものが能く知る所であらう。既に一世を指導し万民を覺醒しやうとせられた第一聲が「立正安國論」で、その安國論の劈頭第一聲がこの句である以上は、この句を讀誦する者は極く眞面目にこの句を味つて絶えず胸に抱かねばなるまい。即ち何故に日蓮聖人は斯くも「愚」なりと叫ばるゝに至つたか——「圓覆を仰いで恨を呑み、方載に俯して慮を深くす」に申された如く日蓮聖人は何故に天を仰いで恨を強いて呑まれ、地に俯して沈黙考しやうとせら

れたのか——そして遂に「立正安國論」を時の執權役北條時頼に献ぜらるゝに至つたのは抑も如何なる動機によつてあるか克く考へねばなるまい。

文科は儲らない、法科も面白くない。先づ將來は工科でなければ収入が少ないといふ一般の風潮に連れられて我も我も騒ぐ今の學生界を觀て、是れ「愚」なりと叫ぶ者はなからうか。切迫詰つた此の世に何をしても儲ることはない、矢張り官海を遊没して隠れたる収入にありつかうとする官尊民卑の者共を見て、是れ「愚」なりと叫ぶ者はないのであるか。青い酒と赤い戀、刹那の刺戟こそ人生に意義ありと騒ぎ廻る今の新しい人達を見て是れ「愚」なりと叫ぶ者はなからうか。深く自分の素質を考へ得失如何を考量して將來の方計を建立することは素より今日學生の執るべき第一歩であらう。正義の風は、如何に混惑せる濁世にあつても、堂々として靡くことは各國の歴史が此を証する以上、一点何等の疑心をも挿まれざる正々堂々たる立志の礎に自己を樹立することは素より生を此

の世に稟くる者の執るべき第一の務であらう。如何に事實を尊重し、深く生の執着したこゝが人生の第一義と云つても憧憬と轉變とが絶えず人間の血管を流動して居る間は、茲に自己樹立に一空地をけ出して尙、他に自己發見の刺戟を求むるこゝは、素より新しいこゝを望む人達の過程となるであらう。されば日蓮聖人が圓覆を仰いで恨を呑み方載に俯して慮を深うすこ申された如く、吾々も事物の非を見て沈思黙考し大に所斷するこゝを要する。この大正の世は決して極樂ではない。樂天地でもパラダイスでもない。幾多の不正不義が横溢して居る世の中であると思はねばならない。此に於て吾々は北條時代の日蓮聖人の如く大正の世の日蓮聖人を得たいと希ふのである。

■ 苦をば苦と悟り、樂をば樂とひらき、苦樂ともに思ひ合はせ南無妙法蓮華經と打ち唱へ居させ給へ。……(四條金吾殿御返事)「大悟」

苦しいと云つて、苦しみが除れるものでもなく、楽しいと云つて楽しみが余

計に増すものでもなからう。苦しむこいふのも心の影、樂しむこいふのも心の影、さほご氣に掛けるほごのものでもない。克い加減に見切をつけて心の藏へ仕舞ひ込むが賢いこいふもの、ぢやと思つて、靜かに世を送るがその人一生長壽は請合、一念凝つては南無妙法蓮華經を稱へ眞の佛に手を引かれるやうに、底も知れぬ幽谷に落ち行く靜かで隱やかな氣分で一生を送りたいものである。——世は生活難の嵐が吹いて居る。日一日に口腔の充塞が六ヶ敷なつて来る。喰はねばならぬ生きねばならぬ心の底から急ぎ立て、来る。ぐずぐずして居れば、他に蹴り飛ばされて生くるこが出来ぬ、迫めて来る。そこで働かねばならぬと思つて一所懸命働いたが、思ふやうな、待ち設けて居た結果さはならぬ。疲れ儲けの働き損を知つて世の中が厭になる。されば云つて働かずには生きて居るこは出来ぬ。何うしても働かねばならぬとすれば随分苦しい厭な目に遭はねばならぬから嫌だ。——云ふのがこの頃の人の頭の中を

往きつ返りつしかねまい。昔しと異ひ生活が容易でない。六ヶ敷なつたのは事實である。云つて働かずには生息は出来ぬではないか。生を愛する以上は職をも愛せねばなるまいが、職の結果や報酬のみに着目して眞實に職を尊敬し珍重して心から愛さぬからこの不平も出るのだ。一つは苦を苦み余りに鋭く感ずるからでもあり、又身神の鍛練が足らぬからでもある。五慾を去れと努號すれば標ひ縮まるかも知れぬが少なくとも、必要もないものに執着するこを止め華を衍ひ、美を競ふ事なごを斷つて、將來は一寸闇の世の中を感念し、何うならうが慙うならうが只自分は衣食貧なれども、天職を樂しむ茲に勇氣あり、天命を愛する茲に雅量ありと思ふて、悠悠孜々、靜に平かに精進努力すれば、既往の苦は樂となり、昔の煩悶は却つて慰藉になつて、世は面白く愉快に感ずるに至るであらう。苦樂素より心の影、何うすれば苦に耐ゆるか云へば 聖人は心の一なりと稱する法の妙なるに應てを網羅せる蓮華の臺に乗つて、法華經

を靜に讀めば、月澄み心も澄んで佛陀の眞の聖音に接することが出来る。申うされた。題目を唱へるのも、それである。退いて法華經一卷を手にして朝夕の修養に資する便にすれば、そこに大悟の貳字が表はれて來るであらう。

賢人ご申すは善き師より傳へたる人、聖人ご申すは師無くして我と覺れる人なり。

……(妙密上人御消息)「徹悟」

日蓮聖人は賢人ご聖人ごの區別を恣のやうに申されるのであるが、尙此を詳しく分るやうに云ふと外道の諸典にしろ内道の諸經にしろ、凡てに通曉せる師が順々として宇宙や人生や道徳や其他森羅萬象の諸問題を述べ來りて、人生の歸趣すべき道を傳へ、人の守るべき、履むべき道を教へられるのを能く理解して此を行ふ者が賢人で、これ等の師の力によらずして自ら覺るものが聖人だ。云はれるのである。二宮尊徳が——ぶんくく障子にあぶの飛ぶみれば明るき方へ迷ふなりけり——と歌つたやうに自覺なき者は何處もなく落付きがなくて

藻掻いて居るやうである。自覺は自分を知ることである。自分は何者であるか。知ることである。少くも自分の使命——一生自分が投じて飽かぬ事に努力するは抑も何物であるか。覺ることではなければならぬ。迷へる人心を統一する。ここもその一つであらう。混亂せる濁世を誘導して一大光明をかゝけるのもその一つであらう。種々に動搖して人の道にさまよへる者を救ふのも、その一つであるかも知れぬ。否我が行くべき道、履むべき道に、宇宙乾坤唯我獨尊の一大自覺に到着し忽然として大悟徹底の一大焦点に自分を見出すことではなければならぬのである。善なり眞なり美なり人より教へらるゝものに依りて自覺の息を吹くのではない。宇宙だ人生だ、社會だ人より知らされて茲に自分の去就を明にするやうではならぬ。人より教へ傳へられずして人間萬事、世界十方に處し自己の使命を悟り人生の歸趣すべき所を發見し、乾坤の行くべく迎へべき一路を見出してこそ所謂聖人ご云ふのである。思ふに現代には斯やうな人

が居ないのであらうか。カントだヘーゲルだニ稱へられて驚ける幾多の學者やベルグソンだゼエムだニ云はれては途迷へる數百の小學士はあつても、譬しカントもヘーゲルも知らずベルグソンやゼエムスも知らずとも、われ我が身を悟りて徹悟の境に迫へる人がないとも限らぬ。併しかゝる人は文明の風が吹く汚らはしき社會に努號するを好まぬかも知れぬ。森深き山路を遙に獨り道を歩んで居るのであらう。聖人世に納れられ難きは昔も今も全じではあるが、譬し効果はなくとも、假令衆愚を買ふにしろ、日蓮聖人の如く天下に堂々肅々として自己の使命を表白して獅子吼する人を吾々は罪深き現代に、より以上に要求するのである。幾多の小賢人を埋むとも一大聖人の現出を望んで已まぬのである。

■世間に人の恐るゝ者は、火災の中と刀劍の影と此の身の死する  
こととなる可し。  
……………(弟子檀中第二書)〔徹底〕

黒焦こなつて死ぬのも、刀劍の露になつてしまふのも皆人の忌む所である。何が恐ろしいとて、死より恐ろしいものはないと、昔の人も云へば、今でも人は慙う感じて居るに相違ない。そこで吾々は考へねばならぬ。何故死なるものが慙のやうに恐ろしく感ぜられるのであるか。眼あればこそ、色々の色や形を見、口あればこそ、舌あればこそ、色々のものを攝取して此を味ひ、耳あればこそ、物を聴き、鼻あればこそ、物を嗅ぐのであるから、死といふ一字の爲に此等の五感を断たれたならば、それこそ自分といふものが無くなる——自分になくなれば天より降り、地より湧く恩恵にも接することが出来ず、従つて喜怒哀樂を切實に味ふことが出来ないからである。一言にして云へば、所謂五欲を恣にするこゝが出来ないからであるといふ事か出来る。それは丁度働いては喰ひ、着て、住ふ人々の日常を見ても分るであらう。そこで今更日蓮聖人がこのやうに申されずとも自分達はこんな事は百も貳百も知つて居るこいふ人があ

るかも知れぬ。それ等の人々や又世相の種々を嘗め、現實の一事實を尊重して切實に人生を味ふこいふ若い人達の爲に、吾々は茲にこの日蓮聖人の句を克く味ふ必要があると思ふ。それは人間の欲は限りがなく、追へども盡きせぬ蝸のやうなもので美食を見れば眼を光らし、性慾を唆すものに會へば身を忘れて此に夢中なるのが凡夫のあさましさである。このあさましさを克く加減に切り上げて或る程度までは自重せねばならぬこを斯くも日蓮聖人が云はれたのである。素より欲が無ければ人間ではないが、さりこて、限りないものを追ひ、盡かぬ望を抱くよりも、或る程度に見切りを盡けて、心を静にし世を楽しく送るが宜いと思ふのである。そこで或る程度を反りに定めねばならぬが、近來實用こいふ言葉ほご性慾を制限するものはない。吾々は思ふので、健康を害せず醫藥の厄介にならざる丈の食物や、寒暑に身体を害せざる丈の衣服、世を送るに何等の差支ないほごの住宅に住むこ——云はゞ利用し得ら

る、範圍に眼を据わて此に實際に要する丈出来る丈質素に衣食住を索むるこである。気分や感情をそるに美麗なるものは内容が充實して居ない。質素にして實用に適せるものほご深く鋭く内容の充實味が表はれて居るこは云ふまでもなからう。この實用の二字に眼を止め、總ての物質に對する性慾を制限して、心の充實をはかり靜にして佛道に歸依三昧すれば、そこにより以上に充實した人間味を表はすこが出来、何時死しても悔みないほご大悟徹底するこが出来来るであらう。死に臨んでは死を悲しまず、よし身は死しても太くして動し難い心が萬代までも残るであらう。由來名僧の諸物質慾を實用に制限して一心に佛道を求めて心を平靜にした逸話が澤山ある。誰れでもこのやうにせよこは云はぬが、世間の人が恐る、死こいふものに對して吾々は日蓮聖人が申さるゝやうに恐れるやうな凡夫で終りたくないのである。この意味でこの句を味つて各自に修得する所があらねばならぬ。



●自覺と努力

■人身は受け難し爪上の土、人身は持ち難し艸の上の露、百二十まで持ちて名を下して死せんよりは、生きて一日なりとも名を擧げん事こそ大切なれ。……(崇峻天皇御書)「自覺と努力」

朝起きて働き、働いて寝て暮す人間の壽命、先づ五十。長いやうで短い命は皆人の知る所であらう。營々として働いても五十年、ぐずぐずしても五十年、笑ふも泣くも五十年の命なれば笑ふて茶化して暮せし一休禪師も云つた。併し世を笑ひ人を茶化して暮すことはよほさ度量のある人でない出来ぬ。吾々凡人は何時か知らぬ間に喜努哀樂に縛られて、怒つたり笑つたりする。人間萬事斯の如し眞實に見ることはよほさの修練が要る。この修練も覺支ない凡夫の吾々は、せめて生きては鼻持ちならぬ仕事で名を擧げる丈のこをせねばならぬ。名を擧げることも出来ないで、人並に飯を喰ひ、百二十才まで生きて居ても、只穀潰しの譏を受けるのみで腐甲斐ない話である。喰ふ事のみが人間の仕

●自覺と努力

事ではない。喰ふて働かねばならぬ。何故に働くに問ふ前には何故に生きるかご自問せねばなるまい。何故に生きるかご自問してこそ、そこに働きの意味が表はれて来る。衆生を濟度したいといふ人もあらう。大臣になつて國家を料理したいといふ人もあらう。一代の富豪になつてカーチーギの徹を履むこを目的とする人も居やう。人その人に應じて自問の答解を異にするかも知れぬが、この答解につれて人は努力しやうとするのである。然るに自問自答するこも出来ず、只生を稟けたといふこのみを知つて居るがやうに譯分らずに暮して居る者もある。古來修養を説き教訓を垂れるのも、要するに生の意味を覺らしめるのであるまいか。幾多の哲學者の輩出し、幾多の宗教家が出て來るのも、要するに生の意義を求めんが爲ではあるまいか。一度生の意味を尋ねんこすればそこに、煩悶があり懊惱がある。この煩悶と懊惱が重なり重なりて努力奮闘の種を生命に植む付けるのは、古來の先哲宗教家の行跡によつて明か

●自己観照

あらう。吾れ自ら悟るこも出来ずせば、せめて名を擧げるこを以て終生の題目として努力せねばならぬ。奮闘せねばならぬ。一度自覺によりて自ら光明を宇宙そのものより獲得し、靜に人生の行路を歩み、人生の行程を進むに至らば、自ら徳備はり人格向上して自然に吾が名の擧がるに及ぶであらう。要は天命を自覺して天職を愛し、刻苦精勵、努力奮闘するにあるのだ。

【辛きを蓼葉に習ひ臭きを溷廁に忘る。…(立正安國論)「自己観照」

蓼蟲苦不知詩經にある。臭いもの身知らずの哀さを日蓮聖人は恚のやうに喝破せられたのである。「蓼喰ふ虫も好き〜」昔から人口にのほつた句の通り、何うしてあのやうなこに夢中になつて居るのであるか、人の惡辯執着を見て哀れむこがある。「辛きを蓼葉に習ふ」は自ら好んで蓼喰ふ蟲になり、臭いもの身知らずの譏に甘んじやうこするこ。「臭きを溷廁に忘る」は豚小屋に起臥して四六時中その臭氣に親しみて、心地悪るさを忘れて了ふこ

●自己観照

ふここである。――幼より各寺を歴訪し各宗の秘奥を極められて、茲に「華嚴」「阿含」「方等」般若「及び」「涅槃經」は寧ろ「法華經」の謗法であり、釋尊の實教が眞實に「法華經」にあり確認せられた日蓮聖人は念佛三昧に没頭せる僧坊俗人をも「辛きを蓼葉に習ひ、臭きを溷廁に忘る」輩に絶叫せらる。この絶叫に對しては諸宗の僧坊は驚異の眼を以て對へ、人は遇するに「日蓮狂せり」と云はしむるに至つた。根底を知らずして枝葉に抱泥するは俗人の恒である。佛敎の根底が日蓮聖人が絶叫せらるゝもの歸一する所以を知らない僧坊俗人共は、徒に舊習傳説のみに抱泥して日蓮聖人を狂人呼りするのであつた。されば日蓮聖人は此等不具無智の徒を指して「自ら臭いもの身知らず」を希ふ輩に叫ばれ――善言を聞いて惡言と思ひ謗者を指して聖人謂ひ、正師を疑つて惡侶に擬す、其の迷ひ誠に深く、其罪淺からず。――釋尊説法の内一代五時(釋尊説法の五十年間を五時といふ)の間に、先後を立て權實(權敎、實敎)を辨ず。而るに曇

鸞、道綽、善導既に權に就いて實を忘れ先に依つて後を捨つ、未佛教の淵底を探らざる者也。就中法然其の流を酌むに雖其の源を知らず。所以者何。大乘經六百三十七部二千八百八十三卷、并に一切の諸佛菩薩及び諸の世天等を以つて、捨閑閑拋（聖道門の經教は捨てよ、閑ちよ、閑めよ、抛てよ、而して唯念佛せよと勸むこと）の字を置いて一切衆生の心を薄す。是れ偏へに私曲の詞を展べて全く佛經の説を見ず。妄語の至り悪口の科言うても比ひ無く責めても餘り有り。人皆其の妄語を信じ、悉く彼の撰擇（法然上人の撰擇集をいふ）を貴む。故に淨土の三經を崇めて衆經を抛ち、極樂の一佛を仰いで諸佛を忘る。誠に是れ諸佛諸經の怨敵聖僧衆人の讎敵也。——と叫ばれた。思ふに人は絶へず第三者の地位に樹つて自己を觀照せねばならぬ。知ればこそ則ち物を信するに至るこは云へ、知るここの正邪曲直は物を信するに至るまでに究め置かねばならぬいこである。正しい事と思つても尙止しからずやも知れずいふ疑問を以つ

て絶えず自分を顧る必要はあるまいか。この自分を顧るこ——即ち自己観照こそは人格向上の一大要点であつて、やがて「臭を瀾廁に忘る」譏を受くるこもなければ「辛きを蓼葉に習ふ」必要もなくなるのである。正々堂堂正直に進みて一步も許さない雄々しい勇猛心は自己観照と相待つて何時も日蓮聖人の如くならねばならない。

● 宿業はかりがたし、鐵は炎打て劍となる、賢聖は罵言して試みるなる可し。………（佐渡御書）〔自覺自信〕

日蓮聖人が勘氣を蒙りて佐渡に流罪せられたこから自ら宿業はかりがたしと御悟りになつて居る。——偏に先業の重罪を今生に消して後生の三惡を脱れんするなるべし——と自覺卑下して居られるのである。そしてこの卑下せらるゝうちにも鐵は炎打ちて劍となり、賢聖は罵言して試みるなる可しと固い自信を表はされて居る。正法の正法たる所以を少しも知らないで只怪僧であるこ

●自覺自信

ふ位くらゐのここから日蓮聖人にちれんしょうにんを流罪りゅうざいに處しよした時の執權北條時頼しつけんほうとうさきよりの心を怨むにくむと共に、何等疾なんらやましい所ところもない清淨潔白せいじやうけつぱくの聖人御自分しょうにんごじぶんが今いままでに何かなにか罪つみをつくりたる因果いんぐわだと思おもへば決してこの罪業ざいげふは借り置くべきものでないまう申まうさるゝ御心の美うつくしさには吾々われくは先づ聖人の御心を察さつせざるまい。そして鐵が炎てつに打うたれて劍けんとなるがやうに、吾れ自らもいでや種々の罵詈雑言はりたうざうやうの厄やくに會あつて自らを試こまみて尙なほ鍛きたへ上げねばならぬまう御決心ごけつしんせられた雄々しい御心ごこころは實に懦夫にふを樹たたしめるであらう。自覺じかく自信じしん勇往邁進ゆうわうまいしんの三つが茲こゝに一丸ぐわんとなつて益々佛の爲ために身を供まかうするに至いたらしめるので、かくてこそ始めて聖人の聖人たる以所よし申まうし上げることが出来るのである。吾々は今何を自覺じかくしつゝある乎。吾々が自ら信しんずるものごはそもく何なのであるか。何なにに向むかつて吾々は今後勇往邁進こんごゆうわうまいしんすべきであるかと思おもひを日蓮聖人の當時にちれんしょうにんたうじに及およぼさば、吾々はわれく大に寒心かんしんする所ところがあるであらう。それは自我じがを捨てた没我ぼつがの境きやうである。没我の境ぼつがのきやうに入いつて現實げんじつの濃厚のうこうなる自

●自信

我がよりも尙なほ清淨せいじやうにして美麗幽遠れいゐゆうゑんなる自我じがを獲得かくとくすることである。耽溺たんできに迷まよふて氣分きぶんに酔よふ自我じがよりも清新せいしんにして永續ねいきし行く透明無色とうめいむしきの氣分きぶんに酔よふ自我じがそのものである。吾々は茲こゝに斯かく自覺じかくして固かたく信しんずる以上いじやうはそこに勇往邁進ゆうわうまいしんせねばならぬではないか。

●蒼蠅驥尾そうようきびに付ついて萬里ばんりを渡わたり、碧蘿松頭へきらしんとうに懸かりて千尋せんじんを延のぶ。

……………(立正安國論)〔自信〕

蒼蠅驥尾そうようきびに付ついて萬里ばんりを渡わたるこゝは後漢書こうかんしよに——蠅之飛不はいのとびず過ほ二數步すうすう、附つ二于こゝ霸之尾はのび乃すなはち騰とび二千里之路せんりりのちをのぼる——又史記またしきに——顏淵雖がんゑんすい二篤學とくがく一附つ二羸尾れいび二而行益顯ふりてやくあらはる——  
 こあるより見るみに俊すやれたる人に附ついて學まなぶこゝをいひ、碧蘿松頭へきらしんとうに懸かりて千尋せんじんを延のぶこゝは劉りう 新論しんろんに——碧蘿附へきらせいし二於青松よせいしう一以茂もつ二凌雲之業りやううんのげふし——こあるより、倚よらば大樹たいじゆの蔭かげいふ意味いみの表おもてを云いひたるがやうである。日蓮聖人にちれんしょうにん自ら卑下ひげされて蒼蠅そうよう、碧蘿へきらに譬たとへ、道善密師だうぜんみつしに就つきて眞言宗しんごんしゆを學まなばれ、鎌倉光明寺かまくらこうめうじの然阿上ねあじやう

●自信

人良善に就きて淨土宗を、叡山に登りて尊海、心賀兩師につき、尙、横川定光院にて、天台宗の奥義を極め、又道元禪師に曹洞禪を、圓爾禪師に就きて臨濟禪を究め、南都七大寺に遊んで華嚴、法相、三論等の六宗の教義を究め、高野山に登りて眞言宗を、東寺仁和寺にて眞言の教理を修められて、遂に法華經の實教たる所以を確認せられ一身を法華經の躰現に資するに至りたるを驥尾に付いて萬里を渡り、松頭に懸りて千尋の延ぶこ比論せられたのである。されば日蓮聖人は——弟子一佛の子こ生れて諸經の王に事ふまつる——ご申されて自信の程度を示されたればこそ——何んぞ佛法の衰微を見て心情の哀惜を起さざらんや——ご歎かるゝのである。

自信は經驗の賜である。經驗は凡て人間の智識の根本なるものである。云はは云はずとも明かであらう。迷ふご云ふは智識に動搖を來たしたが爲——云は明に知らざるの反証なるものである。迷ふ時には人は速に迷はざる程度に

●自信

知るごごが必要である。この必要を知つた時、人は物事を究めたくなる。此れを究めるごごの第一歩ご云ふ。一步を究めても未だ腑に落ちず、絶えず疑問を以て進む時は人は進む丈それ丈迷ふごごより遠つて來るのである。そして遂に全然迷より覺醒して茲に大悟徹底するに至るのである。幼より佛教に對して果して何れが實教であるかご迷ひに迷ひ、各寺歴訪しては先覺師達に此を究め、尙十二分ならざるを知つて精勵刻苦遂に大悟徹底し給ふた日蓮聖人は確固たる信念の基から諸宗の亞流を痛罵せられたのは寧ろさもあるべきごご、人は思ふに至るであらう。願れば現代果して日蓮聖人が如き確固たる自信に樹立して一世を指導する者があるであらうか。學者は金で賣られ、僧坊は死者の多からむごごのみを希ひ、世は滔々としてお金の威光に左右せられて居るのを見れば吾はせめて日蓮聖人の氣概を學びて大に期する所がなければなるまい。誰れか一世を誘導し民衆を、より以上に安息せしめ得る者がないのであらうか。權謀

● 覺悟決心

○術數の外の處世の要訣なきが如き末世の現代にありて、赤裸々に正道を指示するものがないのであらうか。東漸しつゝ今尙紛糾せる新舊思想の衝突渦中に投じて煩悶し懊惱しつゝある幾多の新しい人達を救ふ者はないのであるか。舊信仰地に落ちて新信仰未だ起らず、幾多の宗教殆んど權威なきこの過渡期の日本にあつて吾々は今少しく日蓮聖人の所信に學ぶ所があるであらう。

■魚は命を惜む故に池に栖むに、池の淺きことを歎いて池の底に穴を穿りて捷む。然れども餌にはかされて釣をのむ。鳥は木に棲む、木の低きことを怕ぢて木の上枝にすむ。然れども餌に欺されて網にかゝる。人もまた是の如し。世間の淺き事には身命を失へども、大事の佛法などには捨ること難し。故に佛になる人もなかる可し。……(弟子檀中第二書)〔覺悟決心〕  
心から生る人こそかきこけれ、死ぬる人こそあほうなりけれ——黒住宗忠

● 覺悟決心

が歌つたやうに、詰らぬことに、身を捨てる人がよくある。由來日本人は外人と異りて、自分の命を何んにも思はぬやうで、殊に武士に來ては櫻の花にも譬へられる位に生命には余り執着がないのである。如何にも未練がなく男らしい華かさ、死の前に披歴されるのは、此の話を聴いても心持は善いが、併し一向感心せぬことに軽々しく身をなくして了ふのは余り見上げた事でもなからう。借金に詰つて自殺するのもその一つ。この世で遂げられぬ男女が未來に夢みる情死もその一つであらう。如何にも同情すべきことは了度餌に歎かれて捕はるゝ魚や鳥を見たときのやうではあるが、餘り感心するほどの事でもない。恚ういふ詰らぬことに身を殺すよりも、何故に國家の爲、天下の爲、乃至は一層思ひ切つて一切衆生の爲に自分の身を殺し、自分の身を犠牲に供しないのであらうか。十九の御年に出家しました釋尊は御入滅八十歳に至る間は凡ての人の爲に御自身で苦行難行せられ、衆生も迷はざるやうに萬古不易の教訓を垂れ

られたではないか。吾々凡夫の如く等しく眼あり耳ある肉躰を有せらるゝ御一身にも拘らず、喰ひたいものをも召されず、着たいものをも着られず、只衆生の幸福の爲——人の行末幸あれど願はるゝ爲に一身を犠牲にせられ、死しても悔いない御心で最も意義ある御生涯を遂げられたのである。虎は死して皮をのこすに習つて斯く云ふのではないが、凡夫のあさましさには、二度も生れてこの世に出るここの出来ない大切な身体を余り詰らぬ事に亡ぼして了ふこころが克くあるを見ては誰しも慙のやうに感ぜないであらうか。まして佛法に身を入れんごするものは素より死して衆生を救ふだけの覺悟がなければならぬ筈である。吾身自らに佛たらんご欲する者は、この覺悟と決心とに樹立せねばなるまい。日蓮聖人はこの意味の上から斯く魚や鳥に喩へて諭されるのであつて、この句の底に如何に深い意味が含まれて居るかは各自に解得する所がなければならぬ。

■ 螢火が日月を笑ひ、蟻塚が華山を下し、井江が河海を蔑り、鳥鵲が鸞鳳を笑ふなるべし。………(佐渡御書)「果斷」

この句は日蓮聖人が弟子を誡められた句で——日蓮御房は師匠にて御座せごも余りに剛し、我等は柔かに法華經を弘むべしと云はんは——ご申された句の後半である。衣を千仞の岡に振ひ、足を萬里の流に濯ふご、昔から云ふ丈夫の氣概を抱いて、法華經を弘むべしご、聖人は弟子に申されるのである。正々堂々一歩も呵責する所なく、勇往邁進すべしと諭されるのである。謗法を斥け正法に依つて一切萬事を判斷せらるゝ日蓮聖人こそは、吾々は仰いで師ごし、その一歩も許さずして正義に準據せらるゝ氣概こそは吾々が執つて學ぶべき所ではあるまいか。情々思ひ見るに、——廣く會議を興し萬機公論に決すべし。上下心を一にして盛に經綸を行ふべし。舊來の陋習を破り天地の公論に基くべし——等ご先帝陛下が五箇條の御誓文を下し給へる御威徳を奉躰するが臣民の執る

可き第一義であるにも不拘、正を曲けて私服を肥やし、直に従ふべきにも暗々裡に飛躍を試みて、民心を攪亂せる政治家や爲政者が多かつたやうではないか。今にしても尙憲政擁護に今更らしく努號する丈そこにあらゆる腐敗分子の畜積せられて居るを見て宜らう。何故正義に堂々として進まぬのであらうか。吾々が怪しむところ度々ある。一度濁世の現状を見れば、そこに五月の螢が月を笑ひ、夏の蟻が山を崩し、井戸や河江が河海を嘲るが如く、烏鵲が鸞鳳を笑ふやうな事が、いくらでも出て来る。眞綿で首も、曲を矯めるには一つの方法であらう。されど何故正々堂々として天下に自己の所存を發表して世に問ひ以て邪曲に溺れる人々を引き揚げないのであらうか。一世を爲政し行く政治家も衆生を濟度し行かん宗教家も、無智なれば此を誘導し、智ありて曲に沈める者はよろしく聖人の如く吐責努號して天下を安らかにすべきである。河邊に飛び交ふ螢は日や月のみを笑ふて居るのではない。蟻は大堂高樓ばかりを倒して

居るのではない。惑亂せる時代を對岸視する爲政治家や教育家や宗教家が黙々として教へず諭さず導かざるを笑ひ嘲つて居るのである。江井は本土、九州、四國、北海道、臺灣を廻らす海ばかりを嘲けつて居るのではない。宇宙から見れば拇指にも價せぬ國土中で、致富強國の遠大なる志を抱かずして吾も吾も我利つく亡者を笑つて居るのである。舊信仰地に墜ちて新信仰未だ起らざるが如き現代には、何時か知らぬ間に蟻は出で、吾々の立脚地を奪ふて了ふとするのである。優柔不斷は大丈夫には禁物である。茲に日本國といふ題目がある。而して才智あり學藝に富める幾多の學者、政治家、宗教家中この題目を忘却して只私利になすみ邪曲に迷ふ者あらば、有識者は勿論平凡なる者も雖も、此者を正しきに直し、是に着かしめねばならぬのである。須く我が日本人は日本國といふ題目の下には何時も果斷にして、何事をも正實に處決するの氣概を持たねばならぬ。



第六

堅忍不拔 自制 刻苦 心の鍛練  
知足 反省 畏敬 忠告諫言

■臆病のもの大躰或は落ち或は退轉の心あり。……辨殿尼御前御書（「堅忍不拔」）

當つて碎ける丈の勇氣もなく、また持久耐忍の氣象もない者ほぎ氣の毒な人はあるまい。行く先は何うならうとも、吾今こゝに大志あり大理想あり大希望ありと覺つて、獅子奮迅の勢を以て努力奮闘する人は、假令、運命の手に翻弄されても何時か事の成就を期するであらう。また譬へ血氣の勇にはやらすとも、持久の策を講じて、恰も龜の歩むが如く牛の歩むが様に靜に努力勉勵する人は、假令、人が直に成就しても、あせらず、驚かすして最後の勝利を確實に獲得するであらう。獅子奮迅の勇を鼓すこゝも出來ず、されば云つて持久耐

忍の沈勇に努力しない所謂臆病者は、假令、如何なる大理想があつても、如何に完美的計畫が胸中に畫策されて居ても、何時かは自分の身を不自由に沈溺せしむるに至るのである。理想——勇氣——熱心の三要素が、兎角成功の捷徑たる以上は、茲に勇氣もなければ熱心もなく、優柔不斷にして處決するの氣概に乏しくては何うして物事を完美成就するこゝが出來やうか。中江藤樹が——願ひなく、又恐れなき心あらば、虎さへ爪をおくこゝろなし。——と歌つた。英國の俚諺に——常に恐怖するよりも寧ろ危険に向ふを可し——とあるのも、要するに蠻勇、沈勇の何れにしても、人生、須く勇なかる可らざるを教へて居るのである。まして生存は愈々激烈となり行く今日此頃の世の中では、素より徒食すべきに非る以上は、一刻も勇氣なくて据けないであらう。而して茲に沈勇を養ひ、翻然として人生の歸趣を悟り、あらゆる外部の刺戟に戦ふ克己と努力とを涵養するこゝが出來れば人物修養の目的自ら達し得られるのであ

● 自制

る。素より悟道の域に進まんとする者は、聖人の申されるこの一言、如何に猛省を促されたかを思ひ當るであらう。要は堅忍不拔の沈勇こそ人生の一要諦であると思はねばならぬ。

■人を怨むこと勿れ。眼あらば經文に我身を合はせよ。……………(開口鈔)〔自制〕

世界三聖の中釋尊の經文は、條理整然として終始一貫したものはあるまい。されば最古の言葉にして尙新しい味の存するものも、要するに理路の迷宮に入らず、言葉の温か味がある爲なること今更贅するまでも無い。而かも釋尊一代を通じて順次理路の階段を履むが如くに人生の歸趣を闡明せられた整然さは全く世界無双であること云つて宜い。この偉大なる所以に對しても、釋尊の經文の有り難さが、より以上の色彩を帯びて吾々が眼に映するものも無理はないのである。されば教へを説かんとして人より罵詈せられ、此を行はんとして人より打擲

● 自制

せられることも、吾々は美しい經文の眞心を拜するごに侮辱屈辱をも忘れて行くことが出来る。是れ全く釋尊の御教の偉大なるが故であると思はねばならぬ。日蓮聖人は幾多の迫害に遭遇せられた。罵詈譏は物かは、刀杖の危害流罪の屈辱をも受けられたのである。素より日蓮聖人は法華經の行者——佛教の行者——釋尊遺訓の行者として樹立せられたのであるから、此等の罵詈譏、謗、危害、屈辱、侮辱は意に介せられることはあるまいが、それでも日蓮聖人は矢張り一個の人間である。血管に血液の流動する人間で等しく赤色は赤色に映する両眼を有せらるゝ人間である。吾々凡夫が喜怒哀樂の情に趨らるゝ如く聖人も喜怒哀樂の情に趨られるのは當然である。何うして血管を切斷し脳層を切り破りて骸骨の如く神經の消失せる白痴でもない人間である以上は、人よりの侮辱や屈辱を受けて黙し得らるべきものでない。但し、吾々凡夫こそその偉大なるや如何の差はこの句の「人を怨む勿れ。眼あらば經文に我が身を合はせよ」

言はれたるが如き信仰の有無深淺にある。既に法華經の實教たる所以を深く究められて茲に不動の格言を述べ、自ら法華の行者にならんこし給ふが如き深い信仰——鋭い決心は、侮辱や屈辱等によりて人を怨まず、寧ろ眼あらば經文に我が身を合はせて行なうこつこめられるのである。そこで吾々はこの句を誦するここによつて學ぶべき點がある。それは人より侮辱されたるときは、直に法華經を繙いて佛陀の聖音に接し、如何にして此を體現すべきやこ、全然自分の心理状態を變へて了ふこである。若し吾々にして日蓮聖人の如く、他を辨駁する丈の素養學識があれば、若し吾々にして日蓮聖人の如く世界三聖の聖典の粹なる佛陀の聖音を克く咀嚼せる者ならば、素より日蓮聖人の如く、正々堂々こ正面より曲を矯めて正に導き、或は又慈悲の眼を以て徐々に誘液するこも出来るであらうが、未だ日蓮聖人の如く、「念佛無間」「禪天魔」「眞言亡國」「律國賊」こ喝破し得る丈の學識素養のない吾々は、聖人が人よりの罵詈譎誘侮辱侮蔑を

受くるに經文を見て體現せらるゝよりも、尙以上に此を體現せすばなるまい。「人を怨むこ勿れ。眼あらば經文に我身を合はせよ」この金の言は、凡そ眞理を愛し、釋尊を尊敬し、而して自己を觀照するものには、寸刻も忘却し了はるべきものでない。自己樹立に忙しい今の新しい人達は假令體現するに至らずこ雖も如何に釋尊の經文を眼に入れて考へるであらうか。

■金は焼けば彌色まさり、劍はとげば彌利くなる。……………

……………(妙密上人御消息)「刻苦」

怠らぬ歩みおそろし蝸牛で努力の効果は蓋し偉大なものであらう。昔から兎こ龜の話もある。精勵刻苦は成巧の母なるこ今更いふまでもない。併し此に述べ置きたいのは十歳の神童二十の頃には俊才に止まり三十の年を數ふれば寧ろ平凡化して烏合の衆愚こ異ならぬ者があるこである。丁度黄金をそのまゝ捨て置きて顧みず、刀劍をみがゝすして赤錆こなすやうなもので、此れは主こ

して練磨の努力を爲さぬからである。双葉より香しい梅檀を培はずに枯死せしめるがやうに、自覺して一大光明をもたらさんとする覺悟を有しながら何等の努力も爲さずして省みず遂に先の理想の千万分の一だも實現し得ないで終る者があるのである。又自己樹立に覺醒して、少なくとも社會の一員に耻ぢざる行爲を爲し、處世の妙を盡さうとする考を有しながら、何等精勵刻苦に身を處さないで放浪の巷に迷ふ者もある。等しく相當の地位や見識を保有し得られるにも不拘、只刻苦を欠き精勵を好まざるが爲に自ら沈淪せざるを得ざるに至るは歎しい事ではないか。思へば我が日本の青年に慙ういふ人が決して少數でなからうと思はれる。生活に苦のない富豪の子弟、云はゞ上流社會の家庭に育つた青年は何等刻苦の感念もなく、少しも精勵しやうとするの心もなく一生を過ごしやうとして居るやうではないか。又我が子俊童なりて子に眼のない親達は子弟に對して少しも刻苦精勵の實行を強ひやうともせぬものも居る。我が子弟

金の如し云つても、劍の如し稱しても、鍛練を欠しては我が子弟の愚昧に陥るばかりである。斯る者が多數あるよりも、現代では蝸牛のやうに怠らぬ歩を續ける青年を要するところ々々であるのだ。聖人の御言葉、今にして能く味へば、社會一國の木鐸を以て自任顔なる上流社會の者ごもは克く猛省する所があつて宜からうと思ふ。

■ 藏の財よりも身の寶勝りたり、身の寶より心の寶第一なり。…… (崇俊天皇御書) 「心の鍛練」

金の威力に恐れて、金を得やうとするのは人情である。お金があれば何事も出来る心得た人は、何うしてもお金を得やうとして蕩擻いて居る。兎角、金が物言ふ世界では、金がなくては物事が出来ず、お金お金喧しく云ふのも無理はない。併し、身體が弱くて始終お醫者の厄介になつて居ては何うであらうか。云はずとも明かであらう。よし、身體が強壯であつて、お金が澤山あつて

も、心神の鍛練が充分でなければ、その人は一生幸福であらうか、寄せ来る浮世の波に漂はされる毎に、神経が昇ぶるのみでは心淋しいではないか。數寄を凝らして作つた庭園も、昇ぶる神経の末端には嫌がられることもあらう。外部の刺戟に動揺して、自分自らを制するこゝが出来ないでは、如何に藏に財貨があり、身は強壯でも、その人一代は決して幸福とは云はれぬのである。世は生存の競争激烈である。素より身體の強壯を望むに非れば金を得んとしても得られず、素より心神の鍛練を履むに非れば、打ち寄する生活難を押し退けることも出来なからう。退いて單に心神の強健なるを願ひ、一日一日の修養に努力して其の効果を豫想し、茲に心の鍛練に傾注するこゝが出来たら、恐らくその人は一生の幸福であらう。若し全然、金を得るこゝいふ事に着目せず、聖人の申されるが如く、心の寶第一なりと心得て、務めて心の鍛練に身心を傾注すれば、何うなるだらうかと思ふて見るのも宜い。さすれば、わが職業を愛し、生命を

樂しみ、刻苦精勵の効成りて、一家繁昌は請合はる。心は常に余裕ありて物に動揺せず驚かず、修羅の世の中でも、三分に見て三つて、身神常に豊かであらう。素より綺羅を装る要もなければ、形式に泥む必要もなからう。心の寶が大事も思へば鍛練の要、自ら明かである。

■日出でぬれば灯火詮なし、雨ふるに露は何の詮かあるべき。嬰兒に乳より外の物を養ふべきか、良薬に又薬を加ふる事なし。

.....(上野殿御返事) (知足)

松平定信が——事足れば足るにも慣れて何くれと、足るがなかにも猶なげかな——と歌つた。それで充分であるのに、尙余計に望み、無暗に欲しがる人の心の中を歌つたものであるが、その通りである。男の財貨に心を焦すのも、女の衣服に思を焼くのも、丁度愆ういふ心持であらう。生命を繼ぐに、さして不自由のない身分でも、儲かる三人から聴けば眼を怒らして宇頂天なる男も居

れば綿布で寒暑を凌ぐにも決して不自由でもないのに、この頃の模様はこれが流行です。呉服屋の番頭に云はれば、堪らなく欲しくなり、あの方も恚ういふものを着て居られるから、自分も工夫を惱す妻君も随分世の中には澤山居るのである。素より財を貯へ金を儲けることも人の向上発展には精極的の動機を與へるものであるから悪くはない。女の優し味に生きて、美を表はす點に於ても、より以上の着物を着るのも悪くはない。併し、只、慢然と五欲に誘はれて凡夫の淺間しさを赤裸々に表はすのみでは一向褒めた話でもなからう。財貨の多き所に住んで、又、華麗なる衣服を纏ふて、より以上の心よい氣分に人生を送るのも、決して悪いとはいはぬが、何故、一層心機を光風霽月に寄するがやうに、よし身は綿布をまこひ、口には麥飯を喫することも、先哲名家の後を追ひ、無限の法の音に耳を傾け、靜に、きよらかくその日くを樂しむ氣分に人生を送つては悪いのであらうか。經驗は凡ての人生を語るものである。波亂に富

む經驗に飛び込んで自分を觀照したい人は云はずもあれ、少くとも、大地を心樂しく歩みて、靜にして閑なる氣分に自分を据き、太平に世を送らうとする人は、何故に心の便りを捨て、物質のみの方便によりて心の平靜を保たうとするのであるか。心さへ平靜を望んで世を太平に送り度のは凡て人の望む所であらう。さすれば吾々の目的は心を平靜にすることにである。それには、物質の力を借らずともなし得らるゝではないか。いかに外に生活難の嵐が吹きささぶとも、自若たり得る方法がいくつもあり得るのだ。足るを知ることも、その一つ。心を養ふ良薬は只一つの足るを知る。ここから第一歩こせねばならぬ。今聖人のこの御言葉を誦して、物質以外に力を借りて心を平かにし世を安樂に送り得らるゝ方法を得た。されば吾々は松平定信の歌に再び此の句を讀んで心を養はう。

■法華經の二處三會の座に在し、日月の諸天は、法華經の行者出

●反省

來せば磁石の鐵を吸ふごとく、月の水に遷るが如く、須臾に來つて行者に代り佛前の御誓を果させ給ふ可しとこそ覺わ候に、今迄日蓮を訪ひ給はぬは、日蓮法華經の行者にあらざるか、されば重ねて註文を勘へて我身に充て、身の失を知る可し。……………

……………開目鈔〔反省〕

是れ日蓮聖人が「人を怨むこと勿れ、眼あらば經文に我身を合はせよ」三人を誠しめらるゝと共に自分を誠しめらるゝ御言葉である。靈山、虚空の二所、虚空會、前靈山會、后靈山會の三會の座に在し在した諸佛は一向日蓮聖人を訪ね給はず、待てごもく、甲斐なきを斯くは歎ぜらるるのではあるが、一面この御言葉のうち鋭い不平の聲が籠つて居るのである。念佛三昧に懲り固つた當時の人々の、聖人が斯くも堂々として慨世の聲を放つに拘はらず怙然として耳傾けざる不實さを歎かれるのである。聖人自らは法華の行者である。自任すれども、

●反省

人此を許さぬのであらうか、又諸天の訪ね給はぬのに比べては我が自信が早や過ぎたのであるまいか。歎かれ、そして尙この上にも經文を読み誦して、此を實行せねばならぬ。覺悟せられたのである。我が過ち我が行の足らぬ所は、一々光りのまばゆき經文の鏡に照して、如何にも汚れ曇れる所を矯めやうとせらるゝこの貴い御覺悟——各宗の奥義を究められて、諸經に曉通せられ、忽然として自信自立を叫ばれた後でも尙經文に通ぜざる所があるやも知れず申されて、斯くも自省觀照の度を深めらるゝこの貴い御言葉——偉人英雄の襟度は實に此の點にある。吾々は學ばねばなるまい。ライオンの吼ゆるが如く天下を怒號せられた日蓮聖人、何一つ經文を誤讀したこともない。大事を踏んで後の御主張が一顧の價をも齎し得ずして危害迫害のみを買はれた日蓮聖人、血を見て赤き心の涙もあればこそ、羊の如く我身に失あるやも知れずと思はれて斯くは反省せられるのではなららうか。我身の失を明かな經文の鏡に照して矯正せられ、

飽くまでも法華の行者——釋尊の行者——天下民衆の爲の行者として樹立せねばならぬ。申されたるこの御言葉は實に懦夫をして奮起せしめらるゝ。云はゞ自己一身の性慾等は全然放棄せられて、只人の爲、民の爲、國の爲、社會の爲に四六時中、足らざる所は補はれ失あらば此を明かなる經文に照して矯められ何所までも愛——慈悲に樹たなければならぬ。奮起せらるゝのである。吾々凡夫の奮起するそもくゝの動機は何んであらうか。現代の民衆の奮起し努力しつゝあるものは何んであらうか。此を思へば吾々は自ら襟を正して日蓮聖人の御言葉を拜誦せずばなるまい。簡易質素にして神身の健在を進め行く簡易生活を捨て、只性慾の充實を擴大せんが爲にお金を得んとする一般民衆——衣食住は實用に止めて、精神的により豊富に、より偉大に向上してこそ茲に偉大なる人格を生ずる所以を知りつゝ、索めて衣食住も、より贅澤にして露ほごも人格養成に顧慮せざる一般の四衆は、人の爲、世の爲に足らざるを補ひ、失ある所

を矯めらるゝこの日蓮聖人の御言葉を朝夕にも拜誦して顧慮する所があらねばなるまい。

■大木の下の小木、大河の邊の草は、正しく其の雨に當らず、其の水を得ずと雖も、露を傳へ、氣を得て榮うる事に候。……………

……………(崇峻天皇御書)〔畏敬〕

寄らば大樹の蔭といふこじがある。巻かれよ長いものこ、克く人がいふこじである。聖人は釋尊は決して悪い事をお教にならない。寧ろ幾世經つても盡せぬ人の行ふべき道を作られたのであるから、佛の呼ばるゝ聲の方へ、招かるゝお手の方へ行けば、必ず御利徳があるのだと説かれたのである。丁度大木の下の小きな木や、大河の邊の草は、假令、天から降る雨の水にあたらななくても、何處からさなく露を得て榮ゆるやうなもので、自分で覺るここの出来ない人は、欺かれたと思つて佛に教へられるまゝに佛の道をふめば何處もなく眞の



人間さなり榮ゆるのだこ申うされるのである。またそう爲つて榮けた人も随分世間に入り、寧ろ佛の道に入つてありがたからぬ人がないのも、皆人の知る所であらう。この有り難いといふ畏敬の念が知らずくゝに自分の心を美しくして佛の御心と一緒にするのであるから、夢にでも佛をそまつにしてはなるまい。殊に總ての眞理を縦横自在に闡明せられた功績に對しても、須く襟を正して吾々は敬はねばならないのである。

■夫れ小兒に灸治を加ふれば必ず父母を怨む、重病の者に良藥を與ふれば定て口に苦しと憂ふ。……(開目鈔)〔忠告諫言〕

孔子が良藥は口に苦く諫言は耳に逆ふと云つたやうに日蓮聖人は國諫して北條氏の耳に逆ひ、遂に佐渡に流罪せられた時、この御言葉があつたのである。日蓮聖人の自信から出發した「立正安國論」は素より最初の國諫であり劈頭の良藥であつた。爾后、豫言適中より堂々國難の豫言萬象の豫言適中を指示して

國諫頻りであつた。此の國諫こそ、小兒の灸治、重病者の良藥であつた。されば灸治を受けた小兒の怨は龍の口の法難に表はれ、良藥を受けたる重病者は悉く「日蓮怪僧」なりと叫ぶに至つた。併し、日蓮聖人は佛の守護によつて何等の損傷を受けず、寧ろ此等の法難や罵詈譏は却つて自信を強固にせしめ、益々自己の信仰を赤裸々に表白せられ、より以上の良藥より偉大なる灸治を施こされたのであつた。されば北條氏は遂に日蓮聖人を佐渡に流罪せしめたので、日蓮聖人は左の如く法華の已往を追想されて自省考量を廻らして歎ぜらるゝのであつた。——像法(佛滅千年以後の壹千年間)の中には天台一人法華經一切經を讀めり、南北(宋以後隋の統一するまで隋を南朝、後魏を北朝といふ)此れを進しかぎも、陳隋二代の聖主眼前に是非を明め給ひしかば敵遂に盡ぬ。像法の末に傳教一人法華經一切經を佛説のごこく讀み給へり。南都七大寺(奈良の東大寺、元興寺、興福寺等)蜂起せしかぎも、桓武乃至瑯瑁等の賢主我ご明め給し

●忠告諫言

かば又事なし。今末法(佛滅二千年以后)の始め二百餘年なり。況滅度後の兆に  
 鬪諍の序なるべき故に非理を前して濁世の驗に召し合せられずして流罪乃  
 至命にも及ばんとする也。されば日蓮は法華經の知解(知會三全)は天台傳教  
 (天台、傳教兩師)には千分が一分も及ぶ事なれども、難を忍び慈悲勝れたる  
 事畏をも懐きぬ可し。定て天の御計に預る可し存すれども一分の驗も無し、  
 愈々重科に沈む。還つて此の事を計りみれば我身の法華經の行者に非るか。又  
 諸天善神等の此の國を捨て去り給へる旁々疑はし。併し日蓮聖人は確固  
 たる自信に基いて——今の世を観るに日蓮より外の諸僧、誰人か法華經に付い  
 て諸人に惡口罵詈せられ刀杖等を加へらるる者ある。——經文に我が身符合せ  
 り、御勘氣を蒙れば愈々悦を倍すべし。例せば小乗の菩薩の未斷惑なるが願  
 兼於業中申して、造りたくなき罪なれども父母等の地獄に墮ちて大苦を受くる  
 を見て型の如く其の業を造つて願つて地獄に墮ちて苦しむに同じ、苦に代はる

を悦びす。此れも又斯の如し、當時の責は堪ふ可くもなれども、未來の惡道  
 を脱すらんと思へば悦ぶ也。——益々法の爲に操を曲げざる雄々しい心を抱  
 いて、尙小兒に灸治を施し、重病者に良藥を與ふる慈悲の焔を燃やされるの  
 である。想ふに現代には灸治を加ふ可き幾多の小兒は居ないだらうか。又良藥  
 を與へねばならない數知れぬ重病者は居ないだらうか。爲政者、代議士、實  
 業家、僧侶、神官、教師の中にもないとも限らぬ。所謂偽君子、偽善家は云は  
 ずもあれ、羊頭を掲げて狗肉を賣るの類には誰れが灸治を加へ良藥を與へる  
 だらうか。今この句を誦して日蓮聖人の如き大英雄の再現を望まざるを得ないの  
 である。

●眞の親

第七

眞の親 親の愛 夫婦 選師選友 教育  
圓滿 健康 清淨 貞操

【子に過ぐる財なし、子に過ぐる財なし。(千日尼御返事)〔眞の親〕  
希臘の哲學であつたアリストテレスは親子に就いて——親は自分の一部分として其の子を愛し、子は生んで呉れたものとして親を愛す。そして親が自分の子を自分の産んだと思ふ心は、子が親を生んで呉れたものだと思ふ心よりも強く、生んだ者は生まれた者よりも肉親の感じが鋭いものである。それこいふのは生んだ者を自分のものだと思ふからで、またそう思はぬ者はなからう。歯牙毛髪に至るまで人は親のものだと思ふて居るのにも明かであらう。所が生れた者は生んで呉れた親を我が物だと思ふ者はなからう。若し仮にあつたとしても極く思ふ者の心は微弱なものである、尙親が子を思ふのこ、子が親を思ふのこ、その間には時間の長短がある。親はその子を生み落したそれから絶えず子

を愛するが、子はいくらかの年數を経て、相當に智能が発達してからでないこその親を愛しない。母の子を愛するこが何故に父よりも強く鋭いかは推して知らるゝであらう——こ説明した。こに年數を経て相當の智能が発達してからでないこがある。譯も分らぬ小供に親のいふこを聴けこいつたり、聴かすば強いて腕力に訴へて迫る親も随分居る。既に親なるものは自分の子を相當に養育し教育するの義務がある。この義務を果し得ないのは丁度自分の所持して居る他のものを何う處置して宜いやら分らぬものであらう。何うしても、この義務を遂行せねば自分は親なる資格がないのであるが、わが物大事と思ふ心があつても、親は親、子は子として憚らず自分の仕度放策に振り舞ふ親もある。自分が親として全精神を子に打ち込み、所謂情なるものを最も善良に施して、最善を盡した後に子を一個人に見て了ふのは寧ろ頭の宜い親であらうが、世間には随分目先の見ぬ情をかけたたり、又は全然子を顧みない親も居るので、

## ●眞の親

或る教育者が、殊に日本では子を教育するよりも、寧ろその親から教育せねばならぬと歎くほどの頭の悪いものがあるのだ。多くの財貨を投じ、幾多の精神を注いで完全に子の個人たる資質を望むのは、丁度自分のものを最も旨く處置したことに當るのであるが、全然子の個人たるの資質を望まず、仮令望むにしても人に一任したり、或は情に趨つて智に鞭たす、智恵はあつても意志の修養を欠かして見たり、又全然意志の修養のみを子に要求して智情の發達を欠かして見たり、或は子の時節時代を顧みないで舊い經驗を経こして見たり、博く時代の趨勢を洞察して國家の一員としての子を望まず、時には全然社會の心裡に相背馳せしめて、等しく子を社會上の個人たれと望むやうでは、全然子を完美なる養育に一身を投じたものも云へないのである。是れでは養育教育に最善を盡し得たりとして親の義務も完了したことも云へないのである。聖人が子に過ぐる財なしと申されたる言葉は、眞實に子を理解し眞實に完美なる養育を施して後こそ、始めて吾々が子を唯一の財寶として見るここが出来るのであると申されるので、況して完全に養育もせず、教育もせずして子を財貨の満てる藏ご全様に心得、老いて子より養はれんとする者は、誤解も甚しい極みだといはざるを得ぬであらう。

## ●親の愛

子を思ふ故にや、觀楓の木を以て學文せざりし子に教へたり。然る間此の子無情かりしは父、憎かりしは楓の木、されども終ひには修學増進して自身得脱を究め、又人を利益する身となり、立ち還りて見れば、楓の木をもて我を打ちし故なり。此の子卒塔婆に此の木をつくり、父の供養の爲に建てんけり。見ねたり。

……………(上野殿御返事)「親の愛」

或る人の歌に——踏まれても根つよく忍べ道芝の、やがて花咲く春は來ぬべし——とある。踏んだ人の足は憎からう。踏む人の心は無情なりと怨むであら

う。されど花咲く春の頃には、人は踏む足を除け、屈みてその花の匂を嗅ぐであらう。踏まれても、蹴られても、待つ春の草の心は人でも全じであらねばならぬ。この心を昔から勘忍——忍耐——克己なき、稱へて、一時の苦を忍べし教へられて居る。併し、新しいこの頃の人は何故に一時の苦を忍ばねばならぬのか、吾々は苦そのものを苦として尊び、これを強いて隠すのが本意でない、苦しければ苦しいと云へばそれで吾々の心持が分るではないか、それを強いて押し隠して何になるか云ふであらう。それには理屈がある。確にその人々が云ふ丈の理屈はある。苦しきを苦しからずといふのは素より詐である。赤きを見て青しといふが如きであらう。併し、茲に現在の虚偽を以て未来の眞實をより以上に握るここが出来る。又それにしても、強いて現在の虚偽を敢てする事でもない。苦しいと云つても、怒號しても、これを忍びさへすれば宜いのである。忍んで待つ春の草のやうに自分をより以上に表白すれば宜いのだ。より以

上に表白することは、より以上に観心自得してからの事であればならぬ。決して安心立命の爲ではない。決して悟道徹底せんが爲ではない。又心の修練を期せんが爲ではない。あらゆる哲學者が究めに究めやうとする人間の智識、人間の情緒、人間の意志を一丸として、丁度薬を呑むがやうに自分の精神に呑んで了つて、自分の精神内容を充實するにあるのだ。この精神内容が何時も充實さへして居れば、何時でも安心立命も出来れば大悟徹底の道に居るのだ。寧ろ神経過敏を願ふこの頃の人は、自然に人生が圓く圓くなつて一丸なる所に眼を注ぎ、より以上の自分——云はゞ精神内容の充實をはかるやうに努力すれば、こゝに苦しいといふ事實を尊重し、心持氣分を克く理解するところが、より以上に明瞭に、有意義になるであらう。さればかの一時克己せよと教へ、暫し忍耐せよと諭す親は、よし自分が憎しと思ふ木の弓も、無情なりと思ふ父も云はゞこの自分の精神内容を充實せしめらるゝが爲、より以上の自分とせらる

ゝが爲であると思へば、そこに觀心自得の妙を感じ、克己——忍耐——勘忍の須要なる所以が分るであらう。杖で打たれて苦しいと思ふ感じは誰れしも全じである。うごましと思ふ心は皆全じであるが、斯く思ふなごは云はぬが、思ふころから更に轉じて自分の精神内容を豊富にせねばなるまい。花よ蝶よ我が兒を育つ世間の親達、我が子の精神内容を何時も豊富に充實せしめるやうに、果して教育して居るだらうか。一時の愛を捨て、眞實に我が子をより以上の子にせしめやうとして居るだらうか。子と共に親そのものを誠しめねばならぬ世の中云つて宜からうご或る人は云つた。

●倍は男は柱の如し女人は桁の如し。男は足の如し女人は身の如し。男は羽の如し女は身の如し。羽と身と別々に成りなば何を以てか飛ぶべき、柱倒れれば桁地に落ちなん。家に男無ければ人の神無きが如し。公事を誰れにか云ひ合はせん。……………

……………(千日尼御返事)「夫婦」

昔の人の句に——腹のたつ人に見せばや池の鴛鴦——こいふのがある。夫婦は何時この鴛鴦のやうにあり度誰れも願ふであらう。易經に——天地ありて萬物あり、萬物ありて後に男女あり。男女ありて然る後に夫婦あり。然る後父子あり君臣あり——こある。釋尊は——夫の妻を敬親するに五つある。一に待つに禮を以てするこご、二に威嚴を闕かざる事、三に時に従つて衣食せしむるこご。四に時に従つて莊嚴らしむるこご、五には家事を任すこご。妻の夫を恭敬するにも五つある。一には夫より先に起きるこご。二には夫より後に臥すこご。三には言を和けるこご。四には敬順なるべきこご、五には意を先にして旨を受けるこご(六方禮經)——こ夫妻お互に守るべき道を指し示されて居る。何故夫妻の存在せざる可からざる理由や夫妻相和せずばならない理由等は茲に云ふ必要もなからう。一度聖人のこの御言葉を誦せば自ら明かであらうが、何

は儲、兎角夫婦喧嘩の絶わぬ家庭も多ければ、離縁沙汰も統計では結婚数よりも多数だ。示して居るのを見るに、人云ふものは案外に詰らぬ。ここに心を奪はれて居るものだ。いふ事が分る。何故に慙うも夫婦喧嘩が絶わぬのであらうか、何故に斯くも離縁沙汰が多いのであるか。と思へば、寒心に絶わぬ次第であるが、是れ、その時々の気分心持をそのままに表白して、眞實に心持を相解しない罪に座す。ここは明かであらう。夫婦相和すの秘訣は他でもない。夫は婦の心持を察し、婦は夫の心持を察するにあるのみだ。それを此頃の新しい女の叫ぶがやうに、自己本位で夫の愛を得やうと望んだり、夫を自分のものにして、了ふとするから和合が起らないのだ。自覚した。いふ新しい女でも、結婚以後は新しくは到底出来ない話だ。我に自由を望み、男も同等に生きやうと願ふならば、今日の場合素より結婚を望みても詮なからう。夫婦の間にあつてお互に心持を察せないで、お互に自由を望むやうでは、殆んど夫婦の成立は望まれ

ない。夫婦の成立はお互の融合にあるであらう。お互の融合は眞實にお互に相解して居ねば望まれぬ。自己自我の旗を押し立て、は到底夫婦の成立を望み得ないのは當然の理である。何んとなればお互に和合の理は身を挺して生れるからである。即ち仮令時々気分が變るにしても、夫は婦に自己を余りに要求せず、婦は夫に自我の請求を捨て、こそ茲に始めて愛の成立が出来るからではあるまいか。釋尊が衆生を相手として愛の成立を望まると釋尊の御心の如く、男は女に接し、女は男に接してこそ相愛の情が増のである。天地間、素より夫婦の必要がある。男女お互に相解して夫婦の本領を發揮し得ば、常に日蓮聖人の喜こばるゝのみならず、釋尊また永生に相愛の情を愛でられ、鴛鴦の姿を守らるゝであらう。

■如何に我が身は正直にして世間出世の賢人の名を取らんと存ずれども、悪人に親近すれば自然に十度に二度三度其教に隨ひ以

て行くほどに終に悪人になるなり……(最蓮房御返事)〔選師選友〕  
 希臘の名高い哲學者ソクラテスは——人々のうちには金錢を得やうと望む者もあらう。又は馬を得やうと願ふ者もあらう。或は犬を望む人もあつて種々色々である。併し、その人の爲に益友を得ることは、前數者を合して得たものよりも優るものである。——と云つた。朱に交れば赤くなる。日本では昔から友人を選ぶことを誠めて居た。日蓮聖人は弟子を誠められて——設、徳は四海に齊しく智慧は日月に同くとも、法華經を誹謗するの師を惡師邪師と知りて、是れに親近すべからざる者なり、——と誠められた句に次いで——惡人に親近すれば自然に十度に二度三度其教に隨ひて行くほどに終に惡人になる也——と申うされたのも、證する所は師は友であるその人を選び申されたのに過ぎぬ。友として吾々が交る人に、三つある。一つは自分より目上の先輩、一つは同輩、他は目下のものである。同輩のみが必ずしも友でなければ、先輩又は目下の者

とて同輩同様に交はることもある。就中時には先輩として敬ふ時もあるれば同輩と全じやうに交ることもある。この先輩には殊更注意せねばならぬことを茲に附言して置く。俗に先生と云はるゝほどの馬鹿でなしといふ句がある通り案外先生といふものは何を知らぬ者である。世が文明となり事物が夫れ々々發達して行くのが、兎角激しい當今では、一から十まで哲學から宗教、文藝から科學、電氣の事から建築の事まで果ては醫學のここまで細大洩らさず知る事は容易でなく、また出來得べき事でもなからう。分業専門といふ事が重要視せられるにも徴して明であるから、先生といへば何もかも知つて居る人誤解してはならない。文學の先生は文學の事には無論明かであらうが、其れ以外のことは素より吾々同輩と全じやうである。工學の先生は工學を以て師とするので、要は只その人の専門——云はゞ我より造詣の深い點に於て敬はねばならぬのだ。人格修養に何等の權威をも有せない富豪を見て何にも彼も能く熟知せるものも心得



て、その者のいふまゝに叩頭して居ては到底賢人たり得やう筈もなからう。朱に交はれば赤くなるこいふからには、吾々が修養をなし人格向上を望む以上は、人格も完美し、積徳の効顯著なる人を撰んで、此れを師とし友もして向上發展せざるまい。

■人の物を教ふると申すは、車の重ければ油を塗れば轉り、船を水に浮かべて行き易き様に教へ候也。……(上野殿御返事)「教育」

なに事も養ひたてよ秋の田の、稻葉ももこは植し早苗を——松平定信は歌つた。獨乙の哲學者カントが——人は人によりてのみ人なるこが出来る。人より教育の結果を除き去れば全く無なる計りだ——云つて居る。一本の早苗でも育てばこそ、空澄み渡る秋には黄金の色を出して實るのである。人も眞實に教育せねば到底満足なる人間となすこは出来まい。然らば何う教育するか、何ういふ風に育てるか人の父となり母となる人は究めなければなら

ぬのであるが、法を説くものは、聴者の端視して渴きて飲むが如く、一心に語義の中に入り、法を聞きて踊躍し悲喜する者を見れば、應に爲に法を説くべし(智度論)——龍樹菩薩の申うされたのを應用して宜いのである。丁度、物重くして車たやすく廻らず、軸に火を出さん計りになつた時、油を注ぐがやうである。尤も啓發せしむべき少年時代にはそれ相應の方法手段もあらうが、素より人間は物知りたがる動物である以上は、渴きて水飲み度なるまで捨て、置いても遅くはないのである。受ける器あればこそ、水も入れられるのではないか。然るに船を水に浮かべて行き易からず一方に重く物を積むが様に注入することばかしの熱中した教育法も行はれて居たのである。これもあれも今このうちに脳味噌の中に鬱みこんで了はねばならぬ云つた風に注ぎ込んで了ふのである。丁度受け得られ易く出来上らない器に、器よりも、より以上の水を注がうとするである。されば若き壯しい青年が神經衰弱といふ病に捕はれてあたら貴

重なる青年期を空費せしむるやうになるのは、丁度器が破損して水を流して了つたのミ全じであらう。而して一方過酷なる道義の念で壓へつけやうとするのであるから、青年はたまたまなく苦しむのである。煩悩に泥んで離れざる人は死の前に至つて始めて大悟も出来やう。何時か知らねばならぬ時に遭遇すれば知り度なるものである。これを省みず徒らに注入ばかりを是れ事として教育するのは恐らく一を知つて十を知らず、幹を捨て、枝葉を論ぶ者のなすことであらう。誘導啓蒙も要するに器の完成し得られたときに待つて効あるべきもの、凡ての教育も其の根本はこゝに存するのだ。さるを省みずして、同一模型に入れんとするは、人を作らずして丁度人形を作るがやうである。事簡にして意深きは、抑も教育を措いて他に求むべからずであらう。

■法妙なるが故に人貴し、人貴きが故に所尊しと申すは是れ也。

……………(南條兵衛七郎殿御返事)〔圓滿〕

日蓮聖人は——釋迦佛は我れを無量の珍寶を以て億劫の間、供養せんよりは、末代の法華經の行者なりとも供養せん功德は百千萬億倍過ぐべしとこそ説かせ給ひて候に、法華經の行者を心に入れて數年供養し給ふこと、有り難き御志哉。(中略)其の上此の處は人倫を離れたる山中なり。東西南北を去つて里も無し。斯るいご心細き幽谷なれども、教主釋尊の一大事の秘法を靈鷲山にして相傳し、日蓮が肉團の胸中に秘して隠し持てり。されば日蓮が胸の間は諸佛入定の處なり。舌の上は轉法輪の所、喉は誕生の處、口中は正覺の砌なるべし。斯る不思議なる法華經の行者の住處なれば争か靈山淨土に劣るべき。——ご申されてこの御言葉があつたのだ。美妙にして圓滿完備せる教なるが故に、此を体現する人、素より貴く、貴き人居ればこそ、その所も尊き限りである。云ふまでもなく、日蓮聖人は幾千卷の佛陀の教の粹の粹なる法華經を体現せられやうとして努力奮闘せられたのだ。世間開闢以來、人の趣くべき所、歸すべ

き所を指示して今に至るまで絶対眞理なり三人より崇められたる佛陀の教こそ、世界に双なき點に於て、教の完實圓滿なる點に於て、恐らく世界に貴しきいふものゝ最も貴いものであらう。身は皇族に生れて何不自由なきに座し座す釋尊が年若き妻を後にして、御年十九に出家し給ひ、爾後あらゆる難行苦行を積まれて、人の寄るべき道、宇宙の歸すべき所をさし指され、御年八十にして御入寂被遊まで、須臾も人生對宇宙の關係を説かれざるここのない御行爲さへも、既に尊い極みではないか。この尊い釋尊の貼はれて渾身の勇を振はれ全身の血液を注かれ給ふた法華經そのものを、自自行者なりご自信自覺自任して、何を措いても法華經を体现しやうこせらるゝ日蓮聖人も亦尊くして偉大である。釋尊親なれば我子なり、されば釋尊の遺志を繼いで我れを行ふここの何條不思議のあらう筈がないご申されて、釋尊の御遺志の法華經にあるを觀取せられて、此を絶わす行はうこせらるゝのは、吾々から見れば決して貴からずご申

すここの出来まい。圓滿完美を望んで己まないのは人の心である。假令、波乱があるこも、波乱を統合して一つの圓滿になして了ふこいふのは是れ人の良心である。この良心のある以上は、法妙なるを知れば、法を説ける人の尊くして偉大であり此を繼承する人も尊く、従つて此等の人々の居住する所も貴く感ずるのは當然である。現在吾々が貴しきあがめ奉り、貴しき思ふてその所を敬畏の眼を以て見る所は幾何あらうぞ。俗に生佛といふ語がある。この言葉を現在使用し奉る人は日本に幾人あるのであるか。聞けば僧坊の墮落も、主宰するものの不行跡ばかりではあるまいか。世が進むご坊主も腐る。腐れる坊主に法的美しさが人に分らせやうもない。憂國慨世の士、我が國に多しご雖も、坊主の墮落を叫んで彼等を破門せよこいふたものがない。されば吾々が日蓮聖人の遺志を追想してここの御言葉を拜するの無理はなからう。

命と申す物は一身第一の珍寶なり。一日なりとも之を延るなら

ば千万両の金にも過ぎたり。……(依法華經可延定業)〔健康〕  
 英國の俚諺に——健康は富に優れり。健康は幸福なり。——とある。希臘俚諺に——健康ならざれば生命は生命にあらず——と云ひ、——健康は智慧は人の二大幸福なりとも云つて居る。身体が強壯でなければ何事も出来ず、何事も思ふやうにならない。人は感ずるのは今更云ふまでもない。千萬金の財貨を蓄へて居る人でも、身体が兎角、羸弱であれば、一日として愉快なきはあるまい。抑も健康は我が天職を樂しむ愛せしむる第一歩である。我が天職を愛すれば、こゝに克己忍耐の美風を興すと共に精勵努力の徳を養ひ得せしむ。昔から健全なる精神は健全なる身体に宿る。人の口に昇つて居るのも、要するに身体壯健なれ、一日も長壽たるを望め、誠めて居るのである。然るに、或る西洋人が——今日の如き急激なる時代にありては吾々は絶わざる掛念に注意の爲めに一層の苦痛を感ずると共に、只筋力を疲らしたる祖先よりも一層精緻

なる神経作用を要す(リットン卿)——といふが如く、外部の刺戟の爲に健康を保有することが出来ないは、現今は生存が激烈であるのだ。されば只健康なれといふ一つの教訓辭を人々に與へるよりも、如何にして健康を保有し所謂長壽し得、かの具体的方法が、より以上の痛切を以て歡迎されるのは當然であらう。何々の長壽法、何々の健康法といふものが出版されて相當に歡迎せられたのにも見ても明かである。併し、幾千の著述が出て、幾百の具体的方法が陳せられても、能くわが心の統一を期せねば長壽も得て望む可らざるであらう。病は心から出るといふのも、恙といふ消息を語るものである。丁度財貨あつて身の強壯なる人が心の動搖につれて、生涯安心ならず、平靜ならずして終るがやうで、わが身を統御する丈の心の鍛練があらば、百の具体的方法も何んの益にも立たぬであらう。要するに心が主である。而してこゝに身体強壯の具体的方法を得て、或は心の鍛練のみを以て身体の強壯を期すことも出来やうし、